

日畑廃寺

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第11集

倉敷埋蔵文化財センター

2005.3

序

倉敷市の北東に位置する庄地区は、市内でも最も遺跡の密集した地域で、とりわけ足守川の西側に位置する王墓山丘陵周辺には、橋築遺跡や王墓山古墳をはじめとする貴重な遺跡が数多く残されています。

中でも、王墓山丘陵の東麓に位置する日畑廃寺は、古くから大形の礎石の存在や優美な文様の古代瓦が出土することで広く知られており、白鳳時代に創建された市内最古の寺院跡として、昭和46年には倉敷市の史跡に指定されています。

現在、日畑廃寺周辺は王墓の丘史跡公園の日畑赤井堂地区として、芝張りや説明板の設置等の史跡整備を行うなど、倉敷市としてその保護活用につきまして尽力しているところでありますが、近年になって都市計画法の改正等の影響もあり、推定寺域の内側にも宅地開発の波が押し寄せてきており、遺跡の保存に向けて一層の努力が必要となってきました。

こうした状況の中で、倉敷市では日畑廃寺の保存及び活用に向けた基礎資料を得ることを目的として、国県の協力を得ながら平成15年度から16年度にかけて確認調査を実施いたしました。調査は、もとより限られた範囲での部分的なものではありますが、本書に記載しておりますとおり、2棟の礎石建物の存在や寺域の北辺を画すると思われる溝が確認されるなどの成果を得ることができ、改めてその重要性を認識することができました。

本書にまとめました内容が、今後の日畑廃寺の保護保存の資料として活用されますと同時に、こうした貴重な歴史遺産を広く市民に知っていただき、学術研究や生涯学習等においても活用いただけましたら大変幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査にあたりましてご理解ご協力を賜りました地元関係各位をはじめ、文化庁、岡山県教育委員会、指導調査委員の諸先生、また発掘作業に従事していただきました方々等に対しまして、衷心より感謝申し上げます。

平成17年3月31日

倉敷市教育委員会
教育長 田中俊彦

例 言

1. 本書は倉敷市教育委員会が国庫補助を受けて平成15年度から16年度にかけて実施した日畑庵寺の確認調査の概要報告書である。
2. 日畑庵寺は倉敷市日畑字赤井に所在する。
3. 発掘調査は、倉敷埋蔵文化財センター職員福本明・鍵谷守秀・小野雅明・藤原好二が担当し、平成15年度及び16年度の2次にわたって実施した。
4. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、文化庁文化財部記念物課加藤真二文化財調査官及び岡山県教育庁文化財課平井泰男総括副参事の指導を得たほか、日畑庵寺確認調査指導委員会を設け、間壁忠彦・河本清・今津勝紀・亀田修一・葛原克人の各氏に委員を委嘱し、終始有益な指導、助言をいただいた。記して感謝の意を表します。
5. 出土遺物の整理及び報告書の作成は倉敷埋蔵文化財センターで行い、整理にあたっては倉敷埋蔵文化財センター臨時職員田中玲子・菅沼みどり・清水紀子の協力を得た。
6. 本書の執筆は、第1章及び第3章3節を藤原、第2章を福本、第3章及び第4章を小野が担当し、編集は鍵谷が行った。
7. 発掘調査における遺構の写真撮影は小野・藤原が行い、遺物の写真撮影は福本が行った。
8. 本書で使用した高度値は海拔高であり、方位は特に示さない限り磁北である。なお、遺跡付近の磁北は西偏6-50' を測る。
9. 本書第2図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を複製、加筆したものである。
10. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、すべて倉敷埋蔵文化財センター（倉敷市福田町古新田940番地）に保管している。

目次

序

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	5
第1節 調査のあゆみ	5
第2節 調査の経過	7
第3節 調査の組織	9
第3章 発掘調査の概要	11
第1節 調査区の概要	11
第2節 遺構	17
1. 建物Ⅰ（講堂）	17
2. 建物Ⅱ	22
3. 寺域に関連した調査	29
第3節 出土遺物	34
1. 瓦類	34
2. 土器	60
3. その他の遺物	65
第4章 発掘調査の成果	67
1. 寺域について	67
2. 伽藍配置について	67
3. 寺院の変遷について	67
4. 日畑廃寺の軒丸瓦について	69

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第28図	軒平瓦実測図2 (S=1/4)	40
第2図	周辺の遺跡 (S=1/25,000)	2	第29図	軒平瓦実測図3 (S=1/4)	41
第3図	トレンチ配置図 (S=1/500)	13・14	第30図	軒平瓦実測図4 (S=1/4)	42
第4図	建物I・II推定復元図 (S=1/200)	15・16	第31図	軒平瓦実測図5 (S=1/4)	43
第5図	トレンチ1平面・断面図 (S=1/100)	18	第32図	軒平瓦実測図6 (S=1/4)	44
第6図	トレンチ1断面図 (S=1/75)	19	第33図	丸瓦実測図1 (S=1/4)	45
第7図	トレンチ4平面・立面・断面図 (S=1/50)	20	第34図	丸瓦実測図2 (S=1/4)	46
第8図	トレンチ2平面・断面図 (S=1/100)	21	第35図	丸瓦実測図3 (S=1/4)	47
第9図	トレンチ7・8平面・断面図 (S=1/100)	23	第36図	丸瓦実測図4 (S=1/4)	48
第10図	トレンチ6南壁・西壁断面図 (S=1/50)	24	第37図	平瓦実測図1 (S=1/4)	49
第11図	トレンチ21平面・断面図 (S=1/50)	25	第38図	平瓦実測図2 (S=1/4)	50
第12図	トレンチ9平面・断面図 (S=1/50)	26	第39図	平瓦実測図3 (S=1/4)	51
第13図	トレンチ10平面・断面図 (S=1/50)	27	第40図	平瓦実測図4 (S=1/4)	52
第14図	トレンチ12西壁断面図 (S=1/50)	27	第41図	平瓦実測図5 (S=1/4)	53
第15図	トレンチ15平面・断面図 (S=1/100)	28	第42図	平瓦実測図6 (S=1/4)	54
第16図	トレンチ20平面・断面図 (S=1/50)	29	第43図	平瓦実測図7 (S=1/4)	55
第17図	P2断面図 (S=1/50)	30	第44図	平瓦実測図8 (S=1/4)	57
第18図	トレンチ14平面・断面図 (S=1/50)	30	第45図	平瓦実測図9 (S=1/4)	58
第19図	トレンチ16平面・断面図 (S=1/50)	31	第46図	平瓦実測図10 (S=1/4)	59
第20図	トレンチ17平面・断面図 (S=1/50)	31	第47図	埴実測図 (S=1/5)	60
第21図	トレンチ22平面・断面図 (S=1/50)	32	第48図	鳩尾・丸瓦実測図 (S=1/4)	61
第22図	トレンチ18平面・断面図 (S=1/50)	32	第49図	土器実測図1 (S=1/4)	62
第23図	トレンチ19平面・断面図 (S=1/100・1/50)	33	第50図	土器実測図2 (S=1/4)	63
第24図	軒平瓦実測図1 (S=1/4)	34	第51図	土器実測図3 (S=1/2)	64
第25図	軒平瓦実測図2 (S=1/4)	36	第52図	石器実測図 (S=2/3)	64
第26図	軒平瓦実測図3 (S=1/4)	37	第53図	鉄製品実測図 (S=1/3)	65
第27図	軒平瓦実測図1 (S=1/4)	38	第54図	伽藍配費・寺域想定図 (S=1/1,000)	68
			第55図	日知庵寺採集軒平瓦 (S=1/4)	69

図版目次

図版1	1. 遺跡周辺航空写真 (昭和44年)	図版3	1. 建物I-トレンチ1礎石据え付けの掘り方
	2. 昭和始め頃の礎石群トレンチ1付近		2. 建物I-トレンチ1
	3. 遺跡状況 (調査前)		くさびが打ち込まれた礎石
図版2	1. 建物I-トレンチ1基壇南辺 (西から)		3. 建物I-トレンチ1基壇西辺雨落溝 (南から)
	2. 建物I-トレンチ1基壇南辺 (東から)	図版4	1. 建物I-トレンチ1瓦積暗渠 (東から)
	3. 建物I-トレンチ1基壇南東端外装		2. 建物I-トレンチ1埴壇出土状況
			3. 建物I-トレンチ2瓦溜り (西から)

- 図版 5 1. 建物Ⅰ-トレンチ 2 瓦溜り (東から)
 2. 建物Ⅰ-トレンチ 2 基壇東辺中央 (東から)
 3. 建物Ⅰ-トレンチ 4 基壇東辺中央 (北から)
- 図版 6 1. 建物Ⅱ-トレンチ 6 基壇版築状況 (東から)
 2. 建物Ⅱ-トレンチ 6 基壇版築断面 (東から)
 3. 建物Ⅱ-トレンチ 7
 基壇北東部礎石出土状況 (南から)
- 図版 7 1. 建物Ⅱ-トレンチ 7 礎石近接 (南から)
 2. 建物Ⅱ-トレンチ 8 礎石近接 (南から)
 3. 建物Ⅱ-トレンチ 8
 基壇南東部状況 (南から)
- 図版 8 1. 建物Ⅱ-トレンチ 9
 基壇南西部状況 (北から)
 2. 建物Ⅱ-トレンチ 21 東壁断面 (東から)
 3. 建物Ⅰ周辺部トレンチ 11 東壁
- 図版 9 1. 建物Ⅰ周辺部トレンチ 13 東壁
 2. 建物Ⅱ周辺部トレンチ 5 全景
 3. 建物Ⅱ周辺部トレンチ 10 西壁
- 図版 10 1. 建物Ⅱ周辺部トレンチ 12 全景 (北から)
 2. 寺城北西部トレンチ 20 全景 (北から)
- 図版 11 1. 寺城北西部トレンチ 14 全景 (東から)
 2. 寺城北西部トレンチ 15 全景 (南から)
 3. 寺城北西部北側溝 (トレンチ 15)
- 図版 12 1. 寺城北東部-トレンチ 16
 掘立柱列 (北から)
 2. 寺城北東部-トレンチ 16
 ビット 2 柱痕検出状況 (北から)
 3. 寺城北東部-トレンチ 17
 ビット 3 (北から)
- 図版 13 1. 寺城北東部トレンチ 22 北壁 (北から)
 2. 寺城東端部トレンチ 18 全景 (西から)
 3. 寺城南東部トレンチ 19 南半
- 図版 14 1. 寺城南東部-トレンチ 19 井戸状遺構
 2. 調査風景 (トレンチ 2)
 3. 調査風景 (トレンチ 15)
- 図版 15 軒丸瓦
- 図版 16 軒丸瓦
- 図版 17 軒平瓦
- 図版 18 軒平瓦
- 図版 19 丸瓦
- 図版 20 平瓦
- 図版 21 埴
- 図版 22 須恵器・緑釉陶器
- 図版 23 土師器・鉄製品・埴壁片

第1章 遺跡の位置と環境

地理的環境

日畑廃寺の位置する倉敷市庄地区は「和名類聚抄」にみられる「都宇郡」に属している。「都宇郡」には「河面」「撫河」「深井」「駅家」の四つの郷(里)があったとされる。日畑の付近がどの郷に属していたかは判然としないが、古代の津観駅家と推定されている矢部遺跡¹²⁾に近いことから「駅家」郷に属している可能性が考えられる。明治22(1889)年に日畑廃寺のある日畑村西組他10か村が合併して都窪郡庄村となった。倉敷市には昭和46(1971)年に編入されている¹³⁾。

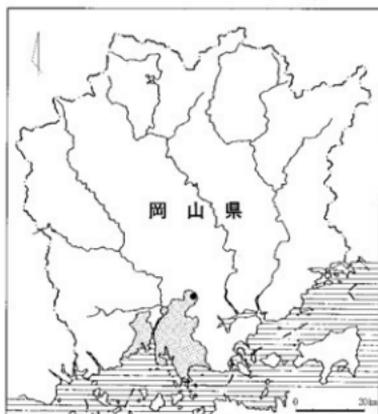
庄地区は北部の丘陵を除く大部分が足守川の形成した沖積平野である。古代までは海が入りこむ海岸地帯であり、日畑廃寺はこの海に向かって西から張り出す王墓山丘陵の東側に立地している。より細かく見るなら王墓山丘陵から東に延びる2本の尾根に挟まれた谷間に日畑廃寺は立地しており、吉備の中山を望む東側が開けている以外は、三方を山に囲まれた形になっている。

西側の王墓山丘陵上は昭和40年代後半に大規模な宅地造成が行われている。この宅地造成に先立ち、丘陵上に存在した多くの遺跡が調査された¹⁴⁾が、日畑廃寺は造成の範囲外に保存され、現在は王墓の丘史跡公園の日畑赤井堂地区として整備活用されている。また、周囲の日畑集落には昔のままの田園風景が残っている。しかし、この日畑集落でも近年住宅の建設が盛んになり、日畑廃寺の寺域にも及ぶ状況となっている¹⁵⁾。

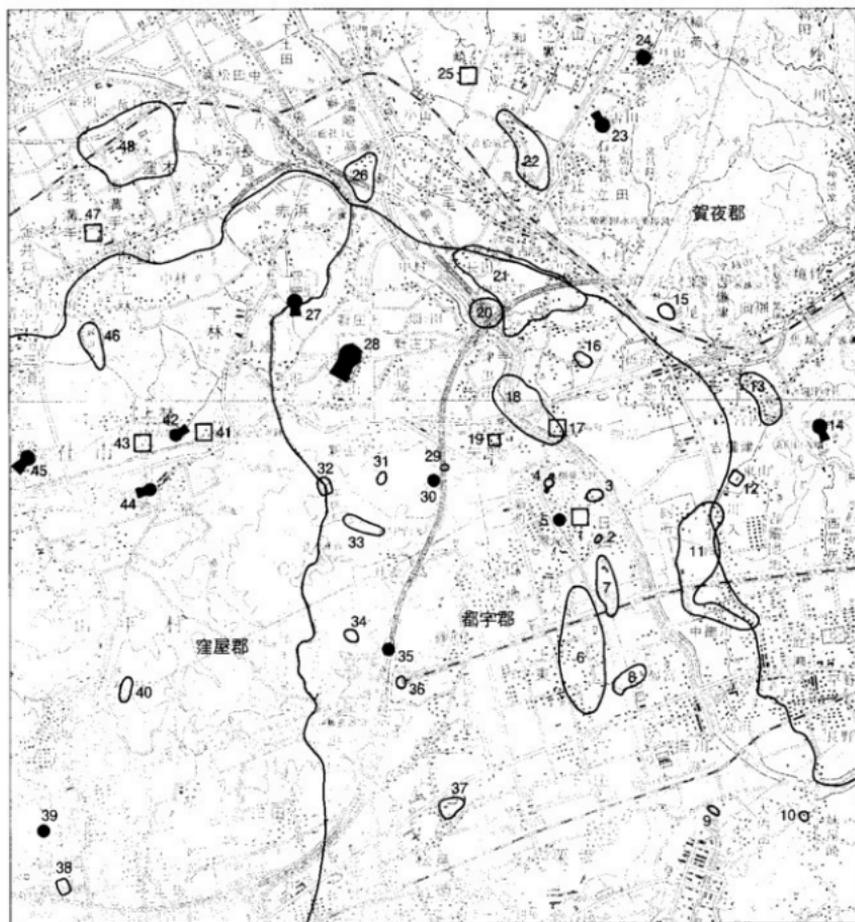
歴史的環境

旧石器時代には瀬戸内海がまだ形成されておらず、付近は北から南へ足守川とその支流が流れていたと考えられる。平野部の地形を現在では推定するすべはないが、いくつかの丘陵上で当時の遺物を確認できる。岡山市吉備津杉尾西遺跡では安山岩製のナイフ形石器や角錐状石器、玉髓製搔器などがまとまって出土している¹⁶⁾。また、日畑廃寺のすぐ西側の王墓山古墳の墳丘上でも安山岩剥片に混ざって安山岩製角錐状石器が採集されている。

約1万年前に縄文海進によって瀬戸内海が形成されると、この付近にも海が入り込んできて、現在の丘陵裾部に点々と貝塚が形成されるようになる。日畑廃寺から西に約1.5kmの矢部貝塚では山陽自動車道の建設に伴って発掘調査が行われ、中期後半から後期前半の土器を出土している¹⁷⁾。貝



第1図 遺跡の位置



- | | | | | | |
|--------------|-------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 1. 口畑廃寺 | 2. 西尾貝塚 | 3. 日幡城跡 | 4. 榑築遺跡 | 5. 王墓山古墳 | 6. 上東遺跡 |
| 7. 岩倉遺跡 | 8. 下庄遺跡 | 9. 大内田貝塚 | 10. 関戸貝塚 | 11. 川入遺跡 | 12. 伝賀陽氏館跡 |
| 13. 吉野口遺跡 | 14. 中山茶臼山古墳 | 15. 吉備津杉尾遺跡 | 16. 加茂城跡 | 17. 惣爪廃寺 | 18. 佐古田堂山古墳 |
| 18. 矢部南向遺跡 | 19. 矢部遺跡 | 20. 津守遺跡 | 21. 加茂政所遺跡 | 22. 備中高松城跡 | 23. 佐古田堂山古墳 |
| 24. 小盛山古墳 | 25. 大崎廃寺 | 26. 高塚遺跡 | 27. 小倉山古墳 | 28. 造山古墳 | 29. 矢部貝塚 |
| 30. 矢部大坑古墳 | 31. 江田池窟跡群 | 32. 鷹巣城跡 | 33. 日笠山城跡 | 34. 二子堂黒敷廃寺 | 35. 二子14号墳 |
| 36. 二子御堂奥窟跡群 | 37. 松島城跡 | 38. 菅生小学校裏山遺跡 | 39. 菅生小学校裏山遺跡 | 40. 菅生小学校裏山遺跡 | 41. 菅生小学校裏山遺跡 |
| 40. 聖岩山古墳群 | 41. 備中国分尼寺跡 | 42. こうもり塚古墳 | 43. 備中国分寺 | 44. 宿寺山古墳 | 45. 作山古墳 |
| 46. 緑山古墳群 | 47. 賀夜廃寺 | 48. 窪木栗師遺跡 | | | |

第2図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

層は汽水域に棲息するヤマトシジミが90%以上を占め、足守川が運んでくる土砂により、沖積化が進んでいった様子をうかがわせる。また、王墓山丘陵のすぐ南東裾部には西尾貝塚¹⁷⁾が所在し、ハイガイ、カキ、シジミなどととも縄文後期中津式土器が検出されている。

弥生時代には沖積化がかなり進んでいたようで、沖積地の微高地上に集落が営まれるようになる。王墓山丘陵の南側には上東遺跡・岩倉遺跡などの大規模集落が所在する。上東遺跡では新幹線の建設等、数度の発掘調査によって弥生時代後期を中心とする多くの遺構・遺物が確認されている¹⁸⁾。最近の道路建設に伴う発掘調査では弥生時代後期の波止場状遺構も確認されている¹⁹⁾。

また、こうした集落を営んだ人々の墳墓は丘陵上を中心に分布している。王墓山丘陵上にも辻山田遺跡・女男岩遺跡・橋築遺跡²⁰⁾が存在し、発掘調査によって弥生時代後期から末期にかけての墳墓の実態が明らかにされている。

古墳時代になると、王墓山丘陵やその西側にあたる矢部から二子にかけての丘陵状に数多くの古墳が築かれるようになる。前半期の古墳としては墳長50mを測る前方後円墳である矢部大塊古墳がある。発掘調査は行われていないが、この古墳から出土したとされる特殊壺型形土器から最古式の前方後円墳の一つと考えられている。古墳時代後期には100基近い横穴式石室墳が築かれるようになる。中でも日畑廃寺のすぐ背後に位置する王墓山古墳は、浪形石の家形石棺を持つ横穴式石室墳である²¹⁾。王墓山古墳に続く首長墓は、南西に約2.5km離れた山上に築かれた二子14号墳²²⁾である。一辺14m程の方墳で、切石に近い石材を用いた終末期古墳である。この古墳の麓には7世紀初頭から始まる二子御堂奥斎跡群²³⁾が営まれ、日畑廃寺の瓦もここで焼成されている。

庄地区の北端に沿っては古代山陽道が通っていたと推定されている。日畑廃寺の北東1km程に位置する矢部遺跡は、古代山陽道に置かれた備中で最初の駅家である津帆駅家と推定されている。北に2km程の所には山陽自動車道岡山ジャンクションがあるが、この建設の際に調査された岡山市津寺遺跡では掘立柱建物などが確認され、郡衙の周辺部と推定されている²⁴⁾。また、南東に2km程に位置する岡山市川入遺跡では平城宮式の瓦等も出土しており、郡津の可能性が推定されている²⁵⁾。他にも岡山市の惣爪廃寺、加茂政所廃寺²⁶⁾などの寺院跡も含めて狭い範囲に古代の遺跡が集中していると言える。

中世末には、足守川を挟んで織山・毛利両勢力が対峙し、羽柴秀吉による高松城水攻めの舞台となったのは有名である。日畑廃寺の東北の丘上には日幡城が築かれていた。日幡城は毛利氏が織田信長の中国地方侵攻に対抗するために築いた境目七城のひとつである²⁷⁾。

このように日畑廃寺の周辺は、多くの遺跡が存在しているが、特に弥生後期から古代にかけては著名な遺跡が集中している。その理由としては古代吉備の中心地であった総社平野への海からの玄関である吉備津を目の前にし、また、古代山陽道が通じるという交通の要衝であるということがあげられるだろう。

註

(1) 伊藤晃「222 矢部遺跡」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県 1986

(2) 倉敷市文化連盟「倉敷市歴史年表」1978

- (3) 間壁忠彦ほか『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974
- (4) 小野雅明『日烟庵寺確認調査報告』『倉敷埋蔵文化財センター年報9』倉敷埋蔵文化財センター 2004
- (5) 柴田美樹ほか『古備津杉尾西・奥田遺跡』『岡山市埋蔵文化財センター年報2』岡山市教育委員会 2003
- (6) 浅倉秀昭ほか『矢部奥田遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82』岡山県教育委員会 1993
- (7) 藤田憲司『X X I 周辺の遺跡』『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974
- (8) 柳瀬昭彦ほか『上東遺跡の調査』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第二集』岡山県教育委員会 1974
小林利晴ほか『上東遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告158』岡山県教育委員会 2001
- (9) 高畑知功ほか『下庄遺跡 上東遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157』岡山県教育委員会 2001
- (10) 近藤義郎編『橋築弥生墳丘墓の研究』橋築刊行会 1992
- (11) 山本雅晴ほか『XⅧ 王墓山古墳(赤井西古墳群1号)』『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974
- (12) 井上弘・亀山行雄『二子14号墳』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81』岡山県教育委員会 1993
- (13) 葛原克人ほか『二子御堂奥古窯址群の調査』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第二集』岡山県教育委員会 1974
- (14) 高畑知功ほか『津寺遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127』岡山県教育委員会 1998
- (15) 正岡睦夫ほか『川入遺跡の調査』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第二集』岡山県教育委員会 1974
高橋伸二ほか『川入・中撫川(市道)遺跡』『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1999(平成11年度)』岡山市教育委員会 2001
草原孝典ほか『川入・中撫川(市道2号線)遺跡』『岡山市埋蔵文化財センター年報 2002(平成14年度)』岡山市教育委員会 2004
- (16) 平井泰男ほか『加茂政所遺跡 高松原古才遺跡 立田遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138』岡山県教育委員会 1999
- (17) 加原耕作編著『新釈備中兵乱記』山陽新聞社 1987

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査のあゆみ

「日畑廃寺」の名称は、倉敷市日畑地内に所在するところから大字の呼称をもとに名づけられたものである。地元では早くから古い寺院跡として認識されていたようで、所在する土地の小字名「赤井」にある寺院建物跡ということから「赤井堂屋敷」などとも呼ばれている。また、小字「赤井」の東側に隣接して「寺門」という寺院に関連するような小字名も残されている。

日畑廃寺が研究者の間で広く知られるようになるのは、昭和12年に刊行された「吉備郡史」に記載された永山卯三郎の調査の記録からである。永山は、昭和9年の調査により5個の礎石を発見したのち、昭和11年4月に古代瓦の収集・研究家である玉井伊三郎が行った発掘から「礎石三十六個を完存する建物跡、及其一帯に累々重積する古瓦を発見したり」という報告を受けて、同じ昭和11年5月に改めて現地調査を行ったというもので、実際は昭和9年に発見した5個の礎石のほかにも2個を追加したのみで、あとの29個は地下三四尺に埋まっているものを鉄の棒によって探り当てたものであると記されている。

このときの永山の記録をみると、「(前略)中央稍々南に偏する所に東西の一直線状に四個の礎石を存す。蓋し堂趾ならん。西より三個は相距る九尺皆普通の礎なり。第四は繰出しあり。第三と第四との距離は十二尺なり。第四より直角に東に折れて第四を距る東十二尺の所を基準として正東十五間半の畦畔に於て南北の一行に四個の礎石あり、蓋し中門趾ならん、共に繰出しありたりと云ふ。此畦畔の四個は明治十九年の洪水に依りて破壊されたる道路復舊工事の石材用として割取られ今は痕跡とも留めず。此四個の礎石より東方二丁弱にして南北に通ずる里道あり、里道以東を寺門と云ふ。思ふに此付近に大門ありしならん。」とある。また出土した古瓦についても、蓮華文の軒丸瓦2種と重弧文の軒平瓦も4重のものと3重のもの2種があったことが記されている¹⁾。

こうした調査をもとに、永山、玉井ともに浅い谷の奥に南北73.5尺、東西40尺の東面する7間4面の建物跡を想定しており、とくに玉井は、昭和16年に刊行された「吉備古瓦図譜第二集」の中で、礎石の配置の略図を示して、王墓山を背にして東面する法隆寺式の伽藍配置を想定し、当該礎石建物が講堂にあたるのではないかという見方を示している²⁾。

また、後述するように今回改めて確認されることとなった東方の礎石建物Ⅱについても、永山の記録に見られるように、この時点ですでに南北に並ぶ4個の礎石の存在が知られていたようで、永山はこの礎石建物を中門跡に想定している。しかしながら、これらは明治期に道路復旧工事に伴う石材として割り取られたとされ、同地点の北端の畔上に現在も残されている円座の造り出しのある礎石の破片は、その時に取り残されたものであろう。そのほか、この時期に前後して郷土史家で古瓦と上東遺跡の弥生土器の収集家として知られる板谷重郎治によって古瓦の採集が行われており、単弁蓮華文と重弁蓮華文の2種の軒丸瓦2点と、重弧文軒平瓦で頭面に櫛描き波状文の施されたもの

と幅広の突帯を施したものなど5点の軒平瓦が採集されている。

こうした調査を経て、日畑廃寺は県下でも貴重な白鳳時代の寺院跡として広く周知されるようになり、昭和27年になって「赤井堂屋敷」という名称で、県指定史跡の指定を受けるに至った。しかしながら、岡山県内の県指定史跡については昭和29年から34年頃にかけて指定の一斉見直しが行われ、すべての指定史跡が一度解除された経緯があり、主だったものは市町村の申請により改めて指定を受けることになるのであるが、どういふわけか日畑廃寺についてはそのままにされており、実質的に指定が解除された形となってしまった。その後、ようやく都窪郡庄村が倉敷市に合併された昭和46年になって、周辺の大規模な団地造成に際して現状保存された谷奥の礎石建物周辺を中心に、部分的ではあるが改めて市指定史跡に指定されることになったのである。

このうち、昭和60年度から日畑廃寺を含む王墓山一帯で「王墓の丘史跡公園」として史跡公園の整備が計画され、王墓山古墳周辺から順次整備されることとなった。日畑廃寺についても市指定史跡部分を中心に一部民有地を借地する形で、部分的ではあるが芝張りや案内解説板、休憩舎の設置などの整備が計画された。そうした中、昭和63年になって地元の要望により、谷奥の指定地から東に向かって推定寺域の中央を東西に縦断する市道の拡幅工事の計画が持ち上がった。これは現状の畦道を幅4mの道路に拡幅するというもので、のちにこの市道拡幅工事については諸般の事情により中止となるのだが、計画段階で事前に倉敷市教育委員会が確認調査を行うこととなった。調査は、計画市道の側溝及び道台にあたる部分について、幅1mのトレンチを15か所設定し、昭和63年11月から12月にかけて実施した。

調査の結果、谷奥部分で以前から永山や玉井によって想定されていた建物の北西隅にあたる位置に自然石を用いた大きな礎石が3個検出され、7間4面と思われる建物跡の規模が確認された。また、あわせてこの礎石建物に伴うと思われる乱石積み基壇状遺構や幅9mにわたる瓦溜りなども検出されており、谷奥に位置するこの建物跡が、良好な状態で保存されていることが改めて確認されたのである。このほかにも、寺域の東端付近にあたると思われるトレンチでは、柱材の一部が残存している掘立柱建物と思われる遺構の存在も確認されるなどの成果が上がっている。しかしながら、調査自体が道路建設に伴うものであり、調査区の規模や位置の制限もあって伽藍の配置や寺域など寺跡全体の内容や性格に迫るまでには至っていない。

また平成5年になって、推定寺域の南端近くにあたる斜面で宅地造成が行われることになり、倉敷市教育委員会により擁壁の基礎にあたる部分について事前に確認調査が行われている。この調査では、寺域の南辺部分の確認が期待されたが、白鳳期と思われる遺物包含層や土壌などが確認されたものの、残存状況も悪く、直接に寺域や伽藍などに結びつくような遺構は確認されていない。

その後も周辺では小規模な住宅の建設などが行われたが、日畑廃寺を含む一帯が市街化調整区域であったこともあり、推定寺域内に



瓦溜り（昭和63年調査）

直接入り込んでくるような開発行為はみられなかった。ところが、平成13年になって都市計画法の改正に伴い、「倉敷市都市計画法に係る開発行為の許可等の基準に関する条例」が改正され、今まで市街化調整区域で一般の住宅の建設ができなかった地域についても一定の条件を満たせば住宅の建設が可能となった。こうした中で、谷奥の礎石建物と道を挟んで北東に接する土地が売却され、翌平成14年と15年にかけて相次いで2戸の個人住宅の建設が計画された。倉敷市教育委員会で、こうした事態を受け、緊急に当該地の確認調査を実施することとなった。調査は、平成14年9月および平成15年5月～6月の2回に分けて実施し、造成予定地内にあわせて6か所のトレンチを設定した。調査の結果については、一部で寺域の北辺を画する可能性のある溝状の遺構が検出されたほか、遺物包含層なども確認されたが、幸いに伽藍建物等に直接関わるような遺構は確認されなかった。しかしながら、推定寺域内でのこうした個人住宅の建設は、今後の日畑廃寺跡の保存の上からも憂慮すべき状況となってきた。

こうした状況の中、倉敷市では日畑廃寺を適切に保護し、将来に亘り良好な状態で保存していくために、寺域や伽藍の配置を含めた寺跡の全体像の把握が緊急の課題であると認識のもとに、またあわせて今後の整備活用を図るための基礎資料を得ることを目的として、平成15年度から2か年計画で確認調査を実施することとなったのである。

第2節 調査の経過

〔平成15年度の調査〕

確認調査の実施にあたっては、事前に有識者5人からなる日畑廃寺確認調査指導委員会（以下、指導委員会という。）を設置し、日畑廃寺確認調査についての審議・指導及び助言を得ることとした。第1回指導委員会は、調査に先立って平成15年8月1日に開催され、確認調査の方法やトレンチの位置等について審議し、あわせて調査予定地の現地視察を行った。これにより、調査はまず推定寺域の中軸線上を中心に建物の存在の有無や伽藍の配置などに重点を置いて行うこととし、平成15年9月2日から現地調査に入った。

調査は、予想を超える湧水に悩まされながらも、11か所のトレンチを掘削した。このうち従前から存在の知られていた大型建物部分のトレンチでは、計6個の礎石を確認するとともに乱石積み of 基壇外装や雨落溝、瓦溜り等が検出された。また東方のトレンチでは、昭和初期の永山卯三郎の記述で明治期に道路復旧工事に際して剝取られたとされる礎石群の一部が確認され、改めて礎石建物の存在を明らかにするなどの成果を上げ、平成15年12月18日に現地調査を完了した。

なおこの間、各トレンチでの遺構の大まかな状況が判明した平成15年10月30日に第2回目の指導委員会を現地で開催し、出土した遺構、遺物等の検討とともに、次年度の調査方針等についても指導及び助言を得た。また、平成15年11月15日には、調査成果についての現地説明会を開催し、80人に及ぶ市民の参加があった。

〔平成16年度の調査〕

平成16年度の確認調査については、指導委員会の指導助言をもとに、前年度に確認された2棟の

礎石建物についての補足的な調査を行うとともに、寺域について明らかにすることを目的として縁辺部にもトレンチを設定することとした。調査は、平成16年4月22日から着手し、合計11か所についてトレンチ調査を行った。

このうち谷奥の礎石建物に設定したトレンチでは、激しい湧水のためトレンチの壁がたびたび崩壊し、遺構が土砂で埋まるなど調査は非常な困難を伴ったが、建物に伴う大規模な瓦溜りや雨落溝、礎石等が検出された。また東方建物の北側に設けたトレンチでは、版築を伴う建物基壇を確認することができた。

また寺域については、北西部に設けたトレンチで、北辺の寺域を画すると思われる溝を検出することができたが、そのほかのトレンチでは寺域を画するような明瞭な遺構の存在は確認できなかった。しかしながら、北東部から東部にかけて設けたトレンチでは、柱痕を伴う大型の柱穴列が検出されたほか、掘立柱建物の存在をうかがわせる柱穴が検出されるなどの成果を得ることができ、平成16年7月6日に現地調査を完了した。

なおこの間、調査での概要が明らかとなった平成16年6月1日に指導委員会を開催するとともに、昨年に引き続いて平成16年6月13日には、現地説明会を開催し、市民等90人の参加を得た。

調査報告書の作成については、調査終了後、倉敷埋蔵文化財センターにおいて遺物及び記録の整理を行い、2か年分の調査成果を平成16年度に刊行することとした。

調査日誌抄

《平成15年》

- 9月2日(火) 機材搬入。トレンチ設定。
- 9月3日(水) 重機によりトレンチ1の表土除去作業のち調査着手。
- 9月4日(木) 重機によりトレンチ3掘削。
- 9月18日(水) 岡山市高松公民館講堂生調査見学(24名)
- 9月26日(金) 重機によりトレンチ4表土除去作業のち掘り下げ。
- 10月1日(水) トレンチ1より暗渠状遺構検出。
- 10月2日(木) トレンチ1土層断面実測。トレンチ4より礎石検出。
- 10月7日(火) トレンチ7掘り下げ、礎石検出。
- 10月8日(水) トレンチ6掘り下げ。
- 10月11日(水) トレンチ5・8・9掘り下げ。トレンチ8より礎石検出。
- 10月16日(木) トレンチ10掘り下げ。
- 10月17日(金) トレンチ11掘り下げ。
- 10月22日(水) トレンチ配置図測量。
- 10月30日(水) 日曜庵寺確認調査指導委員会開催。
- 11月1日(土) トレンチ12掘り下げ。
- 11月6日(木) 文化庁記念物課加藤真二調査官現地指導。
- 11月11日(火) 倉敷市教育委員視察。
- 11月14日(金) 航空写真撮影。
- 11月15日(土) 現地説明会開催。参加80名。

- 11月18日(火) 発掘機材撤収。
- 12月9日(火) トレンチ埋め戻し着手。
- 12月17日(水) トレンチ埋め戻し完了。
- 12月18日(木) すべての現地作業完了。



調査指導委員会



文化庁現地指導

〈平成16年〉

- 4月22日(木) トレンチ設定。重機によりトレンチ2の表土除去。
 4月28日(水) 発掘機材搬入。トレンチ2掘り下げ。重機によりトレンチ15の表土除去。
 5月1日(土) トレンチ15掘り下げ。溝状遺構検出。
 5月8日(土) トレンチ18掘り下げ。
 5月12日(水) トレンチ17掘り下げ。
 5月19日(水) トレンチ16掘り下げ。トレンチ2で瓦溜り検出。
 5月22日(土) トレンチ19掘り下げ。トレンチ2で礎石検出。
 5月26日(水) トレンチ16で柱痕検出。
 6月1日(火) 日知庵寺確認調査指導委員会開催。
 6月3日(木) 重機によりトレンチ14・20表土除去。
 6月4日(金) トレンチ13・14・20掘り下げ。
 6月9日(水) 重機によりトレンチ21表土除去。トレ

ンチ21・22掘り下げ。

6月13日(日) 現地説明会開催。参加90名。

6月17日(木) 埋め戻し作業開始。

6月19日(土) 発掘機材撤収。

7月10日(土) 埋め戻し、現状復旧等すべての現地作業完了。



現地説明会

第3節 調査の組織

日知庵寺確認調査についての事務及び発掘調査、報告書作成については、倉敷埋蔵文化財センターが担当した。また事業の推進にあたっては、日知庵寺確認調査指導委員会及び文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課等の指導助言を得た。

〔日知庵寺確認調査指導委員会〕

- 委員長 間壁忠彦 (財)倉敷考古館館長
 副委員長 河本 清 くらしき作陽大学食文化学部教授
 委員 今津勝紀 岡山大学文学部助教授
 委員 亀田修一 岡山理科大学人類学教室教授
 委員 葛原克人 ノートルダム清心女子大学文学部教授

〔指導・助言〕

- 文化庁文化財部記念物課 文化財調査官 加藤真二
 岡山県教育庁文化財課 総括副参事 平井泰男

〔調査体制〕

- 教育長 田中俊彦
 教育次長 渡邊義明
 生涯学習部部長 三本富雄
 生涯学習部次長 小原孝文(平成15年度)
 生涯学習部次長 久山 優(平成16年度)
 文化財保護課長 大本 森
 文化財保護課課長補佐 安藤青児
 埋蔵文化財センター館長 松浦恵弘(平成15年度)

埋蔵文化財センター館長 福本 明(平成16年度)

埋蔵文化財センター主任 鎌谷守秀

埋蔵文化財センター学芸員 小野雅明〔調査担当〕

埋蔵文化財センター学芸員 藤原好二(平成15年度)〔調査担当〕

〔発掘調査作業員〕

赤木猪馬雄 小西閑香 仙田始 為石千枝子 難波和正 難波勝彦 難波良朗 藤原彰利
町田真佐子 矢尾清 矢尾由美子(敬称略)

調査にあたっては、地権者をはじめとする地元の方々、及び土木委員の難波見氏には大変お世話になった。とりわけ王墓の丘史跡公園日畑赤井堂地区管理組合代表の矢尾達夫氏には地元での連絡調整にお骨折りをいただいた。また、発掘調査及び調査報告書の作成にあたり、次の方々には大変有益なご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

伊藤見 江見正己 大澤正己 大橋雅也 小野一臣 北村精三 草原孝典 佐藤寛介 澤田秀実
重根弘和 高山知樹 高畑知功 出宮徳尚 西田和浩 乗岡実 古瀬清秀 松尾洋平 松尾佳子
松本和男(敬称略)

註

- (1) 永山卯三郎『吉備郡史』上巻(複製)名著出版1971
- (2) 玉井伊三郎・藤沢一夫『吉備古瓦図譜』第二輯1941

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要

日畑廃寺は、王墓山丘陵東裾に広がる緩やかな谷状傾斜地に立地する。西に山を背負い、東の足守川河口に展開する沖積地を見下ろすような地形から、伽藍配置は東向きであることが以前から指摘されてきた。寺域が想定される谷間の緩傾斜は水田として段々に開墾され、この段に温室を建ててぶどう栽培をする場所もあり、静かな農村の面影を残している。しかし、昭和40年代からの住宅団地の造成により、丘陵側の西方と南方は、コンクリート擁壁で囲まれ、周辺の景観は変貌している。

調査区の設定にあたっては、地権者の協力が得られたため、休耕田を中心に調査を行うことができた。今回の調査では、全部で22か所のトレンチを設定して行った。そのうち、建物Ⅰに関連するトレンチは、1・2・4、建物Ⅱに関連するトレンチは、6・7・8・9・21で、建物跡の周辺を調査したトレンチが3・5・10・12・13である。寺域の確認を目的とする調査では、トレンチ11・14・15・16・17・18・19・20・22を設定した。

調査区の基盤層はよくしまった粘質土の堆積層で、水を含ませると軟弱であるが、乾燥すると堅固になる。この基盤層上層には、旧石器時代と思われるサヌカイト片が含まれ、弥生時代中期の遺構が切り込まれている。

建物Ⅰの調査概要

谷間の最奥部にある休耕田には、従来から建物の南端礎石列が露出している。この礎石建物を建物Ⅰとする。建物Ⅰの南端礎石列は、現状で4個の礎石の上面が露出している。これを手がかりに基壇等の遺構を調査するため、はじめにトレンチ1を設定した。その結果、西端で埋もれている1個を加えて東西に並ぶ5個の礎石を確認することができた。この礎石列の中心を結ぶ線を寺域の東西方向の基準と考え、中央の礎石上面のまん中に仮原点を設定した。建物Ⅰの南北の長さがおよそ22mと想定されていたため、仮原点より真北へ11mの地点に調査基準点(NS0m、EW0m)を設定した。こうして得られた建物Ⅰの推定中軸線であるNS0mラインは、谷間の中央やや南寄りを東西に延びる。今回の調査で、この直線上に建物Ⅰと建物Ⅱが並ぶ状況が想定されたため、同時にこのラインは寺院跡の推定中軸線ともいえるであろう。

建物Ⅰの基壇は、基盤層を削って成形したことが明らかとなった。基壇南辺と西辺には雨落溝がめぐり、南東で丸瓦8枚を一列に連ねた暗渠排水溝が検出された。基壇南辺に回廊等の施設が取り付くような状況は確認されなかった。基壇東辺に設定したトレンチ4では、礎石1個と乱石積みの基壇外装等が確認され、基壇西辺に設定したトレンチ2では、礎石1個、西側の雨落溝、瓦溜り等が検出された。基壇北辺付近の状況は、昭和63年の市道改修工事に伴う確認調査で一部が明らかになっており、さらに北側の状況を把握するためにトレンチ3を設定した。しかし、この部分はゴ

ミ穴となっており、遺構が確認できる状況ではなかった。

建物Ⅱの発見と調査概要

建物Ⅰの東40mには、ぶどう栽培用の温室が2棟現存する。かつて、西隣にもう一棟建っていて、その温室を建設あるいは撤去した際に多くの古瓦が出土したと伝えられる。また、このあたりから出土した礎石を道路修復の際に運び出して利用したらしく、現在でも礎石破片が休耕田の隅に残っている。温室跡地に南北総延長22mの細長いトレンチ7・8を設定し調査を行った結果、礎石5個を検出し、礎石建物の存在を新たに確認した。この時点で建物の基壇上面を検出したものと判断し、基壇の続きを検出すべく西隣の一段高い段にトレンチ6を設定し、調査を進めた。しかし、礎石検出面を意識しすぎたため、結果的にトレンチ6では基壇版築層を30～50cm掘り下げてしまった。トレンチ7・8の礎石の上面とトレンチ6の版築層上面とのレベル差は60～70cmを測り、礎石列は本来の高さより1m近く下げられていたことが判明したのである。水田の開墾とぶどう栽培により、基壇が深く切り下げられてもなお5個の礎石が、高さも大きく違わず東西に並んで残っているのは、それぞれの礎石の直下を掘り下げ、耕作に支障のない高さまで落とすためと理解せざるを得ない状況である。トレンチ8・9の南端で基壇南端と関連のある溝4が検出され、トレンチ21で基壇の北端が捉えられたことで、基壇の南北規模がおおまかに把握された。一方、東西規模については、トレンチ6と5を結ぶようなトレンチを設定すれば、西辺の検出が可能だったかもしれない。しかし、畑の段を破壊することになるため、調査を見送った。

建物周辺の調査

トレンチ5では地表下2m程掘り下げたが、遺構は確認されなかった。池のような低地が存在すると思われるが、安全上の理由からそれ以下の調査は中止した。トレンチ10では溝4の続きを検出し、トレンチ12までは延びていないことがわかった。トレンチ12では、基盤層直上で、古代、中世の遺物を含む包含層が検出された。トレンチ13では遺構は確認されていない。

寺域等の調査

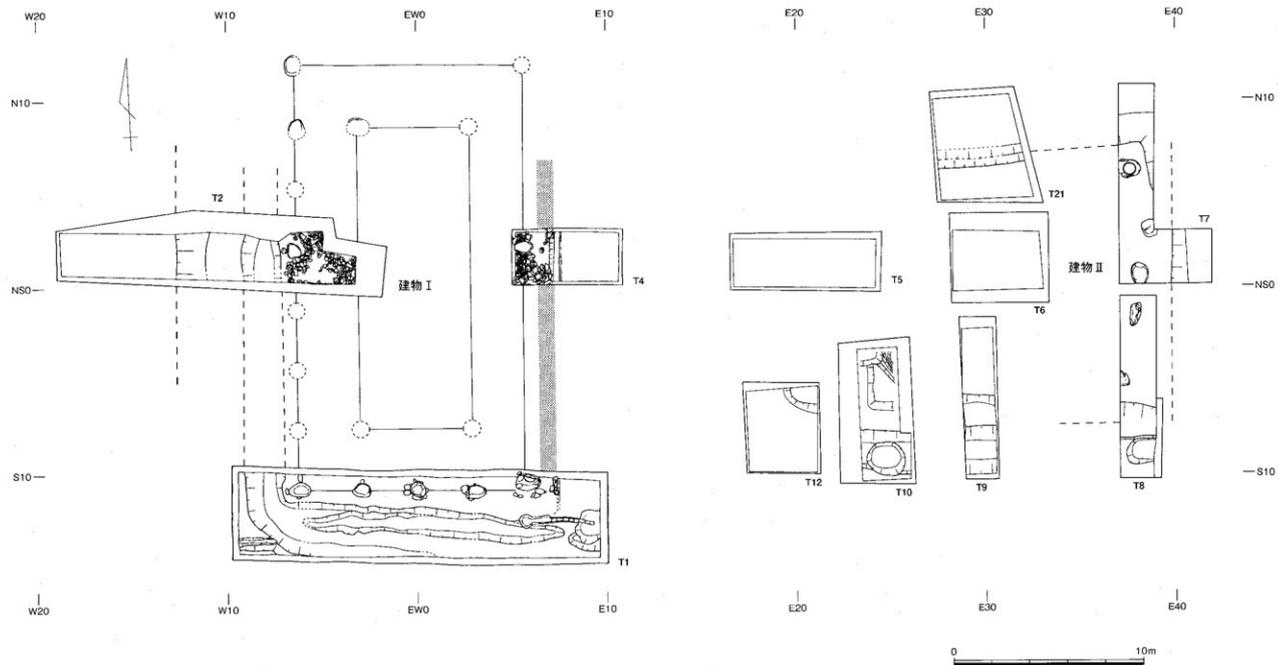
今回の調査では、主に北側の寺域ラインを確認するためにトレンチを設定した。日畑廃寺の寺域については、これまでほとんど調査例がなく、平成14年実施の宅地造成工事に伴う確認調査で東西方向の溝の存在を認識していたのみである。この溝の続きと思われるのがトレンチ15で検出された古代の溝で、寺域に関連する可能性を意識して「北側溝」と呼称する。その西でトレンチ20を設定し、北側溝の続きを検出した。溝はトレンチ20で大きく南に曲がり、トレンチ14の北側で終わるか、あるいはトレンチ14の西側を回って南に延びると思われる。また、トレンチ15の東約80mでトレンチ16・17・22を設定し、古代の掘立柱列、溝を確認したが、これらの性格を把握するには至らなかった。

南側の寺域の調査では、トレンチ11・19を設定して行った。トレンチ11では、弥生時代の溝状遺構が検出された。トレンチ19では古代の柱穴1基などを検出した。

建物Ⅰの東西中軸線を延長した所で、門跡の存在を探ってトレンチ18を設定した。しかし、古代の土壌が1基検出されたのみである。



第3図 トレンチ配置図 (S=1/500)



第4図 建物 I・II 推定復元図 (S=1/200)

第2節 遺構

1. 建物I（講堂）

南北7間、東西4間の東面する礎石建物として知られ、講堂と考えられている。平成15年度調査で、トレンチ1・4、平成16年度調査で、トレンチ2を調査した。

(1) 基壇

基壇は、基本的には基盤層を削り出して成形されたもので、築造にあたっては、東向きの斜面を削平して西側に平坦面を作り、西辺、南辺とおそらく北辺にも雨落溝を穿っていると思われる。東辺は壇状に加えて形を整え、法面に乱石積みの基壇外装を築く。前面にも平坦面を作り、周辺を整地する。トレンチ1東半のかつて水田だった部分では、耕作により基壇上面が削平されているが、西側よりも東側が深く削られているため、礎石列の東側がより高く露出した状態である。瓦などの遺物はほとんど残っていないが、昔牛鍬の先に瓦が当たって耕作の邪魔になったとの伝聞から、この部分にも瓦溜りが存在したと思われる。水田耕作が及んでいないトレンチ2では基壇上面で瓦溜りが検出され、遺構が良好な状態で保存されていることが確認された。建物Iでは、基壇直上の堆積層、瓦溜りの上層や雨落溝などの遺構から古代の土器に混じって中世の土器が出土しており、この時期に建物跡地を再利用したことがうかがえる。

(2) 礎石

礎石はトレンチ1で5個、トレンチ2・4でそれぞれ1個を検出した。これらは花崗岩を中心とした石材であるが、硬質で白灰色を呈し、表面が滑らかに加工されたものが多い。しかし、中には褐色で表面の風化が進んでいるような質の粗いものも混在する。トレンチ1の礎石列東端のものは円形の柱座があり、この面を北に向けて横転している。柱座の中央に楔で割られた痕跡がある。それ以外の礎石は原位置から動かされていないと思われる。各礎石の概要は表1のとおりである。

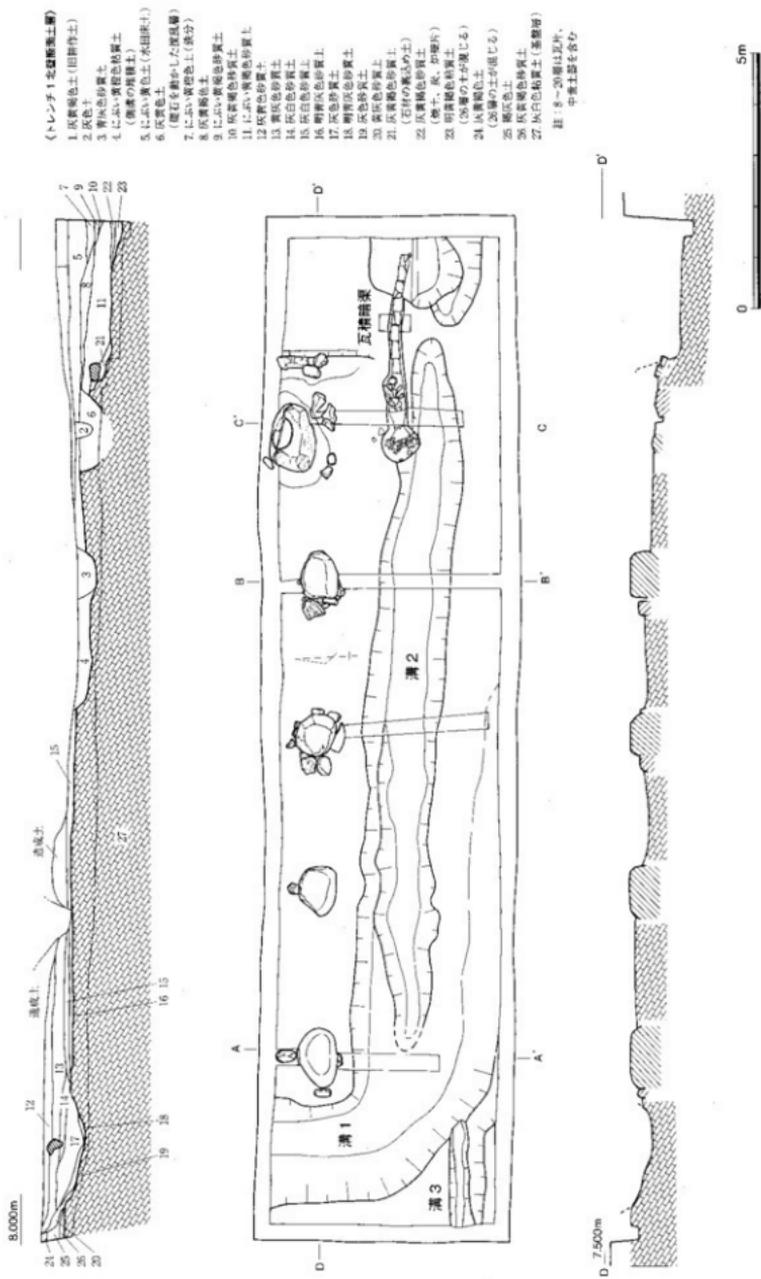
礎石は、一回り大きな穴の中に高さの半分以上を埋められて据え付けられており、拳大から乳児頭大くらいの角礫を下部および周囲に詰めて固定されている。また、礎石を据えた後、基盤層と同じ粘土を貼って整地したと思われる所も見られた。

(3) 基壇と建物の規模

今回の確認調査と昭和63年度調査の成果をもとにして基壇、建物の規模を推定する。基壇の規模は、東西は上面で、14.6mを測る。南北は24～25mと推定される。梁間4間は12.0mを測る。柱間は、西端1間が他と比べて広いので、約300cm(10尺)等間ではなく、西から約330cm(11尺)・10尺・10尺・10尺・約270cm(9尺)となる可能性がある。桁行7間は22～23mで、柱間寸法は11尺等間と考えるか、1間分ないし2間分を10尺とし他を11尺と考えることも可能であろう。また、

出土位置	上面の標高(m)	備考
トレンチ1(東端)	7.105	転石。柱座は上径約53cm・底径約56cm。
トレンチ1	7.146	
トレンチ1	7.178	
トレンチ1	7.185	
トレンチ1(西端)	7.179	
トレンチ2	7.131	
トレンチ4	7.035	

表1 建物I礎石一覧

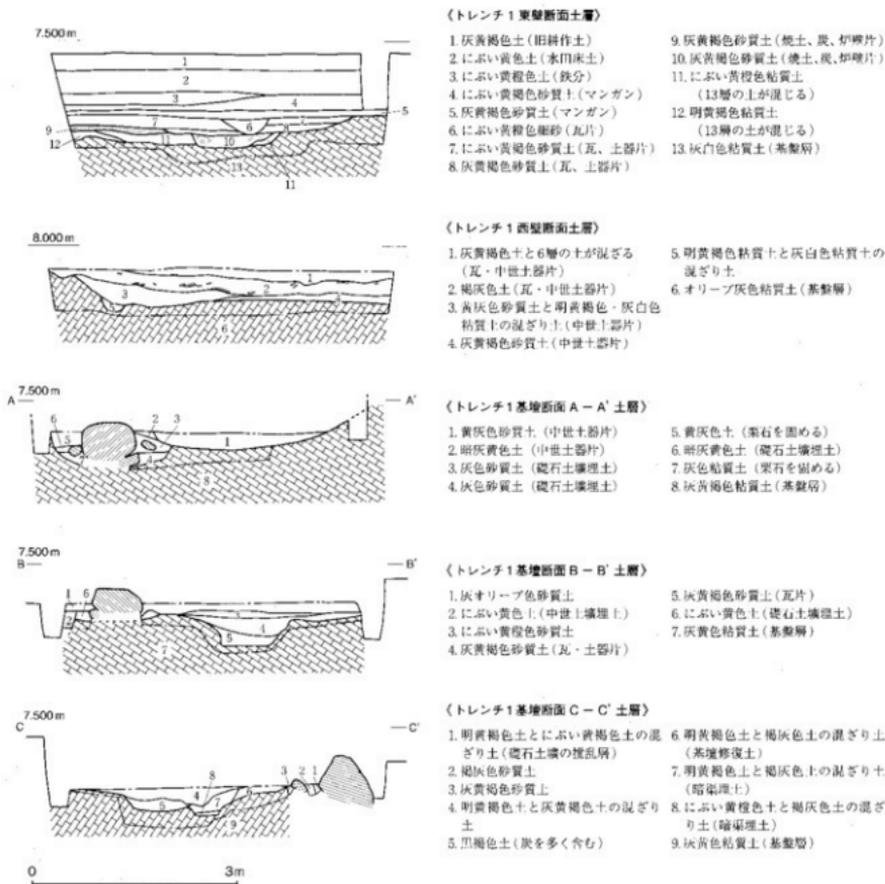


第5図 トレンチ1平面・断面図 (S=1/100)

建物を復元する際、軒の出を考えるとときに礎石と雨落溝との距離が注意される。建物Ⅰ全体を見ると、雨落溝が不自然な形状で礎石列に接近しており、後に雨落溝等が掘り直されたことがわかる。創建後、建物Ⅰがしばしば水害に遭い、排水施設の補修・強化を行った跡と考えられる。

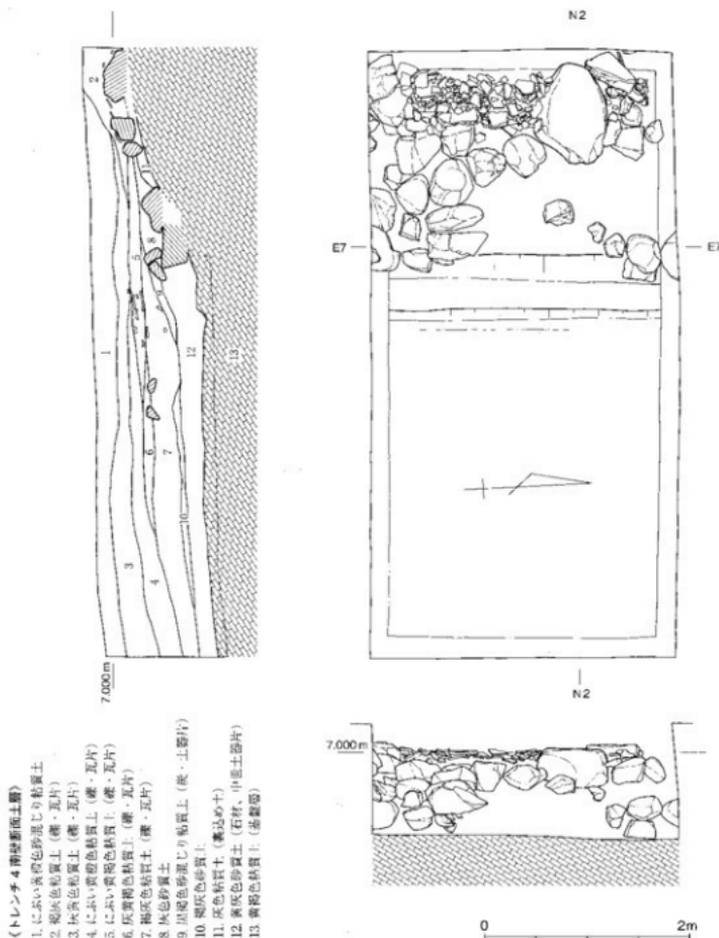
(4) 基壇外装

基壇東辺で乱石積みの外装が確認された。トレンチ1では、南東コーナーあたりで外装の基底部にあたる3石が残っている。積み石というよりも板石を用いた貼り石のようでもある。石材を基壇法面に据え付けた裏込め土から須恵器杯壺が出土した。トレンチ4では、基壇法面に石積みが残っている。20～25度に削り出した傾斜面に人頭大の粗い石材を粘質土でおさえながら積み重ねてい



第6図 トレンチ1断面図(S=1/75)

る様子が確認された。石材が欠落している部分が多く、基壇前面の堆積土中にもいくらか転石があった。石材を失った法面に黒褐色土が堆積しており、細片となった古代の土器が含まれていた。基底部の石材の残りは良好でなく、特に大きい石材を並べているような様子は認められなかった。法面下端には幅20cmくらいの平坦面が存在し、その東隣に細い溝が確認された。これより東側は、緩やかな傾斜地となる。この傾斜地において、基盤層上面から中世の土器が出土しており、このこ

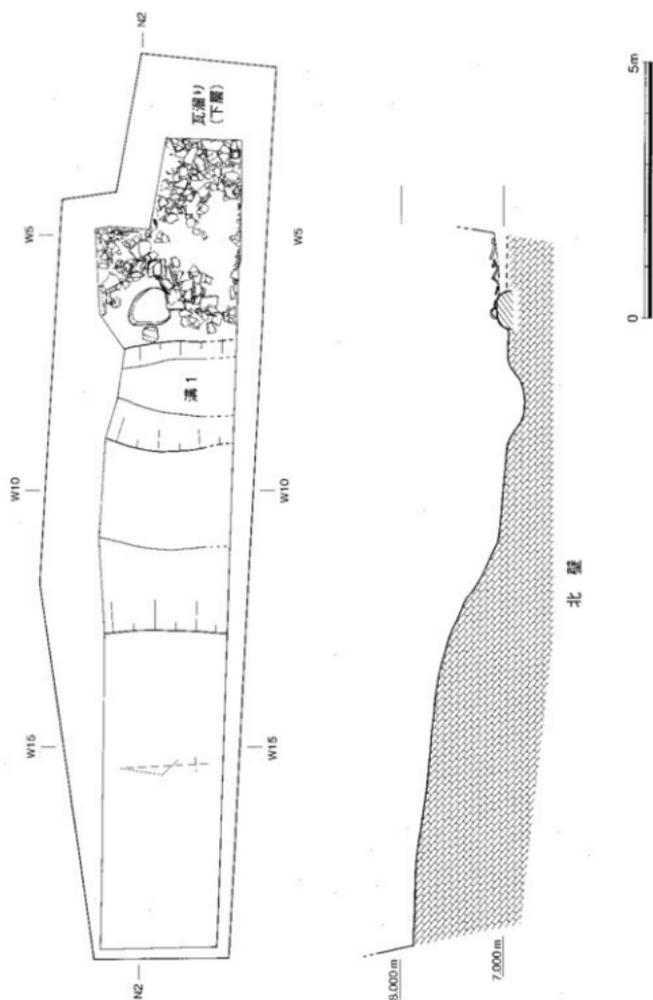


第7図 トレンチ4平面・立面・断面図 (S=1/50)

ろまでは建物遺構の埋没はほとんど進んでいなかったことがわかった。

(5) 雨落溝 (溝1・溝2)

基壇南辺と西辺で雨落溝 (溝1) が確認された。雨水・湧水が集まる谷筋では、排水の施設は不可欠である。これらの溝が単に区画のためではなく、建物施設や物資を湿気から守る重要な役割を



第8図 トレンチ2平面・断面図 (S=1/100)

もっていたことは容易に想像される。西辺での雨落溝の幅は約2mで、南西のコーナーまでは同じくらいの幅で続くと思われる。トレンチ2で検出した雨落溝の底には黒褐色土が堆積しており、細片となった古代の土器が多く含まれていた。その中には緑釉陶器もある。基壇南辺部分の雨落溝は、南肩が調査区外に出るため全体を把握できなかった。雨落溝（溝1）の底をさらに掘り下げるようにして、長さ14m弱、幅約1mの溝2が後掘りされている。溝底の西端と東端のレベル差は約50cmである。溝2の東端部分には炭片を含む焼土層が入り込んでおり、その中から礫に混じって古代に属する土器、埴、瓦や炉壁片が出土した。

(6) 瓦積暗渠

雨落溝（溝2）は基壇南東コーナー付近で途切れ、ここから北隣に瓦積暗渠が東に延びる。これは、細い溝の中に丸瓦の凸面を上にして広端と狭端部を重ねるように一列に連ね、埋め戻したものである。東側の3枚分は土壌の埋土に没しており、溝の掘り方は認められなかった。溝2と併設するように後から掘られたらしく、基壇の修復に伴って設置された可能性もある。使用された丸瓦は8枚で、軒丸瓦の瓦当が剥離し、狭端付近に釘孔のあるものが2点含まれる。色調、焼成などからこの2点は、軒丸瓦Ⅲ型式の可能性が高い。瓦積みの総延長は2.3m。瓦列の東端は西端より15cm程度低い。瓦積みの西には小さな凹みがあり、底に堆積する炭、焼土層から瓦、土器片、炉壁片などが出土した。丸瓦は取り上げずに現状保存とした。

(7) 瓦溜り

トレンチ2の基壇上面から比較的保存状態の良い瓦溜りが検出された。上層の瓦は破損がひどく、細かい破片が目立つことから、中世以降に踏み荒らされた状態と思われる。上層の瓦を除去すると比較的残りの良い瓦が堆積している。断ち割り等の調査は行わず、状況を観察するにとどめた。

(8) 炉壁片を含む焼土層

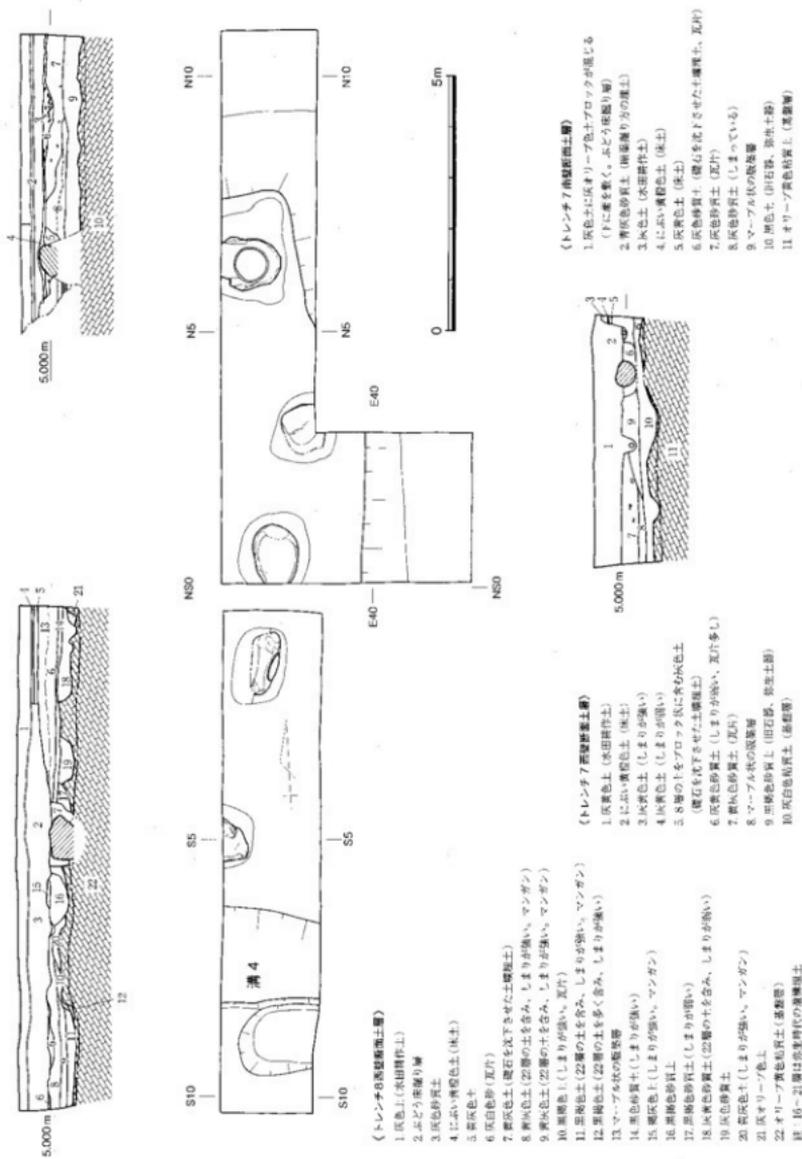
基壇南東コーナー一帯で炭片の混じる焼土層が検出され、土器、瓦などの遺物と共にコンテナ1箱分の炉壁片が出土した。この層は、先にふれたように、溝2の東端部分、瓦積暗渠西側の凹みにも堆積している。炉壁片は木炭が入り込んだものが多く、被熱で胎土がガラス化している部分も見られ、溶解が非常に進んでいる。磁着度がないことから鉄に関連したものではなく、銅関連の溶解炉に伴う炉壁と推定される¹⁾。なお、この炉壁片は、溝2で10世紀後葉の土師器と共伴する。

(9) その他

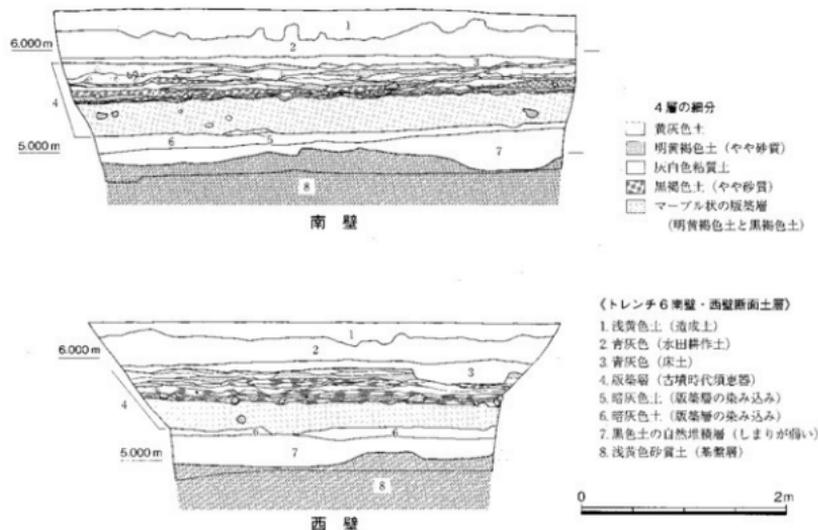
トレンチ1の南西隅で、基壇築造のため原地形を削り出した跡が確認された。雨落溝南西コーナーのすぐ外側に地形の高まりが残り、その裾に沿って幅20cmの溝3が検出された。東側は雨落溝に切断されている。

2. 建物Ⅱ

建物跡Ⅱは、建物跡Ⅰの推定中心である（NS0m、EW0m）から東30～40m付近に設定したトレンチ6・7・8・9において新たに発見された礎石建物である。基壇破壊のため建物規模、礎石配列等の詳細を明らかにすることはできなかったが、建物跡Ⅰとともに寺院の東西主軸線上に配置された主要伽藍と考えられる。



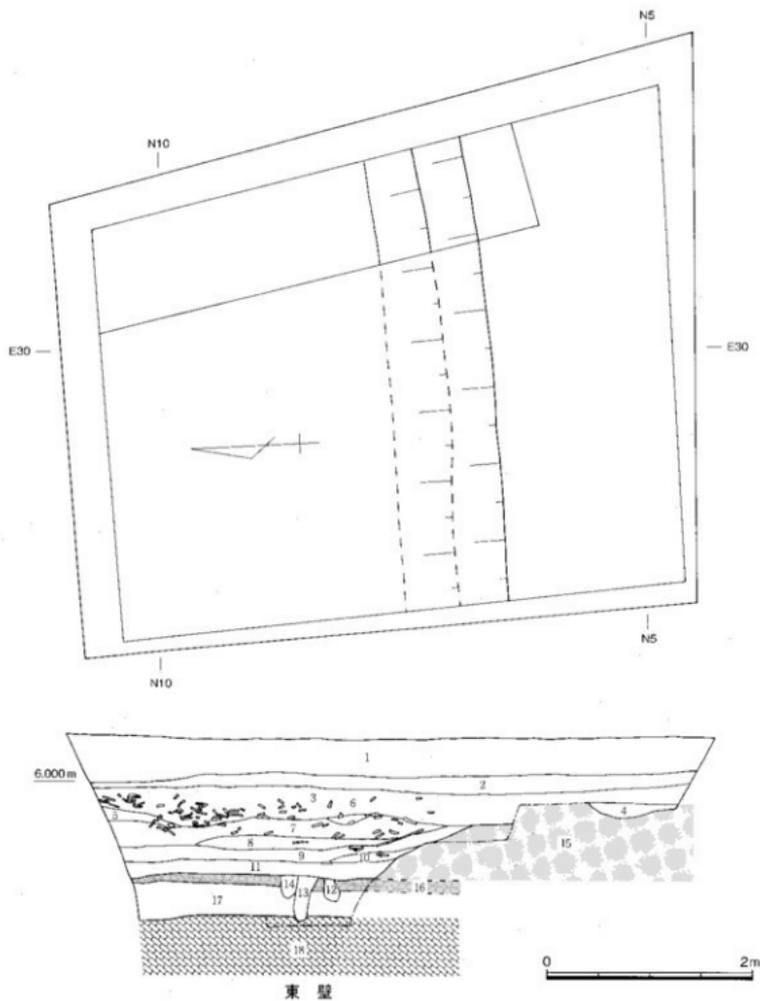
第9図 トレンチ7・8平面・断面図(S=1/100)



第10図 トレンチ6南壁・西壁断面図 (S=1/50)

(1) 基壇

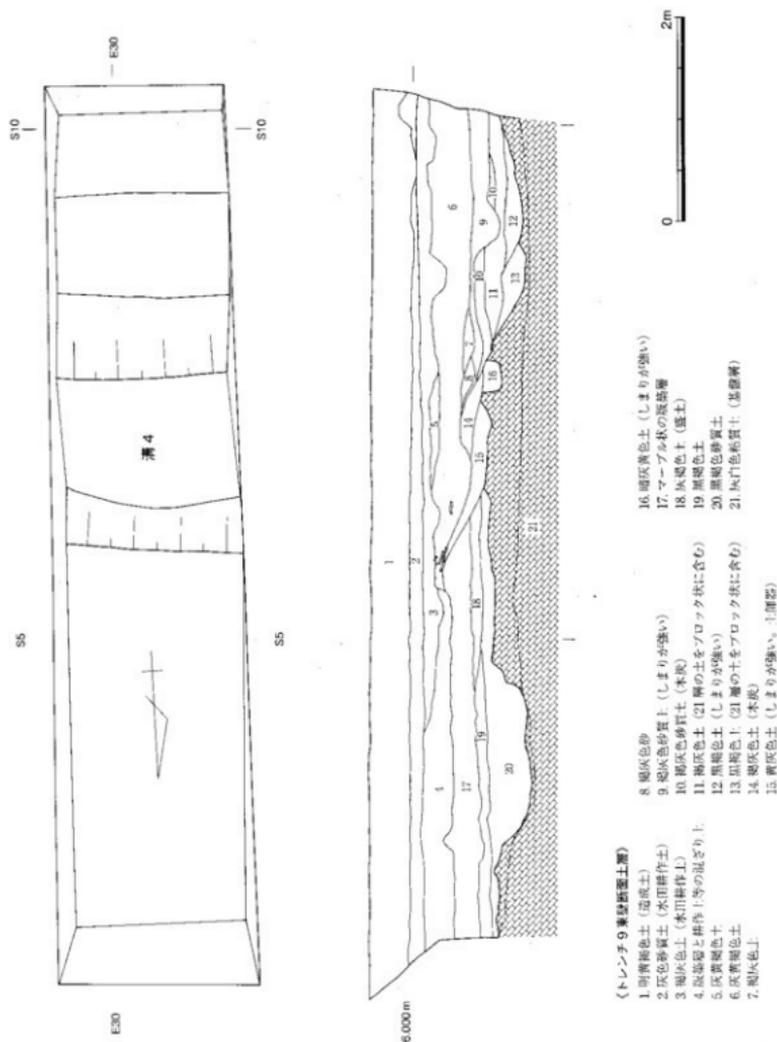
基壇は、軟弱な斜面堆積層である黒色砂質層の上に版築工法により築かれており、残存する版築層の厚さはトレンチ6で約120cmを測る。下層部分は明黄褐色土と黒褐色土がマーブル状に混ざり合っており、水分を多く含んだ状態で盛土を行ったためか土層の境が渦巻くように見える。上層部分は、基盤層の土に似る灰白色粘質土、黄灰色土や下層部分にあるような明黄褐色土、黒褐色土が縞状に重なり合っており、乾いた状態の土を突き固めて安定させているようである。現状では、下の黒色砂質層から湧水があるものの、下層、上層とも安定して締まっている。基壇上面は、ぶどう畑の床掘りの際に広く削平されている。トレンチ7で基壇の北端と東端を探り、トレンチ8・9で基壇の南端の検出を試みたが、明確にすることはできなかった。基壇端の想定される部分が何度となく攪乱や削平を受けているため、版築層は端で次第に薄くなって消滅するのである。ただ、基壇の南側には溝4が存在するので、おおよその南辺の位置を想定することは可能である。トレンチ21で基壇北辺の法面が検出された。上部は後世の掘削を受けているが、基壇の下端部は残っていた。この部分に基壇外装は認められないが、杭跡のような複数のピットの存在が注意される。また、基壇築造に際し整地が行われていることが確認された。斜面堆積の黒色砂質層の上に厚さ10数cmのにぶい黄色土層がみられ、基壇はその上に築かれている。この整地層は、基壇北辺からさらに北側に広がる。基壇北の堆積土からまとまった量の瓦が出土した。



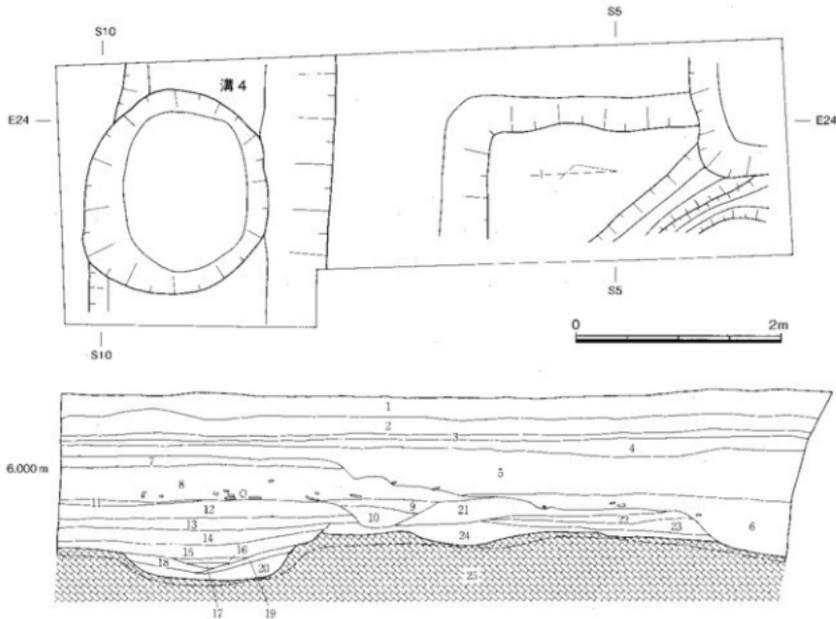
《トレンチ21 東壁断面土層》

- | | | |
|------------------|--------------------------|----------------------------|
| 1. にぶい黄褐色土 (造成上) | 7. 暗灰黄色土に版築層の土がブロック状に混じる | 13. 褐灰色土 |
| 2. 褐灰色土 (水田耕作土) | 8. 褐灰色土 | 14. 褐灰色土 |
| 3. 黄灰色土 (丸、中世土器) | 9. 灰色砂質土 | 15. 版築層 |
| 4. 黄灰色土 (雑乱層) | 10. 黄灰色砂質土 | 16. にぶい黄褐色土 (基礎築造に先立つ整地層) |
| 5. 灰黄褐色土 | 11. 灰黄褐色土 | 17. オリーブ黒色土 (弥生土器、土師器、須恵器) |
| 6. 灰色土 | 12. 灰褐色土 | 18. 緑灰色砂質土 (基盤層) |

第11図 トレンチ21平面・断面図 (S=1/50)



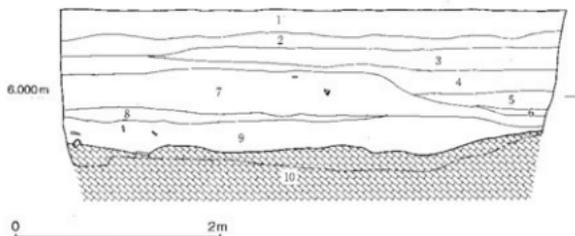
第12図 トレンチ9平面・断面図 (S=1/50)



〈トレンチ10西壁断面土層〉

- | | | |
|-------------------------------|------------------------------------|-------------------------|
| 1. 黄褐色土 (造成土) | 10. 細かい木炭片が集中する層 (土壌埋土) | 19. 18とはほぼ同じ |
| 2. 灰色粘質土 (水田耕作土) | 11. 灰黄褐色土 | 20. 黒褐色土 |
| 3. にぶい褐色 (床土) | 12. 褐色土 | 21. 褐色土 |
| 4. 褐色土 (マンガン) | 13. 黄灰色砂質土ににぶい黄色粘質土が混じる | 22. 13層とはほぼ同じ |
| 5. 明黄褐色土に灰色砂が混じる | 14. 褐色砂質土 | 23. 黒褐色土 |
| 6. 灰黄褐色土に灰色砂が混じる | 15. 黒褐色土 | 24. 25層の上を用いた整地層 |
| 7. 黄灰色砂質土 | 16. 褐色土と灰色砂の混じり土 | 25. 緑灰色粘質土ににぶい黄色粘質土が混じる |
| 8. 褐色砂質土に灰黄褐色土がブロック状に混じる (瓦片) | 17. 黒褐色土 | |
| 9. 褐色砂質土 (土壌埋土) | 18. にぶい黄色粘質土、緑灰色粘質土、黒褐色土の混じり土 (糞状) | |
- 註：16層～20層は溝埋土。13層、22層は整地層か？

第13図 トレンチ10平面・断面図 (S=1/50)



〈トレンチ12西壁断面土層〉

- | |
|----------------------|
| 1. 明黄褐色土 |
| 2. 灰黄褐色砂質土 |
| 3. にぶい褐色やや粘質土 |
| 4. 明褐色土 |
| 5. 黄灰色土 |
| 6. 黄灰色土 |
| 7. 灰黄褐色土 |
| 8. 黄褐色砂質土 |
| 9. 褐色粘質土 (瓦、古代・中世土器) |
| 10. にぶい褐色粘質土 (養蚕層) |

第14図 トレンチ12西壁断面図 (S=1/50)

(2) 礎石

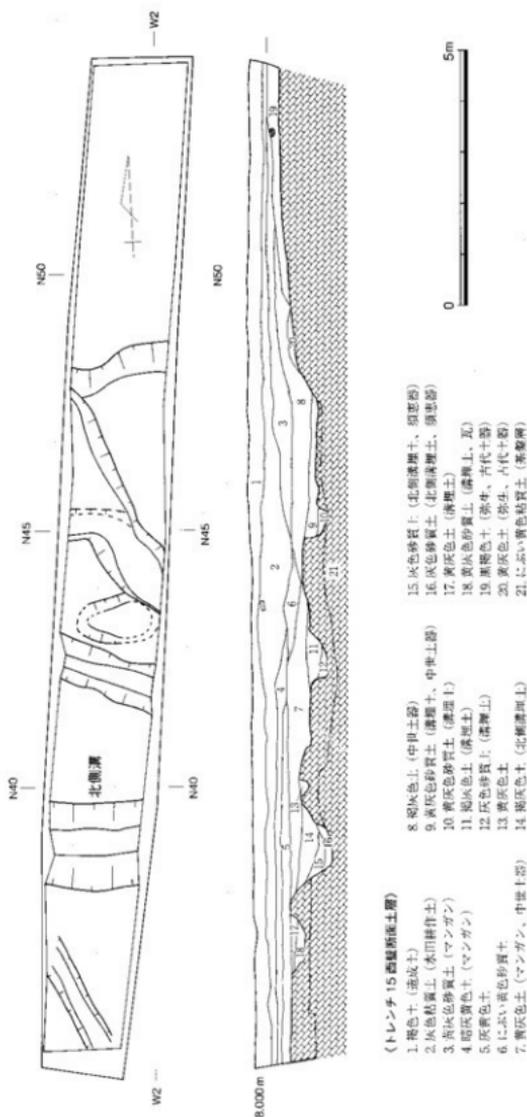
建物跡Ⅱの基壇の東端にあると考えられるトレンチ7・8で、南北約12mにわたって5個の礎石が検出された。これらは、2～3.5mの間隔を空けて並んでいるように見えるが、いずれも動かされたものである。版築層検出面より下位にあり、据え付けの土壌と見間違えるような穴を掘って落とし込んでいる。おそらく、開墾の際に基壇の東辺部分が深く削られ、同時に礎石が一段低い位置に下げられたと考えられる。5個の礎石のうち北から1番目と4番目のものは円座の造り出しがあることが確認された。他の3個については動かされた際に天地が逆になった可能性もある。

(3) 建物南側の溝(溝4)

建物Ⅱの南側で溝4が検出された。トレンチ8・9・10の南端でほぼ直線的に延び、溝の最高位はトレンチ10と12の間に存在する。トレンチ8から10にかけての溝底の高低差は約50cmである。溝の南肩が調査区外にあるため、幅は不明である。溝の中には土塊状の大きな凹みが存在する。溝4は、建物Ⅱ南辺の雨落溝としても機能していた可能性がある。

(4) 基壇と建物の規模

以上のことから、建物Ⅱの基壇の規模を推定すると、南北は15～16m程度となる。東西規模に



第15図 トレンチ15平面・断面図(S=1/100)

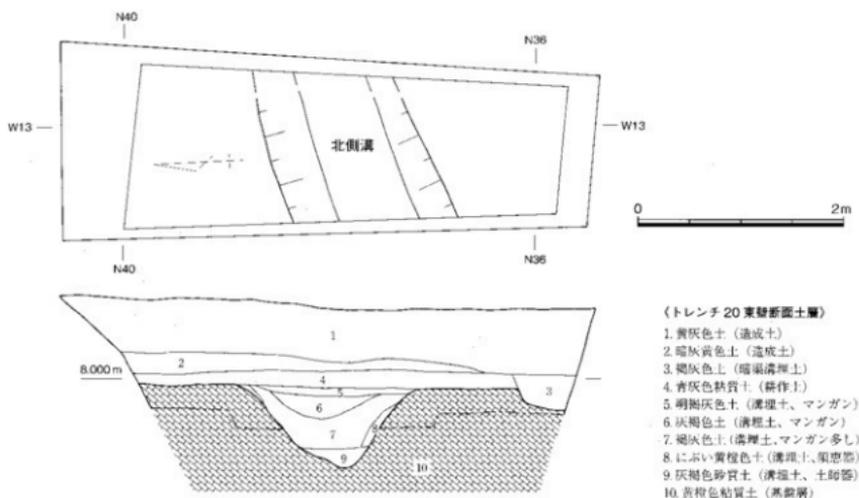
については、基壇東辺を版築層が消えるあたりと考え、西辺をトレンチ9と10の間のE27~28mあたりを考えなくてはならないが、今回の調査では根拠が不十分で、今後の課題として残される。南北15~16mの基壇に見合う建物を考える場合、仮に柱間寸法を10尺等間とし、軒の出を3~4m程度とすると4間分(約12m)が立ち並び、礎石の出土状況とも合致する。しかし、建物Iとの位置関係から東面する建物を考える場合、柱間の数が偶数になることは不都合といえる。そこで、柱間寸法を9尺等間にすると5間分(約13.5m)が立ち並び、問題は解消される。建物IIの規模の推定は、そのものの性格や伽藍配置を考える上で重要な問題を含んでいるが、いずれにしても講堂と考えられる建物Iより一回り小さい規模が想定される。

(5) 建物II周辺部

建物IIの基壇西側についてはトレンチ5・10・12で調査が行われた。これらのトレンチでは、版築層直下で見られる黒色砂質層は確認されず、地形の変化が認められた。トレンチ10で基盤層の上に薄い盛土があり、寺院建立に伴う整地層と理解された。また、溝4が埋没した後も整地面を形成していることが土層の断面観察により認められる。

3. 寺域に関連した調査

日知庵寺の寺域を立地条件から考える場合、南北西の三方が閉ざされた谷間にあることからある程度の推測は成り立つ。しかし、これまで実際に寺域を画する施設が確認された例はなく、手探りの状態で調査を進めた。その結果、築地等は検出することはできなかったが、寺域の区画に関連する可能性のある北側溝が検出された。また、北東部では掘立柱列、南北溝が検出され、建物跡の存在が予想された。



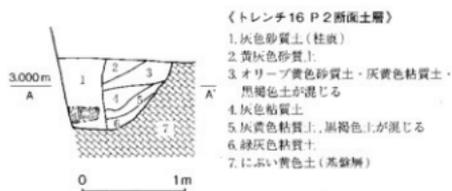
第16図 トレンチ20平面・断面図(S=1/50)

(1) 北側溝

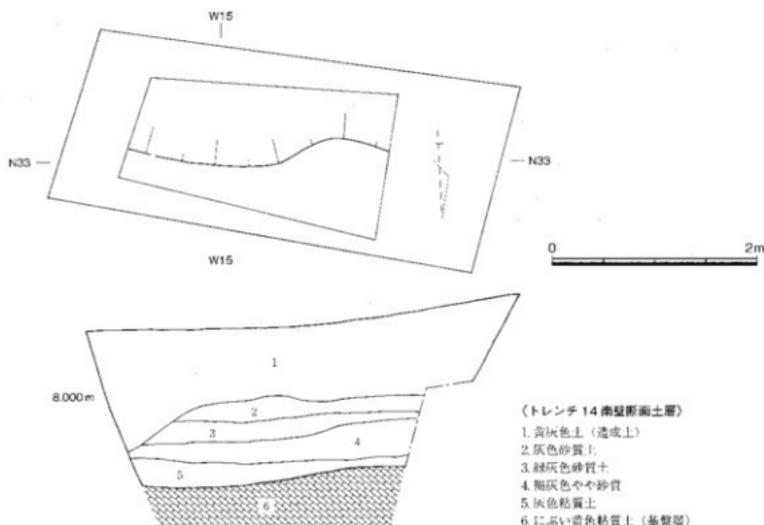
寺域の北側、トレンチ15・20で検出された北側溝は断面V字状の溝で、幅1.6～2.0m、検出面からの深さは80cmを測る。建物跡Ⅰの中心から約40m北に位置し、トレンチ15で東西を向く。トレンチ20では大きく南に曲がり、トレンチ14の北側で終わるか、あるいはトレンチ14の西側を回って南に延びると思われる。出土遺物には須恵器長頸壺等があり、注意される。この溝を寺域を隔てる遺構と関連付けるならば、築地塀等の障壁に付属するものとしてとらえなければならないが、周辺でそのような施設を想わす痕跡は確認されなかった。また、トレンチ15では北側溝の北層以北は中世の溝等により改変を受けているが、北側溝の中心から約10m北へ行くと地形の上がり方が確認された。

(2) 掘立柱列

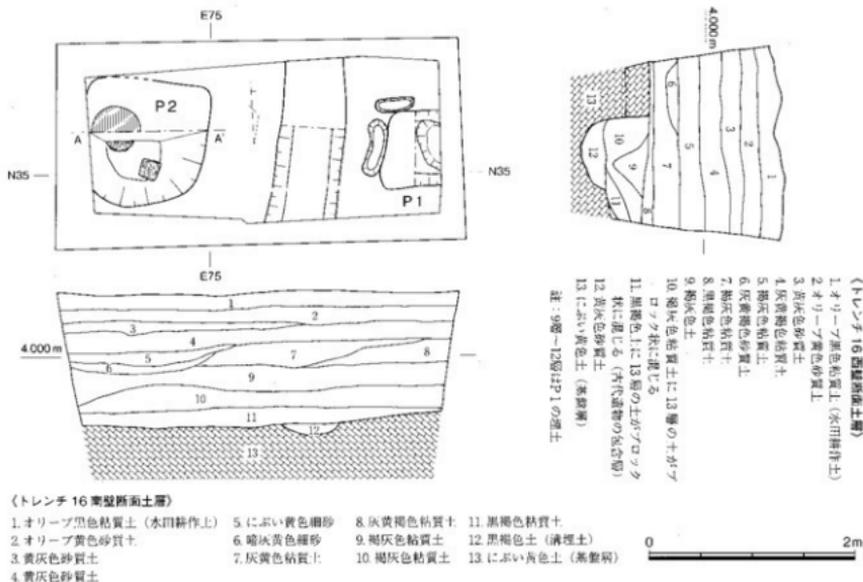
北側溝を東に延長したあたりのトレンチ16・17では、東西に並ぶ柱穴が3基検出され、掘立柱列とした。P1とP2の柱間は約3.0mを測り、大型建物を構成する可能性がある。P2からは直径約30cmの柱の根元が出土した。また、トレンチ17・22で南北に延びる細い溝が検出された。以前、この北側の道路



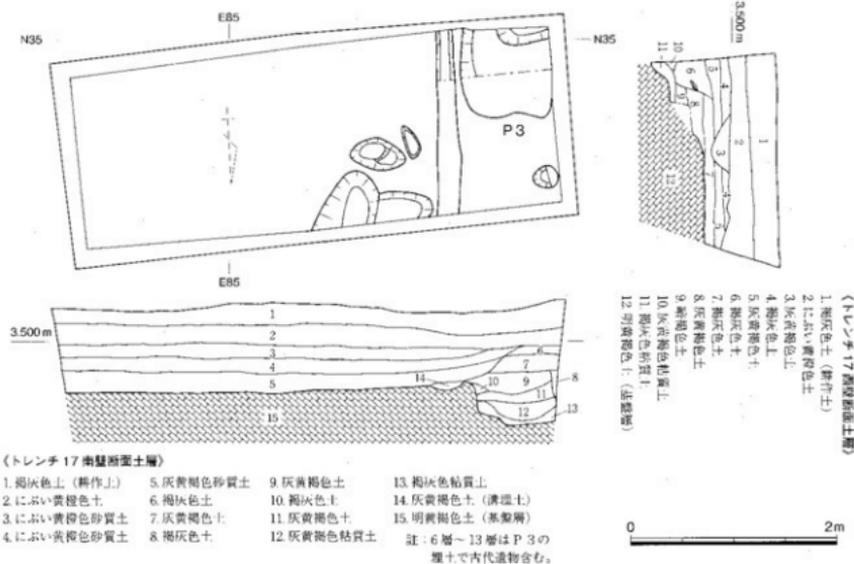
第17図 P2断面図(S=1/50)



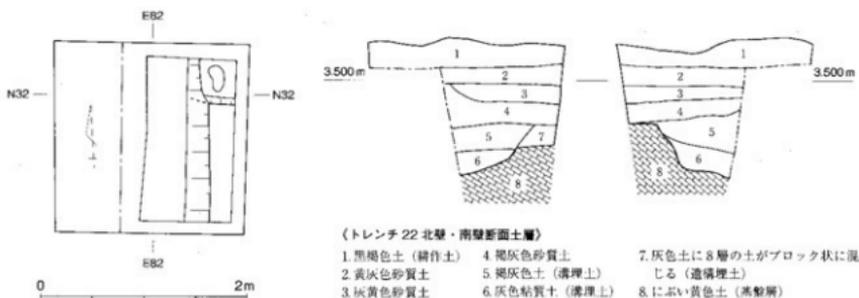
第18図 トレンチ14平面・断面図(S=1/50)



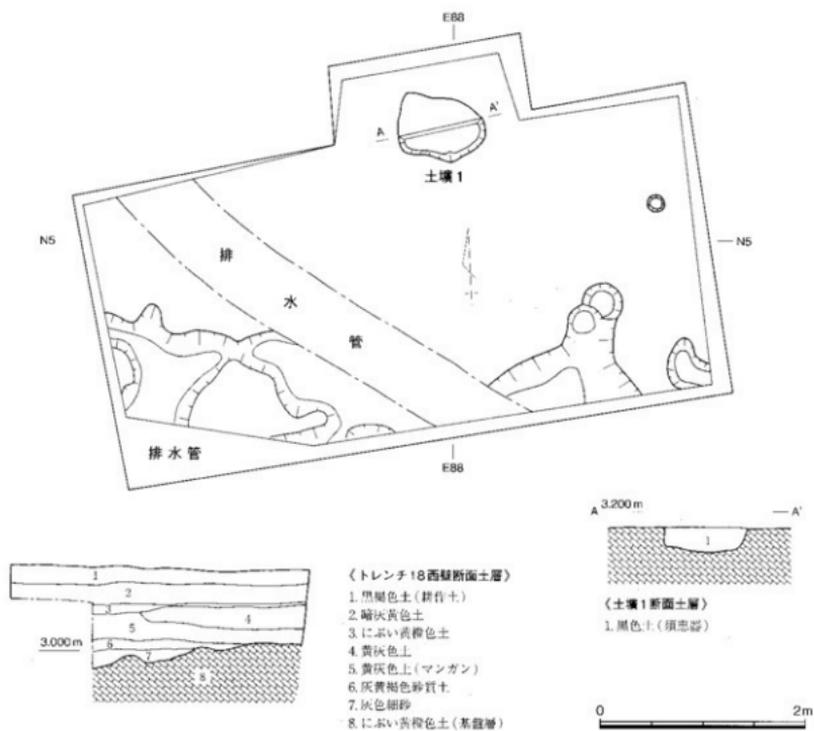
第19図 トレンチ16平面・断面図 (S=1/50)



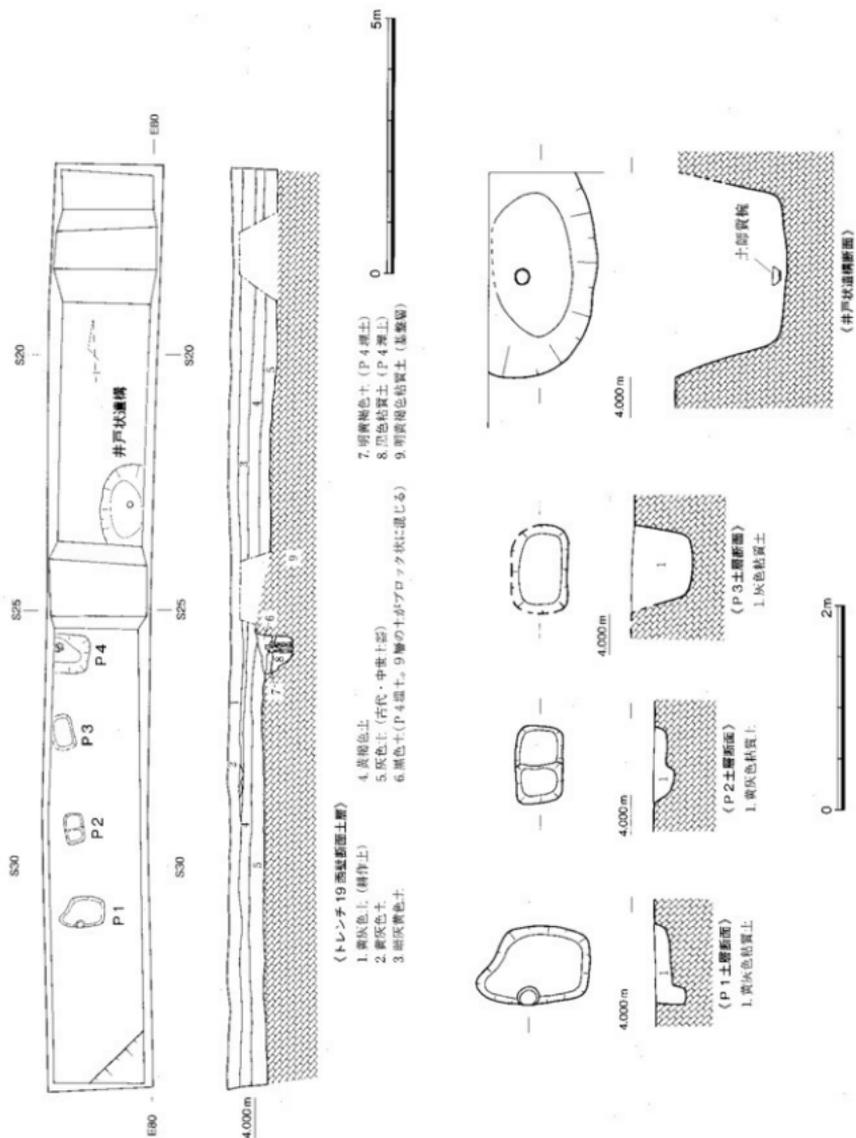
第20図 トレンチ17平面・断面図 (S=1/50)



第21図 トレンチ22平面・断面図 (S=1/50)



第22図 トレンチ18平面・断面図 (S=1/50)



第23図 トレンチ19平面・断面図 (S=1/100・1/50)

工事中に古瓦が多量に出土したとの情報があり、瓦葺き建物の可能性を含めて考える必要がある。

(3) 掘立柱等

調査範囲の南東隅に設定したトレンチ19では古代に属する4基の柱穴と中世の井戸状遺構1基が検出された。P1～P4は深さ、平面形がそれぞれ異なるが、ほぼ等間隔に並び一連の遺構の可能性はある。P1からは細い木片が出土した。P4は隅丸方形の掘り方で、直径約20cmの柱の根元が残っていた。

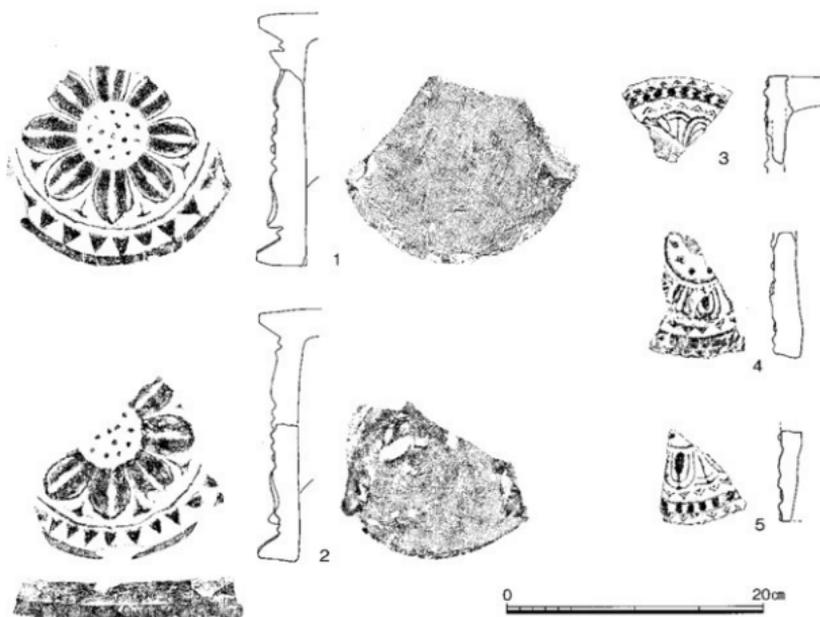
第3節 出土遺物

1. 瓦類

(1) 軒丸瓦 (第24図～第26図)

I 型式 (1～2)

1・2は建物Iから出土した。瓦当文様は素弁八弁蓮華文を主文とする。中房は、肉厚の蓮弁に囲まれて凹状を呈している。その中に1+4+10の蓮子を配する。蓮弁は、基部から丸みをもって立ち上がり、弁端を大きく反転させる。弁中央に溝を入れ、高い凸線で縁取りすることでより立体的に表現されている。間弁はくさび形で明瞭な稜をもつ。脚部は蓮弁の長さの中ほどまで延びる。弁



第24図 軒丸瓦実測図1 (S=1/4)

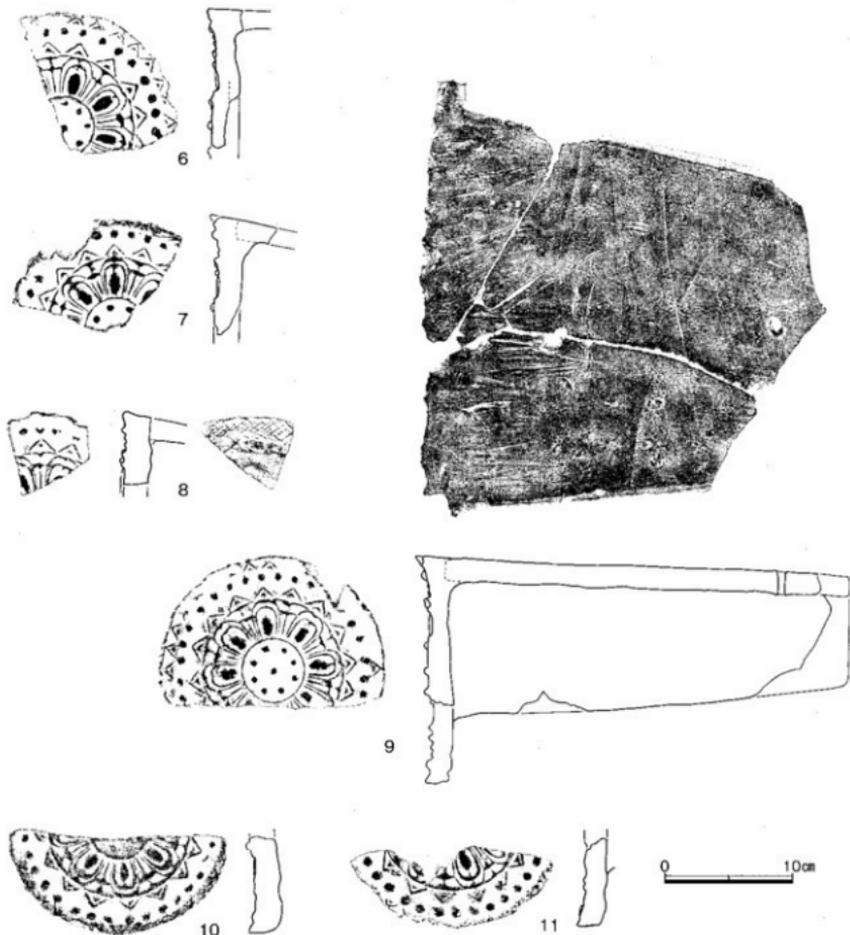
区の外側には圏線がまわる。外縁は高い傾斜縁で、27個の外凸鋸歯文をめぐらしている。瓦当直径は19～20cm程度。瓦当外縁の上端から約18mmの位置に范端痕跡がある。瓦当裏面に布目圧痕が残る。丸瓦接合以前のもので、布を張った平らな面に押し付けられたような圧痕である。瓦当部と丸瓦部の接合方法については、今回の出土資料の中で明確に知りえるものはないが、これまでに出土・採集された資料を見ると、瓦当部上端付近に丸瓦を差し込んで接合し、凸面側と凹面側にあまり多くない量の粘土を貼り付けているようである。筒部先端の凹面側を削り落とし、瓦当裏面に食い込ませているものがある。色調は灰色、灰白色を呈し、胎土は精良。焼成は良好である。

Ⅱ型式(3～5)

3・5は建物Ⅰから、4はトレンチ10から出土した。瓦当と丸瓦とに分離した小片であるため、これまでの知見を参考にしながら内容を述べる。瓦当文様は重弁八弁蓮華文を主文とする。中房は低く突出し、その上に1+8の蓮子が並ぶ。重弁となる蓮弁は、先が太くなった楕円形を呈し、高く隆起する長楕円形の子葉を有する。弁端は中央に稜をもって立ち上がり、反転を表現する。弁尖の稜は外側の弁端から内側の弁を經由して子葉先端まで繋がっている。間弁は蓮弁と同じく重弁のような形状で、長く伸びる中央の稜は中房に達する。弁区の外側には、外向二重鋸歯文・突帯上に並ぶ珠文帯・外向二重鋸歯文の順にめぐっている。外縁は平坦縁である。范端痕跡と考えられるものは確認できない。瓦当直径は約17cm。接合方法については、瓦当裏面の接合痕跡により、丸瓦は瓦当部上端の高さで接合されていることがわかる。その際、丸瓦の筒部先端に刻み加工を施すものがある。丸瓦を瓦当裏面に圧着し、凹面側から接合粘土をあて、形状に沿って円弧を描くようにナデを加え固定させる。そして、瓦当裏面下半に外縁に沿って弧を描くように一条あるいは二条の太い凹線状の強いナデが施され、その位置の側面にも凹線状のヨコナデが加わる場合がある。使用された接合粘土の量はあまり多くないようで、特に瓦当部上端には薄く粘土を貼り付けた程度と推測される。色調は灰色を呈し、胎土は精良。焼成は良好である。Ⅱ型式は、「備中式」と呼ばれ、瓦当面に見いだされる范傷から、二子御堂奥窯跡群第4類、秦原庵寺第3類と同范関係にある。

Ⅲ型式(6～11)

重弁八弁蓮華文を主文とする軒丸瓦で、軒丸瓦の中で出土数は最も多い。6はトレンチ10から、7～10は建物Ⅱから、11は建物Ⅰから出土した。中房は突出し、その上に1+8の蓮子が並ぶ。重弁となる蓮弁は、先太りの楕円形を呈し、これと相似形の子葉を有する。内外の弁ともに弁端は中央に稜をもって立ち上がり、反転を表現する。間弁は重弁を模したように二重となるが、頭部が弧状となって弁端に接しているため、弁区全体が凹形にまとまる。稜線で表される脚部は中房にまで達する。弁区の外側には外向二重鋸歯文・珠文・外向二重鋸歯文の順に文様帯がめぐっている。鋸歯文、珠文はⅡ類のものに比べて大きく、左右の間隔は広い。外縁は外側の鋸歯文帯の部分で内傾し、三角縁風となる。范端痕跡と考えられるものは確認できない。接合痕跡からⅡ型式と同じような接合方法が想定される。9の瓦当直径は17.5cmを計測する。丸瓦凸面の広端側は瓦当接合に際して縦方向のナデが施され、それ以外では回転ナデ調整が残る。回転ナデ調整以前の成形痕として格子目叩きがかすかに認められる。凹面には布目圧痕が残る。瓦当面から28cmの位置に直径6～7mm

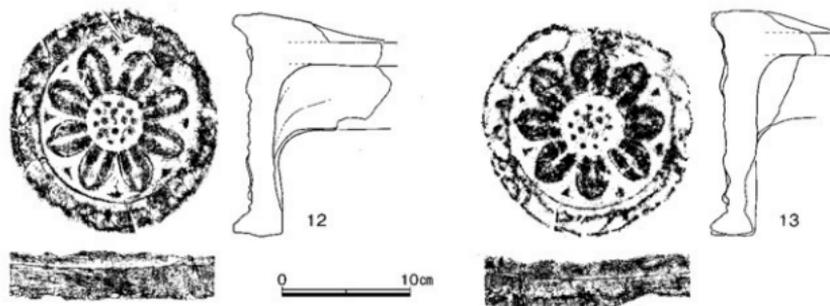


第25図 軒丸瓦実測図2 (S=1/4)

の釘孔が存在する。色調は明るい灰色で、胎土は精良。焼成は堅緻である。このように灰色系で焼成の良好なものと灰黄色を呈し、焼きがあまい個体がある。Ⅲ型式は、Ⅱ型式と同様「備中式」と呼ばれ、二子御堂奥窯跡群第2類と同范関係にある。

Ⅳ型式 (12~13)

12・13は建物Ⅰから出土した。瓦当文様は素弁八弁蓮華文を主文とする。連子と蓮弁の配置や他の特徴からⅠ型式と同じ范型を使用したと思われるが、范傷の進行が著しく、製作技法も異なる



第26図 軒丸瓦実測図3 (S=1/4)

ことから後出の別型式として扱うことにする。瓦当文様はシャープさを欠き、I型式で見られるような細かい表現は観察できない。外縁をめぐる鋸歯文に至っては存在すらも確認できない。文様全面には木目の条理に沿った無数の范傷が観察でき、幅が1mm以上に達する部分もある。弁端から圏線にかけて文様とは関係ない粘土の塊が二か所ある。范型の木質が老朽化して、欠損した状態であったと思われる。花卉あたりには、細いしわのような線が一巡する。おそらく、范型の中央部分と外周部分に分けて粘土が入れられ、押し込みが不十分なために粘土の境目が表れたのだろう。

瓦当直径は12で16.5cm、13で17.0cmとやや小さく、厚ぼったい作りである。瓦当外縁の上端から10～15mmの位置に范端痕跡がある。瓦当裏面には布目圧痕はみられない。瓦当部と丸瓦部の接合方法については、瓦当部上端から1.5cmくらいの高さに丸瓦を差し込んで凸面側と凹面側に相当量の粘土を貼り付けて接合している。凸面側にはヘラケズリが施され、凹面側は、丸瓦から瓦当裏面下端にかけて工具によるナデが隙間なく施される。接合する丸瓦の凸面には縄目の叩き痕が残る。色調は明るい灰色、灰黄色のものがある。胎土中には砂粒が非常に多く含まれ、I型式との瓦当径の違いは、范型の縮みに加えて焼成時における収縮率の差と理解できる。全体的に、焼成はあまい。「吉備古瓦図譜第二輯」で奈良時代前期の瓦として掲載された資料も軒丸瓦IV型式と思われる。創建瓦とされるI型式と同類に扱われてきたようである。軒丸瓦I型式からIV型式の間にいくつかの段階が存在する可能性は否定できない。

(2) 軒平瓦 (第27図～第32図)

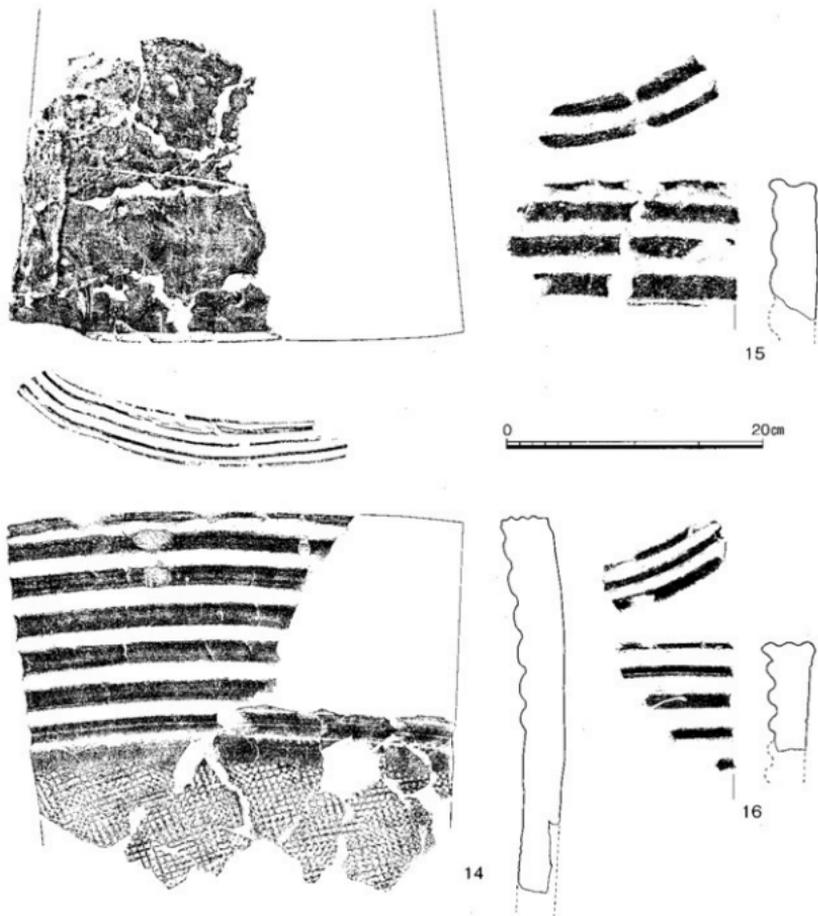
瓦当文様はすべて型引きの重弧文である。これらは、頸部の形状や施文の有無により、I型式(頸部を平行凸帯で飾るもの)、II型式(段頸施文のもの)、III型式(段頸無施文のもの)、IV型式(直線頸となるもの)に大別できる。I型式とII型式は頸面施文軒平瓦と呼ばれることがある¹⁹⁾。

I型式(14～16)

頸部に数条の平行凸帯を有する重弧文軒平瓦である。14・16は建物I(炬壁片を含む焼土層)から、15はトレンチ12から出土した。

14は三重弧文で、3条の凸線(弧線ともいう)と4条の凹線からなり、型引きが少し重複した部

分が認められる。凸線および凹線の断面形は隅丸の台形状で、凸線の下底幅7mm、凹線の幅3mmくらいである。頸部には6条の平行凸帯を有する。凸帯の断面形はカマボコ状で、幅約2cm。凸帯間は約7mmである。表面の砂粒が横方向に移動していることから、粘土円筒を回転させながら、厚く作った頸部に凹凸の型を押し当てて凸帯を削り出したと思われる。平瓦部の凹面には布目瓦痕が残るが、瓦当付近では横方向のヘラケズリで消される。凸面には一辺5mmくらいの正方形の格子目叩きが残る。側面は分割断面からなり、凸面側縁を平行凸帯の高さにあわせて面取りを行う。胎土は特に精良で色調は青灰色～紫灰色を呈する。炉の近くで二次的に高温にさらされたためか火ぶく



第27図 軒平瓦実測図1 (S=1/4)

れが生じて橙色になった部分もある。また、ガラス化した鉱物のかたまりが附着している。

15は、2条の凸線と1条の凹線からなる二重弧文である。下の凸線は瓦当垂下のような形状を呈する。頸部には3条の平行凸帯が残る。凸帯の断面形はカマボコ状で、幅約2cm。凸帯間は約6mmである。凹面には布目圧痕が残る。側面は分割截面からなり、側縁の面取りは行われていない。胎土には砂粒が多く、色調は黄灰色。焼成はやや軟質である。

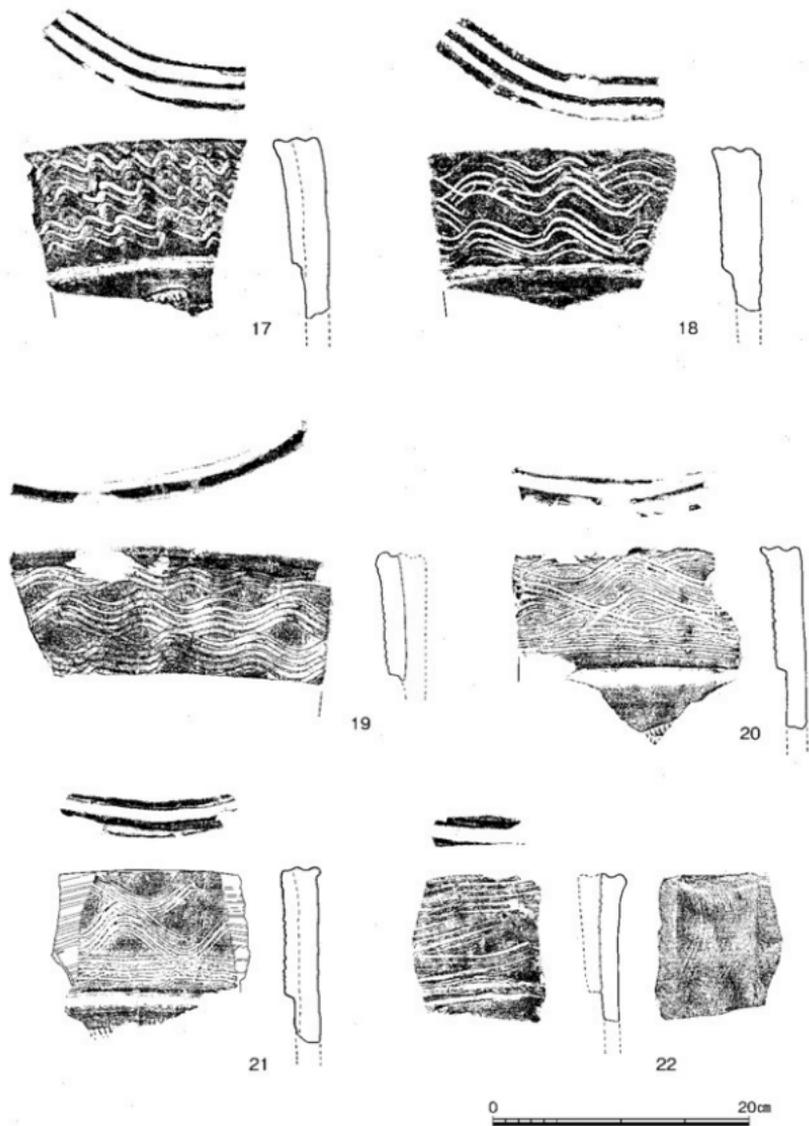
16は、3条の凸線と2条の凹線からなる三重弧文である。一番下の凸線は瓦当垂下のような形状で、頸部の平行凸帯とも調和がとれている。凸線および凹線の断面形は半円形状で、凸線の幅は1cmくらいである。頸部には4条の平行凸帯が残る。凸帯の断面形は半円形状で、幅約1.5cm。凸帯間は5～6mm程度である。凹面には布目圧痕が残る。凹面測線は幅広くヘラケズリが施され、凸面測線は平行凸帯の高さにあわせて面取りを行う。胎土は精良で色調は灰色を呈する。

II型式(17～27)

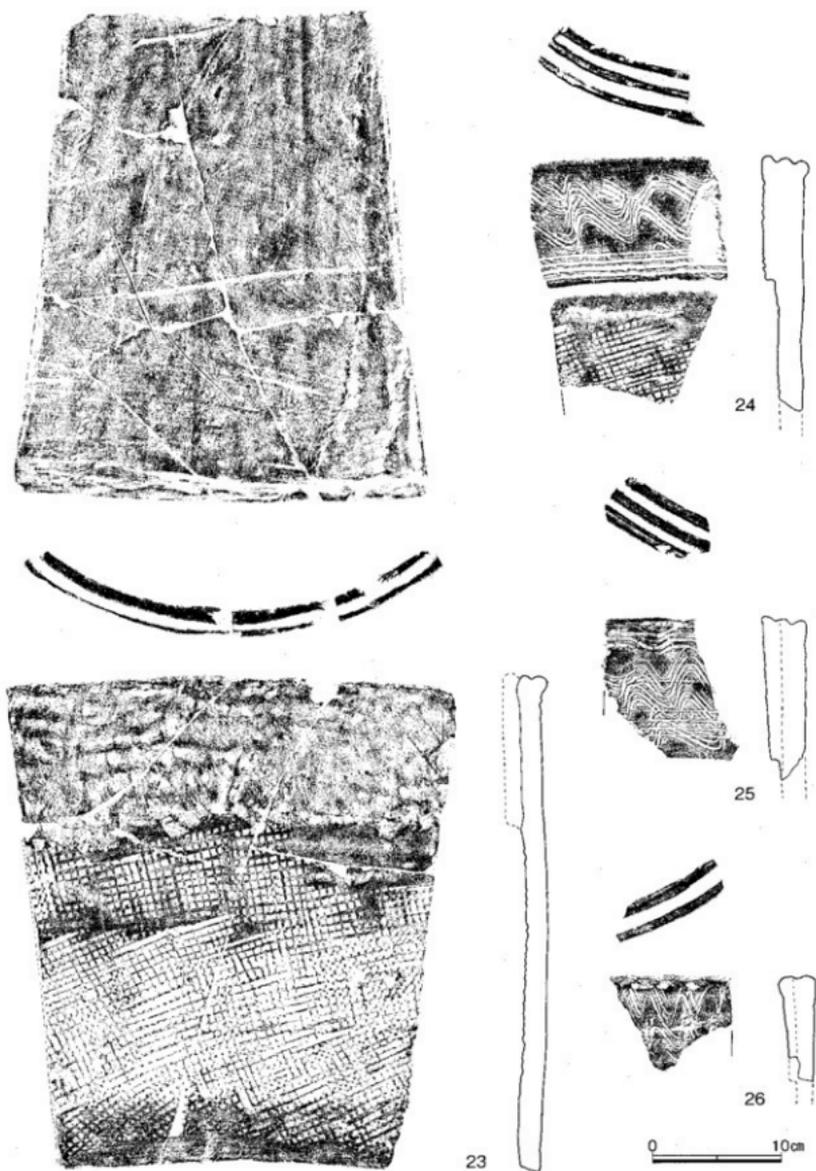
軒平瓦の中で最も出土数が多く、日畑庵寺で使用された主要な軒平瓦のグループと思われる。17はトレンチ12から、19・20・22は建物Ⅰから、他は建物Ⅱから出土した。瓦当文様には二重弧文、三重弧文があるが、両者間で瓦当施文に用いられる引き型の区別があるようには思われな。二重弧文のものは概して瓦当厚が薄く、瓦当の厚みが足りないために凸線が二本しか描かれず、二重弧文となる個体もある。三重弧文の場合、引き型の幅に対して厚みが不足しているものは、瓦当下側を拡張したり、粘土を外側に押し出すようにして3条の凸線を描き出している。引き型のずれが生じたため上端や下端に凹線が入る中途半端な文様も散見される。引き型はいくつか種類があり、凹線の幅が8～9mmくらいのもの(17～22)、5～6mmくらいのもの(24・26)、中央の凸線が特に幅広く、断面形がカマボコ状のもの(25)が認められる。頸面には4、5本単位の櫛状工具により波状文や平行沈線が描かれる。波状文だけで構成されるものと波状文と平行線とで構成されるものがある。剥離した頸部の貼り付け面には糸切り痕が残る。これに対して、平瓦部凸面の貼り付け面には、4、5本単位の櫛状工具により沈線を刻むもの(22)、格子目叩きを施すもの(17)、加工を行わないものがある。23の頸部が剥離した部分には指頭、手掌の圧痕が残る。平瓦部の凹面には板杵痕、布目圧痕、糸切り痕が残る。凸面には一辺5～6mmの正方形格子目叩きが施されている。全長38.2cm、広端幅32.2cm、狭端幅24.6cmを計測する。24の凸面にも一辺5～6mmの正方形目叩きが残る。24の平瓦部凸面には縦方向のナデ調整が施され、頸部が剥離した部分には刷毛目状工具による調整痕が認められる。凹面には、糸切り痕、布目圧痕、杵板痕が残る。また、粘土板合せ目が認められる。17・20・21の格子目は、9×3mmくらいの長形状で、平瓦II型式(45)のものに似ている。分割後の調整は、側縁に面取りが施されるもの、未調整のものがある。後者の場合、広端部分は平瓦部の厚みだけが刃物で裁断され、頸部の厚み部分が破面となることが観察できる。色調はさまざまで、灰色を主に浅黄色、黄褐色などがある。

III型式(28)

段頸となる重弧文軒平瓦のうち頸面に施文のないものである。1点だけが建物Ⅱから出土した。瓦当文様は三重弧文で、幅4～5mmの断面四角形状の凸線3条と凹線3条からなる。頸として平瓦



第28図 軒平瓦実測図2 (S=1/4)



第29図 軒平瓦実測図3 (S=1/4)

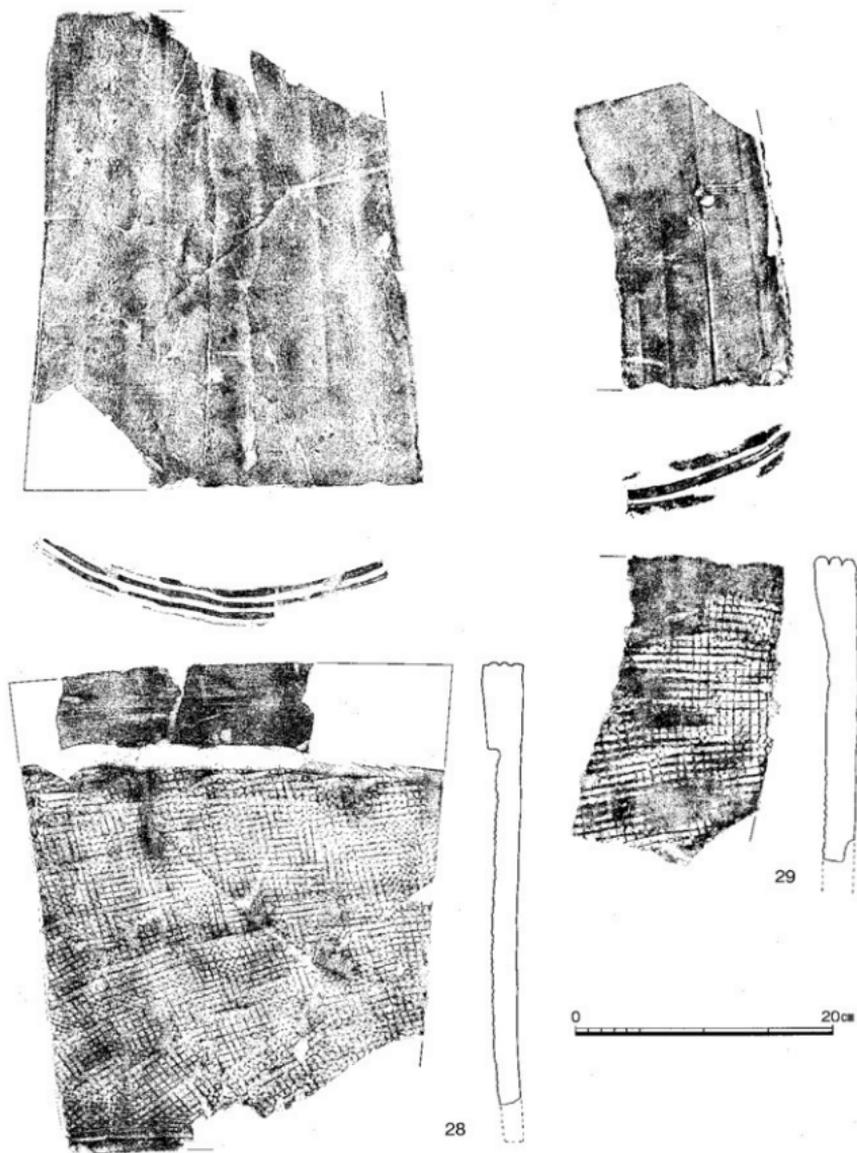


広端部に貼り付けられた粘土板の幅は5.5～8cmで、均でない。その貼り付け面に布目圧痕が残っているのが瓦の凹面側から観察できる。これに対する平瓦部凸面側には、指頭や手掌の圧痕が残る。顎面には瓦当施文に先行して回転ナデが施される。顎と平瓦部凸面の境目には強い指ナデが施され、接合の間隙を埋めている。平瓦部凹面全体に杵板痕、布目圧痕が残る、部分的に糸切り痕がみられる。また、粘土板合せ目が認められる。瓦当から約2cmの幅で軽くヘラケズリが施される。凸面には一辺5mm程度の正方形の格子目叩きが残る。側面はきれいな分割断面からなり、側縁は未調整。全長37.5cmを計測する。黄灰色を呈し、焼成は良好である。

IV型式 (29～32)

直線顎となる重弧文軒平瓦で、II型式に次いで出土数が多い。30・32は建物Iから、他は建物IIから出土した。瓦当文様は凸線と沈線からなる三重弧文あるいは四重弧文で、前者の方が出土数が多い。三重弧文の凸線の幅は1cmくらいで、断面形は半円形状と隅丸形状のものが知られる。沈線の深さは4～7mm程度。四重弧文の凸線の幅は7mmくらいで、断面形は半

第30図 軒平瓦実測図4 (S=1/4)



第31図 軒平瓦実測図5 (S=1/4)

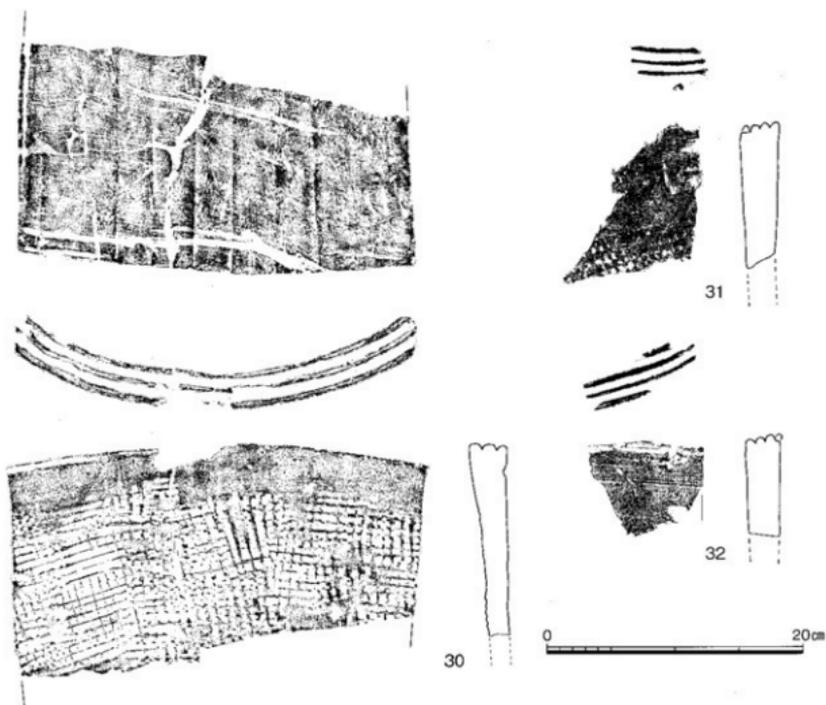
円形状を呈する。沈線の深さは5mm程度。瓦当面の左端あるいは右端を少し残して三重弧文が描かれているものがあり、引き型を当てて回転施文するときの始点、終点になった部分と思われる。平瓦凹面全体に桢板痕、布目疋痕が残り、部分的に糸切り痕がみられる。凸面には、瓦当面から数cm離して一辺5～6mmの正方形の格子目叩きが施されている。分割後、側縁を面取りするものが多く、仕上げは丁寧である。30の広端幅は30.8cmを計測する。色調は灰色、灰黄色、褐色のものがある。

(3) 丸瓦 (第33図～第36図)

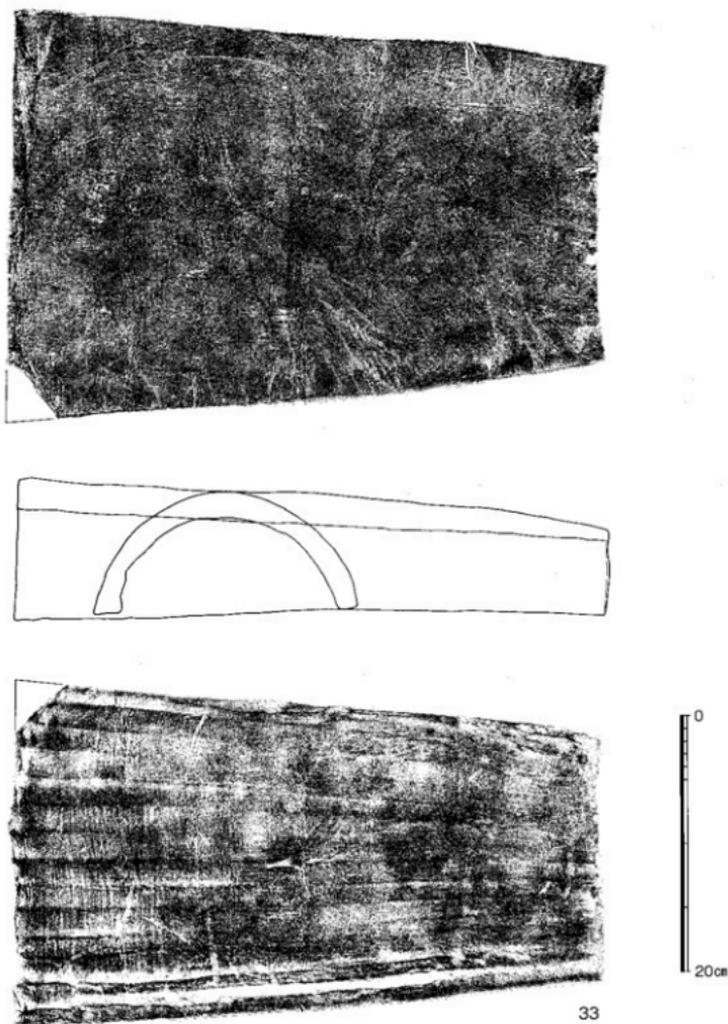
出土した丸瓦は全て行基葺き型式である。最終的な調整として凸面に回転ナデを施すもの (I型式) と縄目叩きを施すもの (II型式) に大別するにとどめたが、各型式は細分が可能と思われる。

I型式 (33～35)

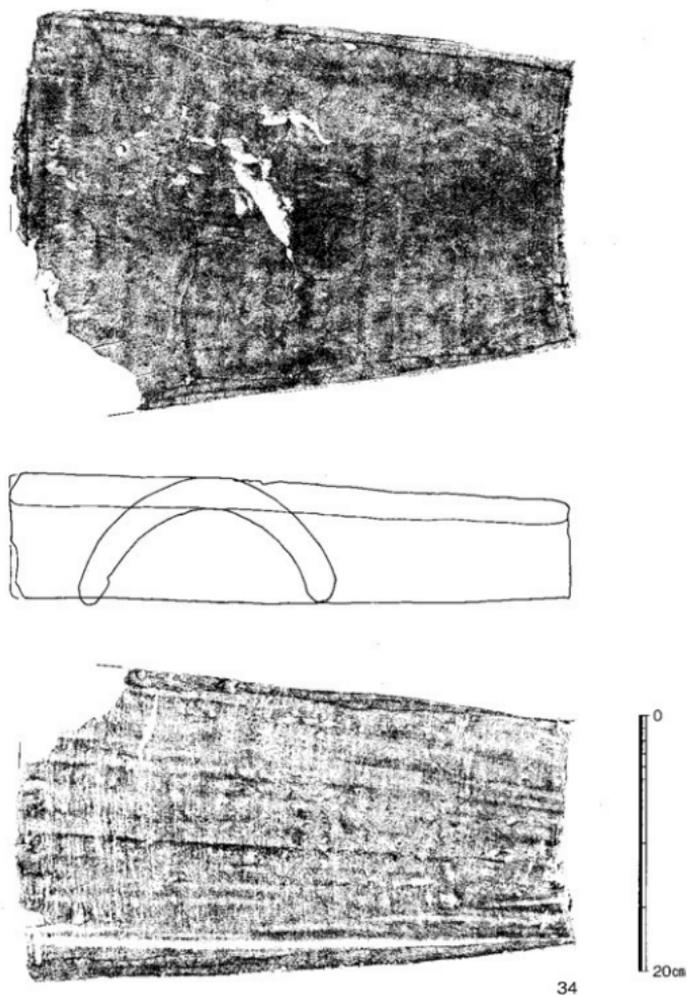
33は建物Iから、他は建物IIから出土した。凸面に回転ナデを施す前に、格子目叩きあるいは平行叩きを施したことが明らかなもの、成形痕が全く消されて不明なものがある。丸瓦の叩き成形は、平瓦に比べて浅く疎に施されたと思われる、格子目叩きか平行叩きか判別が困難なものも多



第32図 軒平瓦実測図6 (S=1/4)



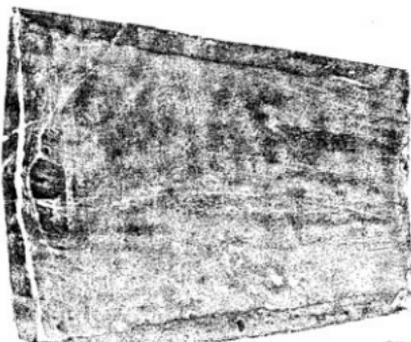
第33図 丸瓦実測図1 (S=1/4)



34

第34図 丸瓦実測図2 (S=1/4)

い。33は一辺5mm程度の格子目叩きが施された後回転ナデ調整を行ったもの。凹面には布目圧痕と平瓦凹面に見られるような杵板痕が残る。分割後は未調整で、広端を下にし、凸面から見て右側面は全面が分割断面、左側面は凹面側から裁断され、狭端側の一部に破面が残る。砂粒の動きから、分割の際には狭端から広端方向に刃ものを動かしていることがわかる。全長46.0cm、広端幅約



35



第35図 丸瓦実測図3 (S=1/4)

20.0cm、狭端幅15.4cmを計測する。色調は灰色を呈し、胎土は精良。焼成は堅緻である。34は、凸面の成形痕が回転ナデで消されている。凹面には布目圧痕、杵板痕のような段差が残る。分割後は、凸面広端縁、凹面狭端縁の半分、側縁に面取りを施す。全長43.4cm、狭端幅15.0cmを計測する。色調は白灰色を呈し、胎土は精良。焼成は良好である。35も回転ナデ以前の凸面の成形痕がわからないものであるが、わずかに布目圧痕が点在するように残る。凹面には布目圧痕が残るが、杵板痕のような段差はみられない。広端面から凹面広端縁にかけてナデ調整を行い、凹面側縁にはヘラケズリを施す。側面は部分的なヘラケズリにより面をそろえている。全長31.6cm、広端幅約20.5cm、狭端幅15.5cmを計測する。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良。焼成は堅緻である。

II型式(36・37)

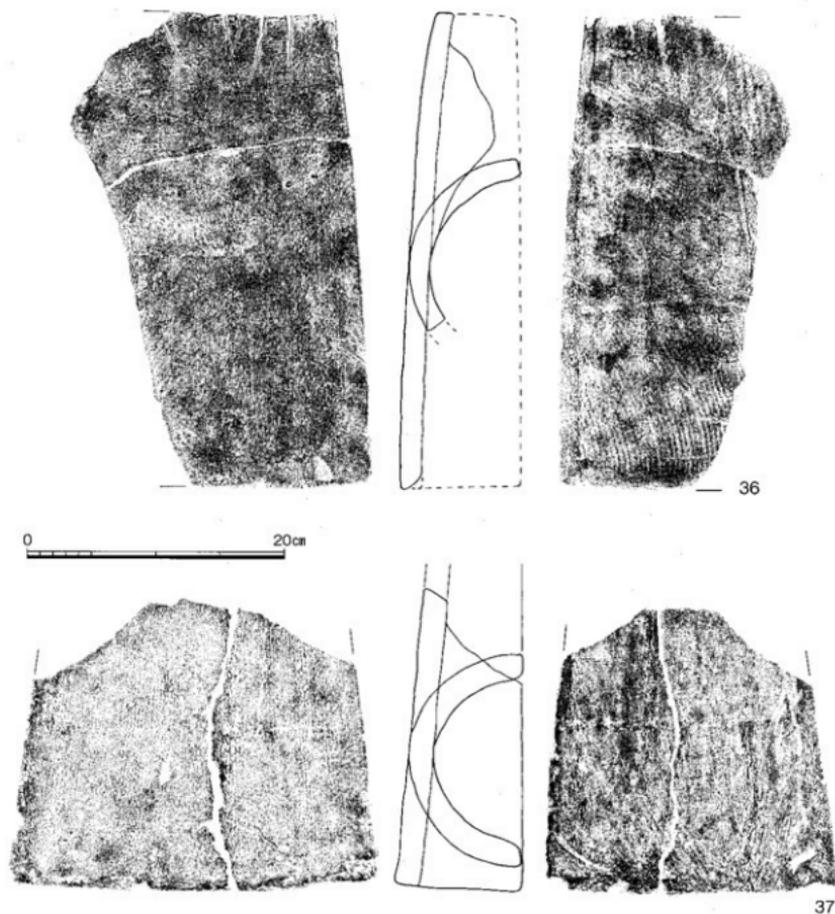
36・37は建物Iから出土した。凸面に縄目叩きが施される丸瓦である。ナデ消しにより縄目の詳細は不明であるが、縄目の条は広端から狭端にかけて縦方向に通っているようである。凹面には布目圧痕、糸切り痕が残る。凹面測縁にはヘラケズリを施すが、凸面測縁には調整が行われない。36の全長37.2cm、37の広端幅17.8cmを計測する。色調は灰色～黄灰色を呈し、胎土には多くの砂粒が含まれ、湿った手で触れると砂粒が付着するくらい焼成は軟質である。これらの要素は、平瓦Ⅲ型式と共通である。

(4) 平瓦 (第37図～第46図)

平瓦は、凸面の調整痕から、I型式(叩き目圧痕が残らないもの)、II型式(格子目叩き)、III型式(平行叩き)、IV型式(縄目叩き)に大別される。便宜上、II型式をII A型式(正方形格子・長方形格子)、II B型式(斜格子)に細別する。

I型式 (38・39)

38・39は建物Iから出土した。凸面に叩き目圧痕が残らない平瓦である。凹面には桢板痕、布

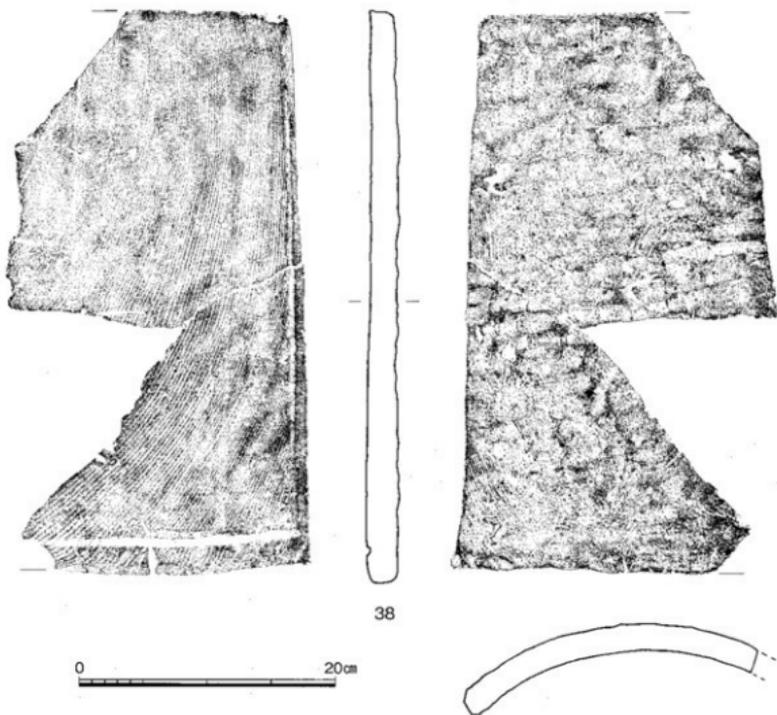


第36図 丸瓦実測図4 (S=1/4)

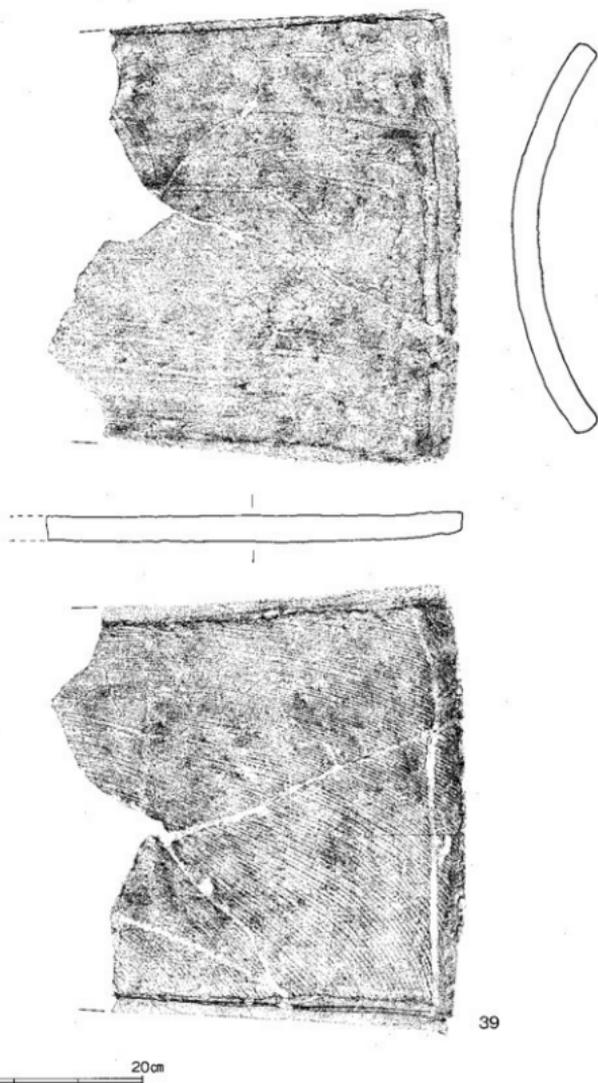
目圧痕が浅く残るが、それよりも斜め方向の糸切り痕の方が深くよく目立つ。凸面には全体的に指頭、手掌の痕が残り、部分的に糸切り痕が残る。粘土板を桶に密着するよう押さえつけた痕跡と思われる。38の凸面には指頭、手掌の痕がそのまま残り、軒平瓦Ⅱ型式(23)や軒平瓦Ⅲ型式(28)の顎が剥脱した部分と似たような状態である。分割後の調整は、広端面をへら削りし、凸面広端縁、凹面広端縁、凸面端縁、凹面端縁を面取りする。全長44.3cmを計測する。39の凸面には縦方向のナデ調整が施され、広端付近に横方向の指ナデを加える。広端面、広端縁は未調整で、凸面端縁、凹面端縁を軽く面取りする。広端幅32.5cmを計測する。Ⅰ型式は、桶巻作りながら、叩き板による叩きしめを省略したものと考えられる。桶への押さえつけが十分でなく、凹面・凸面ともに糸切り痕が残るものもある。全体的に灰色を呈し、焼成は良好である。

Ⅱ A 型式(40~46)

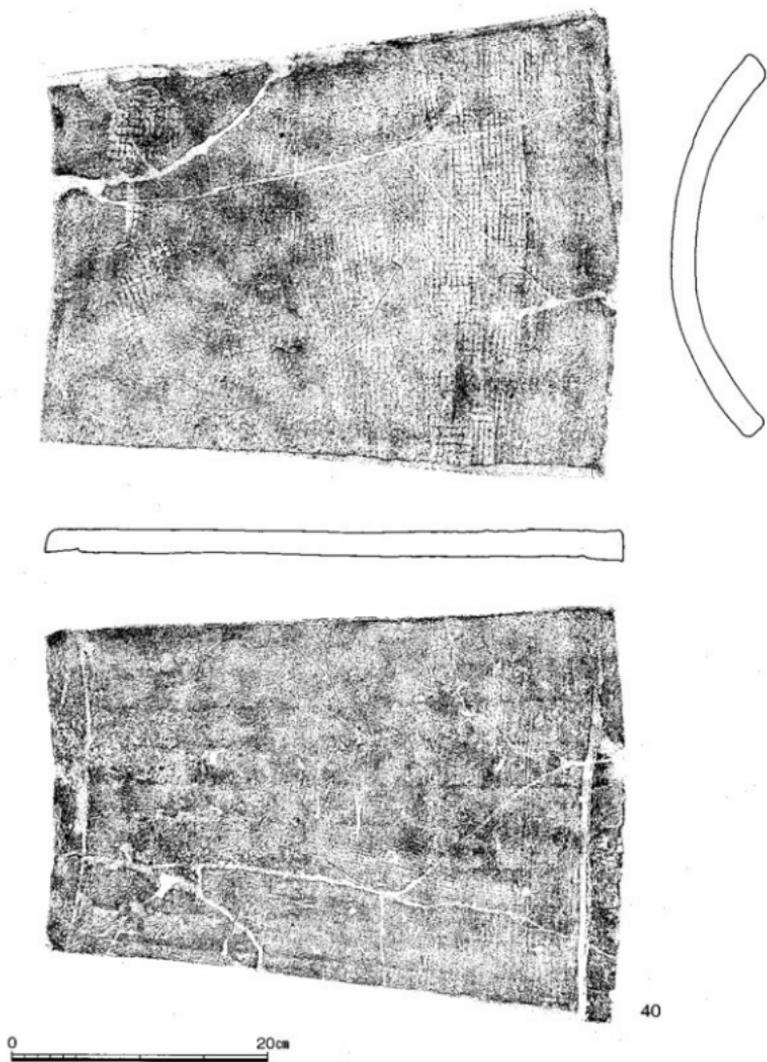
40・44・46は建物Ⅰから、他は建物Ⅱから出土した。凸面に正方形・長方形の格子目叩きをもつ平瓦である。この型式に含まれるものは個体数が多く、詳細な観察を行えばより多くの叩き痕を



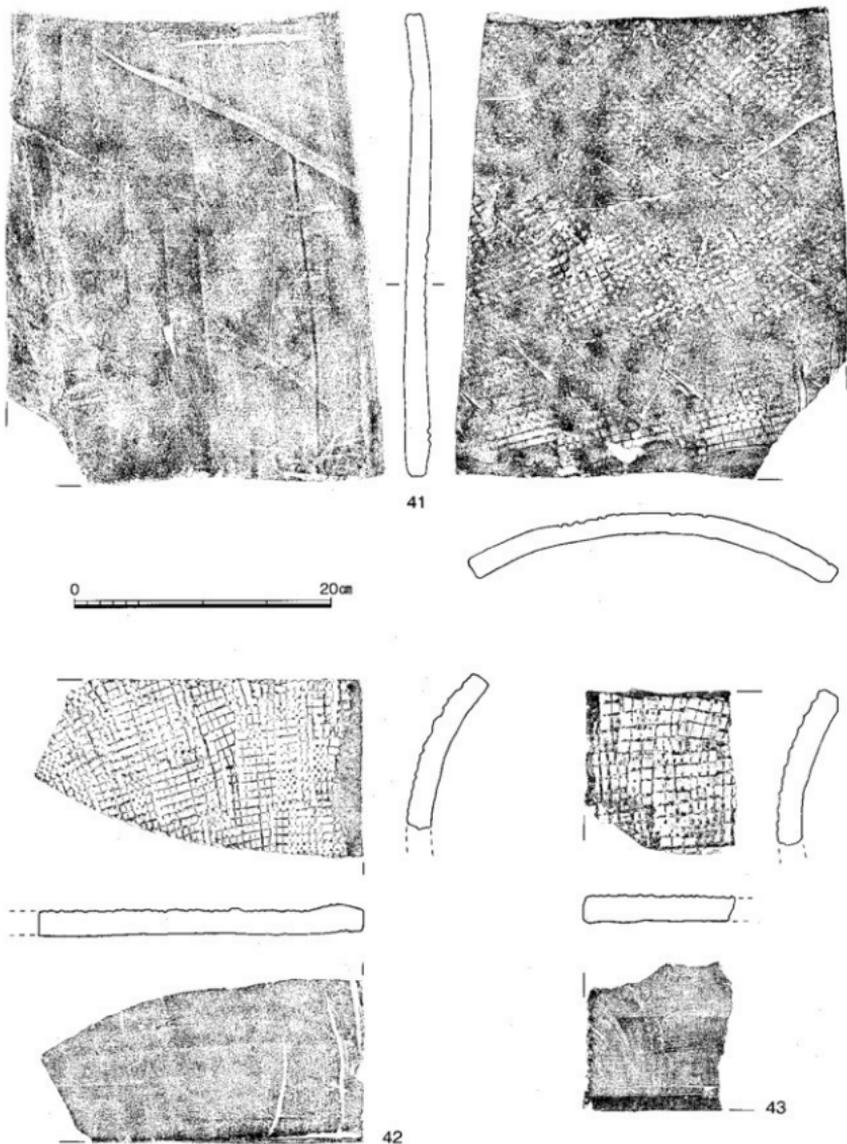
第37図 平瓦実測図1 (S=1/4)



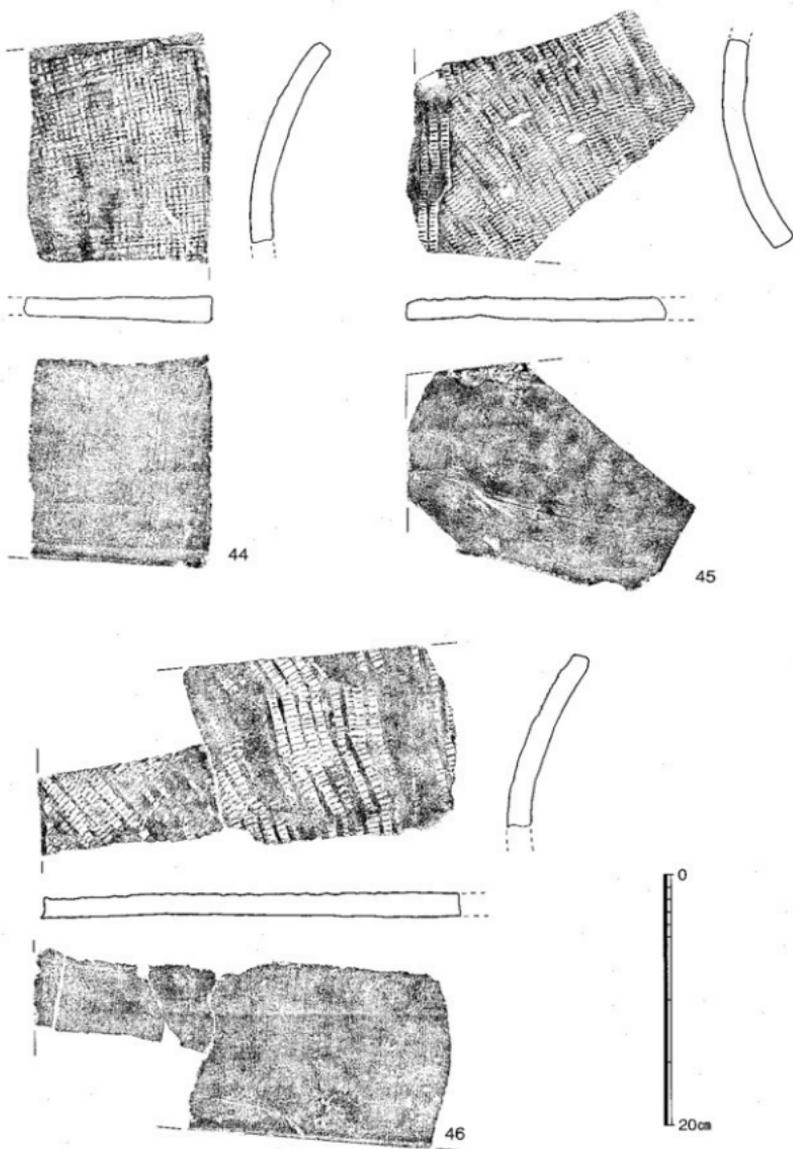
第38図 平瓦実測図2 (S=1/4)



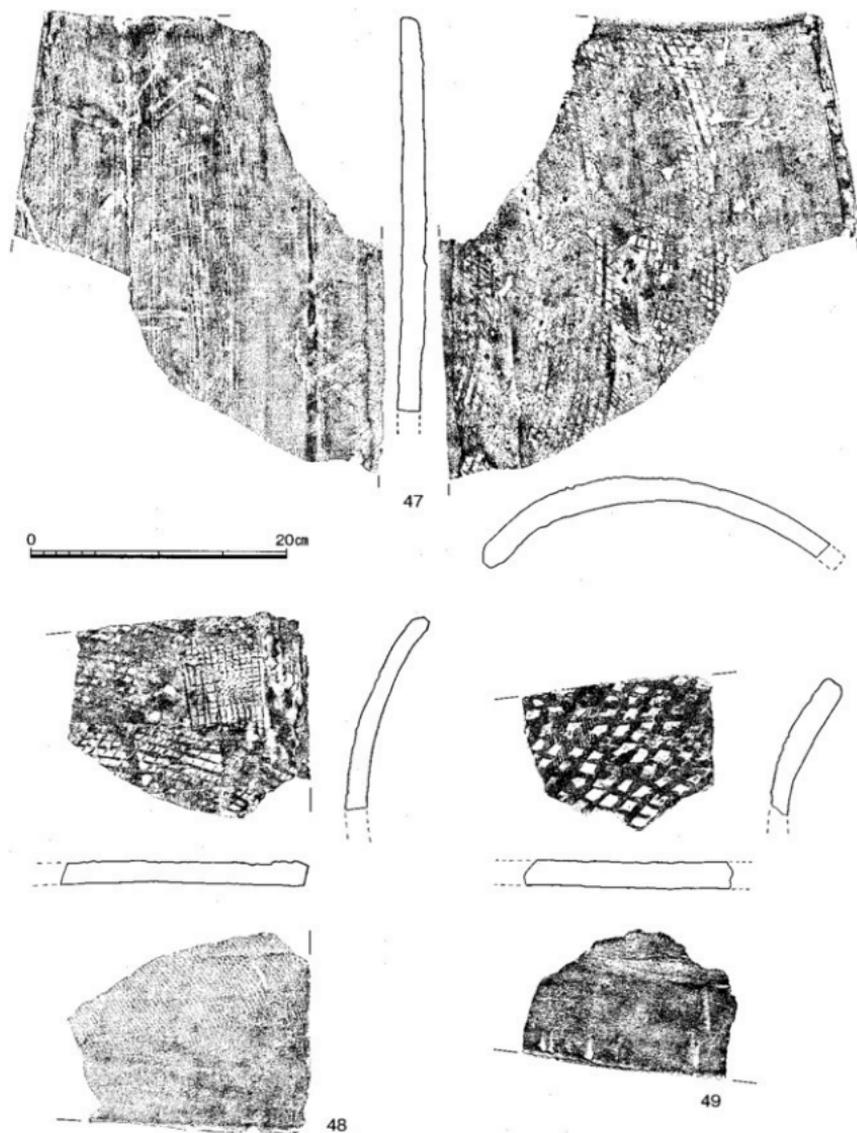
第39図 平瓦実測図3 (S=1/4)



第40図 平瓦実測図4 (S=1/4)



第41図 平瓦実測図5 (S=1/4)



第42図 平瓦実測図6 (S=1/4)

見い出せるであろう。今回は7種類を掲載する。

40は、 6×4 mm程度の長方形格子の叩き目を施す。凸面には叩き後に回転ナデ調整が行われ、大部分で叩き目が消されている。凹面には杵板痕、布目圧痕が残る。凹面測縁、凸面測縁を部分的に軽く面取りする。全長44.5cm、広端幅33.0cm、狭端幅24.6cmを計測する。41は、 8×6 mm程度の長方形格子の叩き目を施す。凸面には叩き後に部分的なナデ調整を施す。凹面には杵板痕、布目圧痕



第43図 平瓦実測図7 (S=1/4)

が残る。分割後の調整については、広端面、凸面広端縁にヘラケズリを施す。また、広端を下にして凹面から見た場合、左側では側縁を凹面、凸面から軽く面取りするが、右側面には破面を削り取った痕だけが残り、側縁の調整は行われていない。全長36.0cm、狭端幅25.5cmを計測する。42は、一辺5mmくらいの正方形格子の叩き目が深く、隙間なく残る。凸面には叩き後の調整は行われていない。凹面には桤板痕、布目圧痕が残る。凹面測縁、凸面測縁に軽く面取りを施す。43は、一辺8～10mmの正方形格子の叩き目が残る。凸面には叩き後の調整は行われていない。凹面には桤板痕、布目圧痕が残る。凹面測縁、凸面測縁に面取りを施す。44は、4×3mm程度の長方形格子の叩き目が残る。凸面には叩き後に縦方向の軽いナデ調整が行われている。凹面には桤板痕、布目圧痕が残る。凹面測縁、凸面測縁に軽く面取りを施す。45は、9×3mm程度の細長い長方形格子の叩き目を施す。格子の線は短辺方向が太く、長辺方向は細い。凸面には叩き後の調整は行われていない。凹面には桤板痕、布目圧痕、糸切り痕が残る。また、赤色に染まる部分が見られ、朱が付着したものである。狭端面にヘラケズリを施す。側面は分割断面からなる。46の叩き目は、10×4mm程度の細長い長方形格子で、45の叩き目を1.2～1.3倍くらいに拡大したような感じである。凹面には桤板痕、布目圧痕、糸切り痕が残る。分割後、凹面側縁に軽く面取りを施す。狭端面には指ナデしたような凹みが残る。

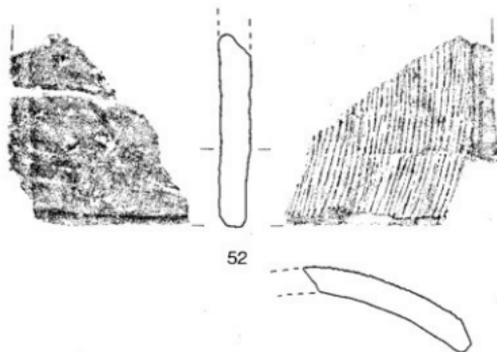
II B 型式 (47～49)

47～49は建物Iから出土した。凸面に斜格子の叩き目をもつ平瓦である。47の叩き目は、6×4mm程度の平行四辺形で、格子の線は短辺方向が太く、長辺方向は細い。部分的に縦方向のナデで消される。凹面には桤板痕、布目圧痕、糸切り痕が残る。桤板から粘土がはみ出たような隆帯が生じており、この部分が粘土板合わせ目となっている。分割後、右側では側縁を凹面、凸面から丁寧に面取りするが、左側面では破面を軽く削る程度である。凸面狭端縁から狭端面にはナデ仕上げが施される。48の叩き目は、47と同じ斜格子が主となり、5×3mmくらいの長方形の格子目もみられる。凹面には桤板痕、布目圧痕、糸切り痕が残る。分割後は凸面側縁に面取りを施す。49の叩き目は、10×6mm程度の平行四辺形で、格子の線はかなり太い。叩き後は軽く回転ナデ調整される。凹面には布目圧痕が残るが、ナデ消される部分がある。分割後は未調整である。

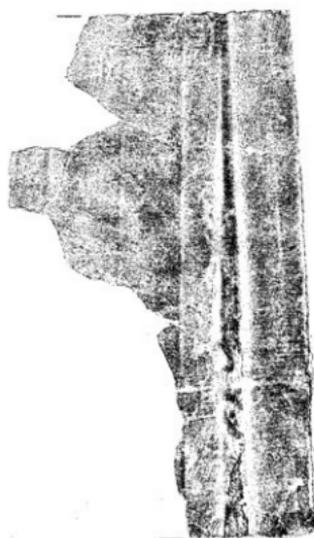
III 型式 (50～52)

50～52は建物Iから出土した。凸面に平行条線の叩き目をもつ平瓦である。叩き板は少なくとも次の3種類が見いだせる。50の叩き板の痕跡は幅4cm程度、長さ8cm以上の長方形で、長辺方向即ち木目方向に直交して平行条線が刻まれている。平行条線の間隔は約4mmである。凹面には桤板痕、布目圧痕が残る。広端面をナデ調整し、凸面広端縁、凹面広端縁、広端付近の凸面側縁に面取りを施す。狭端側は顕著な調整が見られない。色調は、表面が灰黄色、内部が暗灰色を呈する。焼成は軟質で、湿った手で触れると砂粒が付着する。51の叩き板には、木目に対し右上がり45°くらいの角度で幅約4mmの平行条線が刻まれている。広端部分の幅4cmくらいを残して凸面全体に叩き調整が施され、狭端部分の幅3～4cmの範囲で叩きの後回転ナデが施される。凹面には桤板痕、布目圧痕が残る。桤板から粘土がはみ出たような隆帯が生じており、この部分が粘土板合わせ目と

なっている。この隆帯は47の凹面と同様で、表面には布目圧痕が残り、広端側が幅広く高く、狭端側では狭く低くなっている。広端側の一部を少し削り落としている。分割後の調整は、広端面をナデ調整し、凸面広端縁と凸面側縁に面取りを施す。52の叩き板には、木目に対し少し左上がりの角度で平行条線が刻まれている。平行条線は、厳密には直線ではなく、ゆるいカーブを描く。間隔は不ぞろいながら4mm程度である。凹面には枠板痕、布目圧痕が残る。広端面をナデ調整し、凸面



52

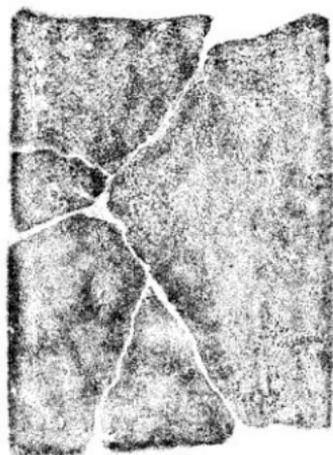


51

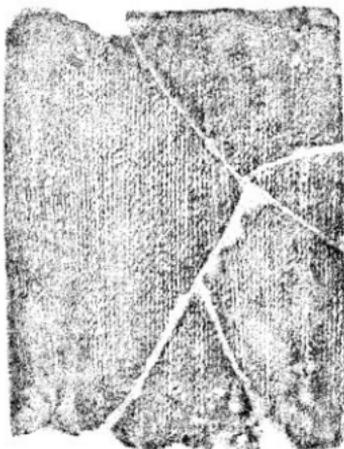
0 20cm



第44図 平瓦実測図8 (S=1/4)



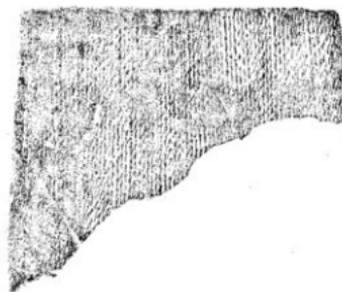
53



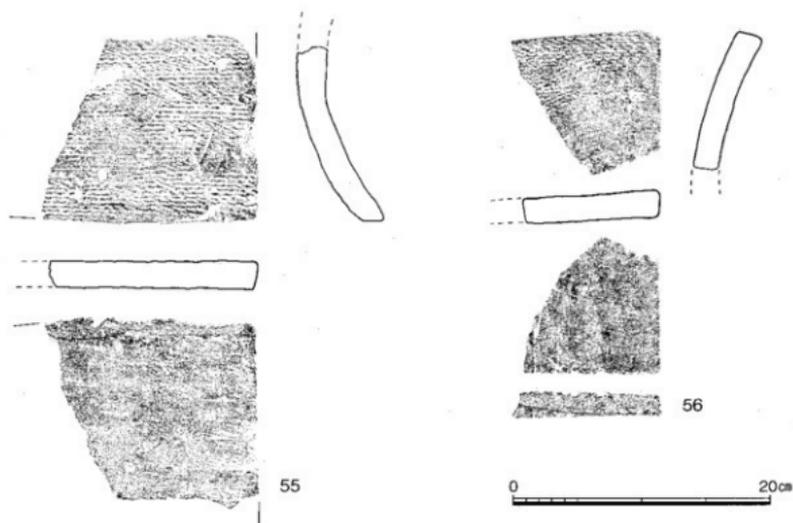
0 20cm



54



第45図 平瓦実測図9 (S=1/4)



第46図 平瓦実測図10(S=1/4)

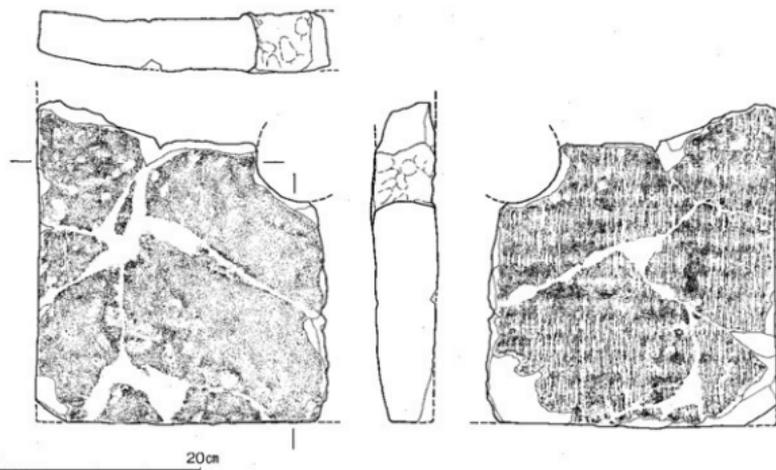
広端縁、凹面広端縁と凸面側縁に面取りを施す。

IV型式(53~56)

53は建物Ⅰから、他は建物Ⅱから出土した。凸面に縄目叩きを施す平瓦である。縄目の条は広端から狭端まで縦に通り、左捻りの縄が使用されている。凸面の湾曲が緩やかなもの(53)と比較的強いもの(54・55)とがある。凹面には、他の型式と比べて目の粗い布目圧痕が残る。56の側面には、凹面から連続する布目圧痕が残る。表面が摩滅している個体が多く、細部の観察は困難であるが、側面は一面からなり、凸面側縁が鈍角になるものが大半である。凹面側縁に幅広くヘラ削りを施すものもある。53の全長34.0cm、広端幅25.2cm、狭端幅24.6cmを計測する。胎土には砂粒が多く含まれ、湿った手で触れると砂粒が付着するほど焼成が軟質なものが多い。色調は薄い灰色を主に、褐灰色、橙色などがある。

(5) 埴(第47図)

トレンチ1の東半の溝埋土から出土した埴と思われる破片である。現存は約4分の1で、残存している辺は直線を呈し、隅が直角となっている。隅の対角には、直径約10cmに復元できる円形の孔がけられており、孔を中心に復元すると1辺が56cmのほぼ正方形となる。厚さは、3.8~6.3cmで、孔のある中央で厚く、周辺部に行くにしたがってやや薄くなっている。表面は摩滅が著しいが、篋状の工具で削って仕上げられており、部分的に指頭圧痕が残されている。孔は焼成前にけられており、内面には指頭圧痕が残されている。また側面は、横方向の篋削りによって調整されている。裏面には畳表状の圧痕が残されている。畳表状の圧痕は幅2cmほどの織り目で、1cmあたり5~6本



第47図 磚実測図 (S=1/5)

の蘭草状の繊維がみられ、現在の畳表と同様の諸口織の形状を呈している。また畳表状の圧痕のある面には、この図で孔の左端と中央あたりにむかって縦方向に2条と、同じく孔の下端に向かって横方向の沈線が1条刻まれている。これらの沈線は、定規を当てて筧先で引いたような直線で畳表状の痕跡の後に施されており、何らかの目印のようなものかも知れない。出土位置からみて建物Ⅰに關係する磚と考えられ、敷き磚や腰壁等の装飾、あるいは須弥壇等で用いられた可能性も考えられるが、全体に大形で分厚く、中央に穿たれている孔が大きいなど通常の磚とは異なる特徴があり、特殊な用途を考えるべきかもしれない。

(6) 鷗尾 (第48図1)

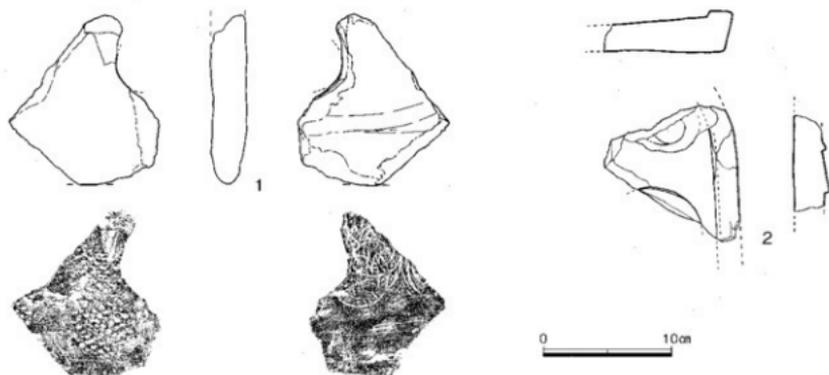
鷗尾の一部と思われる小片がトレンチ17から1点出土した。瓦を差し込むための削り貫きと考えられる孔がある。表は細かい斜格子叩き、裏は同心円文が残り、縁端部は表裏ともヘラ削りが施される。最も厚い部分で3cmを測る。色調は灰色で、焼成は良好である。

(7) 鬼瓦 (第48図2)

トレンチ4から出土した。小片のためはっきりしないが、鬼瓦の一部と思われる。文様はおそらく鬼面文で、幅約2cm、高さ5mmくらいの外縁の中に巻毛を想像させる凸線状の渦巻きなどが彫刻されている。裏面と側縁にはヘラ削りが施される。最も厚い部分で3.2cmを測る。色調は灰色で、焼成は良好である。

2. 土器

各トレンチから瓦にまざってかなり多くの土器片が出土している。その時期は弥生時代から中世までの各時代にわたっている。北側の寺域を区画すると推定されている溝からは、寺の存続時期と重なる長頸壺が3点出土している。また、中世の土師質高台付碗の破片も多く検出されている。細



第48図 鷗尾・鬼瓦実測図 (S=1/4)

片のため図化していないが黒色土器碗なども認められる。以下にその主なものを概説する。

(1) 弥生土器・土師器 (第49図)

1は弥生時代後期の台付鉢で、台部は失われている。口縁部を「く」の字に屈曲し外側に拡張している。器表面の風化が著しく、調整は不明である。

2は古墳時代前半期の製塩土器である。かなり小型化した脚部のみ破片で、器面には指圧痕が残っている。3は古墳時代の土師器甕である。口頸部は上方に直立気味でやや厚手の作りである。体部内面は粗いヘラケズリである。

4は「畿内産土師器」とも呼ばれる坏である。胎土は精良で、内面に一段放射状ミガキが施されている。小破片であり、摩耗も著しく暗文の単位は不明だが、上から下へ反時計回りにミガキを施している。

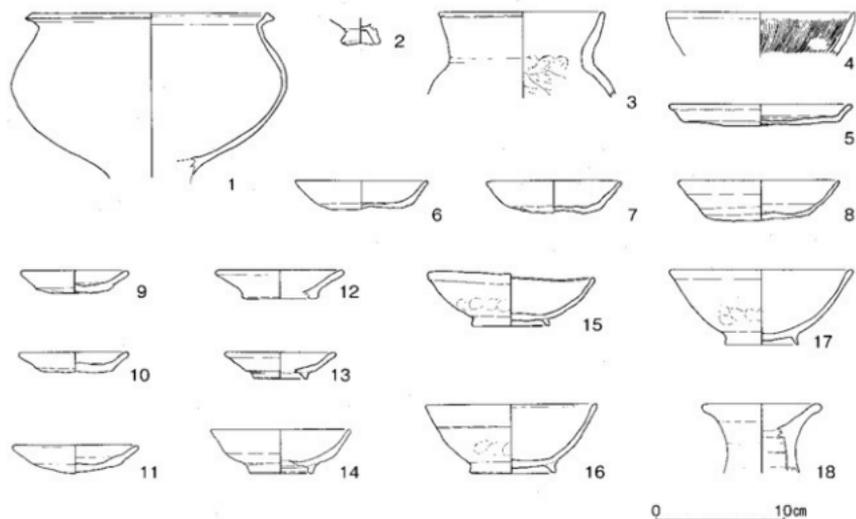
5は口径14.3cm程度の土師器皿である。長頸壺などともに北鶴溝から出土している。底部にはヘラキリ後に加えられた指圧痕が残る。

6～8は土師器坏である。6・7は口径が10cm程度、器2.5cm前後で、底部外面の調整が指オサエとナデである。総社市窪木遺跡山陰川調査区からの出土例に近く、10世紀後葉のものと考えられる¹⁹⁾。また、7は建物跡Ⅰの南側の溝2から埴と共伴して出土している。8は口径12.7cmと大きく、内面に炭化物の付着した痕跡が認められる。土師器坏の口径が時代を下るにつれて小型化するという傾向から見ると、6・7よりややさかのぼるものと推定される。

(2) 土師質土器 (第49図)

9～12は土師質小皿である。9・10は直径8.5cm前後で、底部はヘラキリ後ナデ調整を施している。11は直径10.0cm前後とやや大きく、底部はやはりヘラキリ後ナデ調整を施している。12は直径10.0cm前後で、底部は高台状の平底になっている。

13は土師質高台付皿である。直径8.7cmで、高台は外側下方にのび、端面を持つ。



第49図 土器実測図1 (S=1/4)

14～17は土師質高台付碗である。14がやや小型で口径10.9cm、器高3.4cm、15～17は口径13～14cm前後で、器高は15が低く4.4cm、16・17は6cm前後である。12世紀から13世紀頃のものと考えられる。この土師質高台付碗の破片は各トレンチから多く出土している。

18は脚付坏である。脚先端が粘土紐の接合部を境に失われている。脚内面は粗いヘラケズリであるが、その他の部分はナデで仕上げられている。

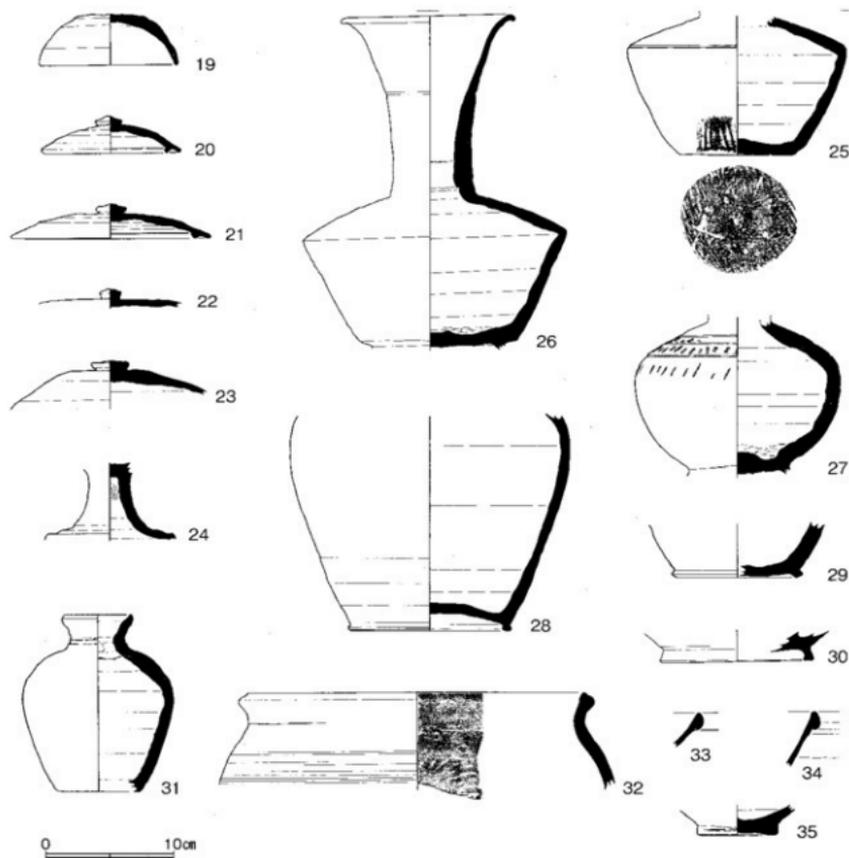
(3) 須恵器 (第50図)

19は坏Hの蓋で、径が10cm程度と小さくTK217に属すると考えられる。天井部外面にヘラケズリは施されていない。20は坏Gの蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリで調整し、つまみは算盤玉状を呈する。かえりは口縁部より下方にわずかに突出する。21は径15.5cmと大きめの坏蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリで調整し、つまみは扁平で中央部がわずかに盛り上がる。かえりは口縁部より下方にわずかに突出する。20が飛鳥Ⅰ～Ⅱ期、21が飛鳥Ⅲ期と考えられる。

22・23はつまみを持つ蓋であるが、縁部が失われている。いずれも天井部外面に回転ヘラケズリで調整を行っている。22のつまみは小振りで円柱状を呈する。23のつまみは扁平で中央部が盛り上がっている。焼きひずみが大いので確定はできないが、有蓋高坏の蓋の可能性もある。

24は短脚化した高坏の脚部である。内面にシボリ痕を残す。19とともにトレンチ7の9層から出土しており、寺院建立直前の遺物と考えられる。

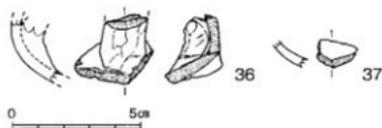
25～27は長頸壺である。いずれも北側溝から出土している。25は頸部が失われているが、形状から長頸壺と考えられる。体部の肩が張り明瞭な稜をなし、稜の直上に1条の沈線をめぐらせる。高台はなく、平底の底部から体側面下部を平行叩き具で調整している。26の口頸部は大きく開き、



第50図 土器実測図2 (S=1/4)

中程に1条の沈線をめぐらせる。口縁部先端はやや下がり気味である。体部は肩が張り、明瞭な稜をなす。高台は下外にのびるが、端部を失っており、形状は不明である。底部内面に突縮痕を残す。7世紀末から8世紀前半に属すると推定される。27も頸部が失われているが、やはり形状から長頸壺と考えられる。体部は肩があまり張らない古式の形状で、上半部に3条の沈線をめぐらせ、その間に刺突文を施している。底部内面に突縮痕を残す。

28は壺の下半部と考えられる。高台は摩耗が認められるが、外側下方にのび、端面を内側に向ける。29・30は壺の底部の破片である。29の高台は外側下方にのび、端面を外側に向ける。30の高台は外側下方にのび、端面内側を内側にやや拡張し、端面自体は真下に向く。



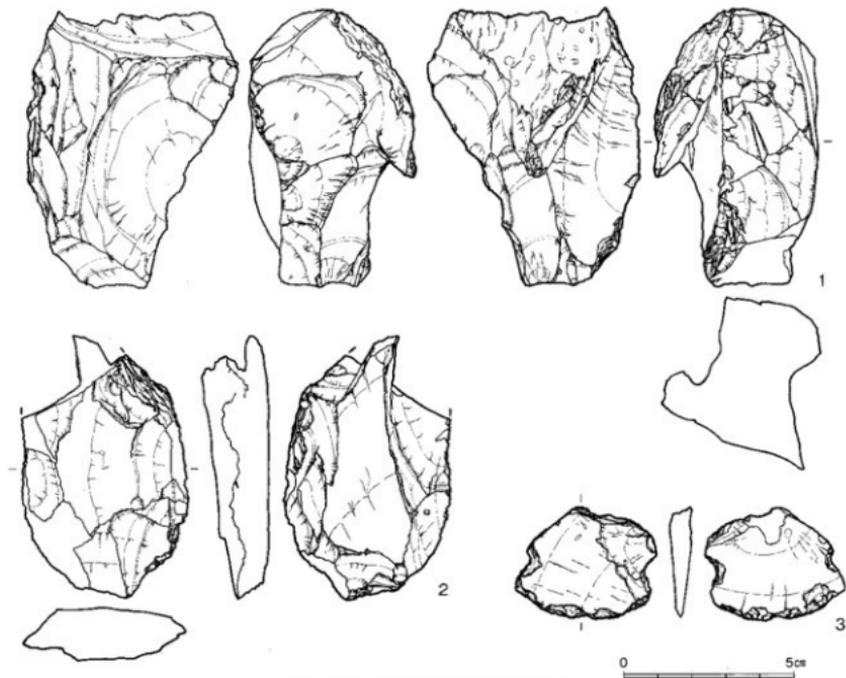
第51図 土器実測図3 (S=1/2)

31は肩の部分に注口のついていた痕跡があり、水差し的一种ではないかと推定される。非常に焼きのあまいもので、作りもややおどろびである。轆轤成形の口縁部と体部は別作りで、体部外面調整は縦方向のナデである。注口は折れてしまっており、また、径も不明なので、図では復元できなかった。同形状と考えられるものももう一個体確認できるが、これも注口基部の破片でしかない。

32は甕の口縁部の破片である。トレンチ1の溝3から出土している。口縁部が軽く外側に屈曲し、体部内面に同心円あて具痕、外面はカキメ調整が施されている。形状から体部の2方向に上向きの把手を持つ甕の可能性が高い。

(4) 白磁・緑釉陶器 (第50・51図)

33～35は白磁である。小破片のため詳細は不明だが、いずれも碗の破片と考えられる。35・36は肥厚した口縁部である。35は高台を削りだして成形した底部の破片である。



第52図 石器実測図 (S=2/3)

36・37はいずれも小破片であり、全体形は不明であるが緑釉陶器である。36は把手付瓶の把手基部の破片である。轆轤成形の頭部の破片で、粘土紐で作り出した把手を指で押さえ付けている。胎土は精良で淡黄色(2.5Y8/3)を呈し、内外面に薄緑色の釉が残存している。37もおそらく頭部から肩にかけての破片であろう。

3. その他の遺物

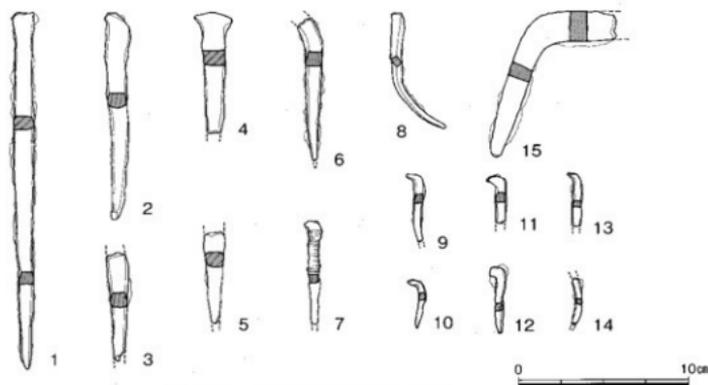
(1) 石器(第52図)

わずかではあるが、石器も出土している。1はトレンチ7から出土した不定形剥片石核である。質の良い安山岩製で、剥離の角度も緩やかなことから旧石器時代のものと考えられる。稜面が残り、長さ4.84cm、幅8.38cm、厚さ4.32cm、重さ200.8gである。2はトレンチ1から出土した安山岩製不定形剥片石核である。剥片を素材としており、損傷が著しいが求心状に不定形の剥片を剥離しているようである。縄文～弥生時代に属するものと考えられる。長さ4.92cm、幅7.95cm、厚さ1.94cm、重さ74.1gである。3はトレンチ2から出土した弥生時代のミニチュア石包丁である。非常に小型の製品であるが、両端にきちんと挟りが入っている。安山岩製で長さ3.36cm、幅3.92cm、厚さ0.67cm、重さ8.9gである。他にも、今回は紙面の関係で図化しなかったが、トレンチ1から弥生時代の盤状剥片素材が出土している。長さ17.99cm、幅14.25cm、厚さ3.85cm、重さ1340gである。

(2) 鉄製品(第53図)

西方に位置する建物Iを中心に鉄製品が出土している。第52図に示したものは、いずれも建物Iに伴う瓦溜りと基壇上面、雨落溝等から出土したものである。ほとんどが鉄釘であるが、鋸と思われる破片も含まれている。

鉄釘は、いずれも鍛造の角釘で、様々な大きさのものがみられるが、大まかに大中小の3種に分けられる。1は、長さ21.4cmのほぼ完形の大形のもので、頭部は先端がわずかに広がってT字形に近い形状を呈している。断面は長方形で、上部で1.2×0.8cmを測り、先端向かって徐々に細くなっ



第53図 鉄製品実測図(S=1/3)

ている。2～8は中形のもので、破片が多いが、7～13cm程度の長さになるものと思われる。頭部は、L字形のもの(2・7・8)とT字形のもの(4)とがあり、断面は長方形のものがほとんどである。なお、7には釘に対して直角方向に木質の痕跡が残されている。9～14は、長さ3～5cm程度の小形のものである。頭部はいずれもL形を呈しており、断面は0.5cm前後の細いものである。

15は、建物Ⅰの南東の包含層から出土したもので、鏃と思われる破片である。1.8×1cmの長方形の断面をもつ鉄棒を開きぎみにL字型に曲げており、先端にむかって細くなっている。破片であるため大きさは不明であるが、針部の長さが7cm以上あり、全体に大振りなつくりのものと思われる。

註

- (1) 広島大学大学院文学研究科教授 古瀬清秀氏、九州テクノリサーチ技術顧問 大澤正己氏のご教授による。
- (2) 亀田修一「顎面施文軒平瓦に関する覚書」『近藤義郎古稀記念考古文集』1995
- (3) 平井泰男「古代の土器について」『窪木遺跡Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 124 岡山県教育委員会 1998

第4章 発掘調査の成果

1. 寺域について

寺域に関連する可能性のある遺構として、推定中軸線の北約40mで東西に延びる北側溝が確認された。中世以降の排水溝とは形状が異なり、断面形が特徴的なV字状で、しっかりとした深さがあることより北側溝が寺域を画する遺構の候補としてあげられる。この溝のすぐ北側は、中世の溝などが切り込んでいるため古代の状況は定かではないが、溝の北10mで地形の上がり方が確認され、寺域はそれより北へは広がらないと思われる。北側溝は寺域の北西角で南に向かってカーブを描くように曲がるが、建物Ⅰの北側までは溝は続いておらず、西側の寺域を画する遺構は確認できなかった。北側溝の位置から推定中軸線を中心に南に折り返すと丘陵地と耕作地の境目あたりになり、この付近を南限とするなら、南北80m程度となる。東限については、今回の調査区外であるが、市道のすぐ東の「寺門」という小字名に類すると、東西は200m前後の規模となる。そこまで長大とせず、寺域を谷間の中で納めたとしても100mかそれを少し越える程度と予想される。

2. 伽藍配置について

確認された建物跡としては、建物Ⅰ、建物Ⅱの2棟がある。建物Ⅰは桁行7間、梁間4間の建物で、従来の説のとおり講堂と考えられる。建物Ⅱについては十分把握できず、不完全な形で報告せざるを得ないが、建物Ⅰと同じく東面する建物を考えるのが自然ではなかろうか。基壇の規模から桁行5間、梁間4間くらいの建物を想定しておきたい。そして、講堂よりも入念な工法である版築の基壇を有し、心礎、四天柱の礎石も認められないことにより、建物Ⅱを金堂と考えるのが妥当と思われる。そうすると講堂と金堂が東西に並ぶことになり、その延長上に他の堂塔も並ぶ可能性が高くなる。また、北東部に設定したトレンチ16・17で掘立柱列が検出され、すぐ近くで多量の瓦が出土したとの情報と合わせて瓦葺きの掘立柱建物が存在する可能性も出てきた。南東部に設定したトレンチ19では掘立柱1基とそれに列なるように小規模のピット3基が確認され、掘立柱を伴う施設がE80mあたりに存在することが明らかになった。

3. 寺院の変遷について

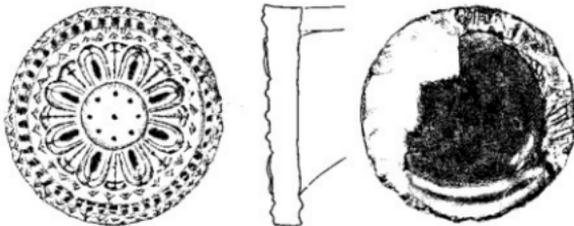
日畑廃寺がどのような経過を経て堂塔伽藍を整えていったかを明らかにすることは大きな課題である。まずは建物Ⅰと建物Ⅱの先後関係を把握することから始めなければならないが、今回の調査では、双方の建物から各型式の軒瓦が出土しており、詳細な瓦の整理・分析なくして建物の造営順序を推測するのは困難である。しかし、概略的な寺院の変遷過程を描くことは現時点でも可能である。最古の軒丸瓦は、素弁蓮華文（Ⅰ型式）で、白鳳時代創建とされてきたこれまでの説は不動である。その後、重弁蓮華文のⅡ型式、Ⅲ型式が用いられる段階で本格的に伽藍が整えられていくこ

まで降ると考えられる。これに伴う軒平瓦は不明であるが、同じく縄目叩きが施される丸瓦Ⅱ型式、平瓦Ⅳ型式が共存すると思われる。これらの瓦の出土は、白鳳期の創建後、建物の経年劣化に伴い修復が行われたことを示す。白鳳時代に創建された寺院の多くは、個々ゆかりの瓦当文が使用された後、次の段階で齊一的に平城宮式瓦当文の使用へと移行している。日畑麿寺の白鳳期の瓦を生産した二子御堂奥窯跡¹¹⁾では平城宮式の瓦範を用いて引き続き生産しているが、この瓦は日畑麿寺には供給されていない。傷みの激しい瓦範をわざわざ使用したのである。このことは、中央政権との関係を深めていった周辺の諸氏寺とは別の路線を歩んだことを示すのであろう。

建物Ⅰの南東における炉壁片、焼土の検出をどう解釈するかは、寺院の変遷を考えるうえでも重要と思われる。炉の詳細については今後の調査を待ちたいが、炉壁片の集積、焼土の堆積は炉跡そのものではなく、近くから運び込まれたものと理解している。出土土器から10世紀後葉の時期で、当時まで建物Ⅰが存続し、このような位置に工房から出た廃棄物を投棄する理由があるとすれば、瓦積暗渠等の排水施設の再整備や排水で傷んだ場所の整地のためであろう。そうすると、この時期に施設の修改築が行われたことになる。そして、この炉は銅製品の生産に関わるものと推定され、銅製の器物を新たに備えるようなことも含めた整備事業だったかもしれない。その後、出土遺物が少ない11世紀頃には衰退期を迎え、間もなく残っていた建物が倒壊するに至ったと考える。12～13世紀には寺域の広い範囲で活動の痕跡が明瞭に残っており、寺院跡を踏襲して草堂が営まれた可能性も否定できないが、中世の遺跡については今後の課題としたい。

4. 日畑麿寺の軒丸瓦について

軒丸瓦は4型式が出土した。Ⅰ型式は素弁蓮華文で、瓦当裏面に布目圧痕が残ることが明らかになった。この布目圧痕は一本造り技法によるものではなく、いわゆる布目押圧技法によるものとされ、これまでに藤原宮式や備後中谷麿寺の軒丸瓦で確認されている。中谷麿寺例は藤原宮式に先行する可能性があり、布目押圧技法の系譜が朝鮮半島にもとめられることから、一地方寺院と朝鮮半島との直接的な関係を示す可能性が指摘されている¹²⁾が、日畑麿寺例もその製作技術の系譜をめぐって今後注目されるであろう。Ⅱ型式とⅣ型式についてはこれまで日畑麿寺の遺物として掲載されたことがなかったと思う。Ⅳ型式は先に述べたとおり、Ⅰ型式の範型を用いた可能性が高く、既存の瓦から範型をおこして製作したものではない。Ⅰ型式の製作終了後、Ⅳ型式の製作にかかるまで範型の使用があったか否かも今後明らかにする必要があるが、この瓦範の所有者は日畑麿寺の造営主体者で、当該期間に自らが保



第55図 日畑麿寺採集軒丸瓦(S-1/4)

管していたことは確かである。次に述べるⅡ型式の瓦范のように他の寺院に伝播するような性格のものではなかった。寺院独自で所有保管される瓦范とそうでないものが存在することを示す例である。

軒九瓦Ⅱ型式は「備中式」⁽⁹⁾と呼ばれ、瓦当面に見いだされる范傷から、二子御堂奥窯跡第4類、秦原廃寺第3類と同范関係にある⁽¹⁰⁾。また、英賀廃寺第1類の瓦当文様も同じ范型を作り改めたもので、「備中式」の中で最も古く位置付けられるこの瓦の文様意匠が製作技法とともに備中東部の寺院に伝わったことが指摘されている⁽¹¹⁾。この瓦当文様の導入については寺院造営の先駆者である秦原廃寺が主体となった可能性が高く、秦原廃寺が関係諸寺院への文様意匠・造瓦技術の伝播を主導したと考えられている⁽¹²⁾。日畑廃寺の当該瓦は二子御堂奥窯跡で生産されたもので、生産地と消費地の関係を示す一例にあげられるが、秦原廃寺のものは同一産地かどうかはわからない。しかし、創建期以来、日畑廃寺の白鳳期の瓦は全て二子御堂奥窯跡産であるので、地理的にみてもここで生産された軒九瓦は日畑廃寺への供給が主であるとみなされる。おそらく、秦原廃寺の造営氏族の支援⁽¹³⁾のもと、瓦工人組織が二子御堂奥窯跡において再編成され、日畑廃寺で本格的な寺院造営がはじまる（軒九瓦Ⅱ型式）。そして、軒九瓦Ⅲ型式の段階で日畑廃寺の伽藍が完成する。日畑廃寺造営の一部門を担った瓦工人⁽¹⁴⁾は、引き続いて秦原廃寺の造営氏族の要請に基づき、文様意匠・造瓦技術の伝播を実行したと考えることはできないであろうか。初現の「備中式」瓦范を共有する寺院間にそのような密接な連携を想定したい。

註

- (1) 「二子御堂奥古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第二集』岡山県教育委員会 1974
なお、同窯跡の出土資料の中に日畑廃寺軒九瓦Ⅳ型式が含まれているかどうかは未確認であり、今後資料調査が必要である。
- (2) 亀田修一「瀬戸内海沿岸地域の古代寺院と瓦」『古代王権と交流 6 瀬戸内海地域における交流の展開』名著出版 1996
亀田修一「韓半島南部地域の瓦当裏面布目軒九瓦」『碩碩尹容銀教授停年退任記念論叢』1996
- (3) 伊藤晃「備中式瓦について」『古代第 97 号』早稲田大学考古学会 1994
- (4) 「秦原廃寺」『総社市史考古資料編』総社市史編さん委員会 1987
- (5) 妹尾周三「造瓦工人と寺院の造営氏族－備中式軒九瓦の検討－」『考古学研究第 49 巻第 1 号』2002
- (6) 註 5 に同じ
- (7) 葛原克人「韓半島秦氏の造寺活動について」『日本古代国家の展開 下巻』思文閣出版 1995
- (8) 日畑廃寺の軒平瓦については、額面施文をもつものもたないものが共存し、これに複数の瓦当施文工具が使用されており、軒九瓦と比べてやや複雑なあり方を示す。瓦製品全体の中での軒九瓦・軒平瓦等の位置付けを行ったうえで瓦工人像を描くことが必要である。

土器観察表

番号	器種	出土位置	流量 (cm)	形状上の特徴	継踵	胎土 (mm)	色 調	焼成	備 考	整理番号	
1	弥生土器	台付鉢	口径 182 底径 21.5 台径 - 器高 -	腹部内面はヘラケズリ その他はナデ	-	0.5~1	25V7/2 灰黄色 25YR7/6 褐色	良		28	
2	弥生土器	トレンチ1 溝3	口径 30 台径 - 器高 -	指圧痕	-	1	7.5YR7/6 褐色 7.5YR7/6 褐色	良		26	
3	甕	トレンチ15 9層	口径 130 底径 - 器高 -	腹部内面に指圧痕 体部内面はヘラケズリ その他はナデ	-	0.1~1	7.5YR6/4 に近い褐色 7.5YR6/6 褐色	良		23	
4	坏	トレンチ9 溝5	底径 148 器高 -	ナデ	-	0.5	2.5YR6/8 褐色 5YR7/6 褐色	良	胎文 (2mm単位)	34	
5	甕	トレンチ15 北側溝	底径 143 器高 17	底部外面はヘラケズリ後ナデ 底部内面に指圧痕 その他はナデ	-	0.1	7.5YR6/4 に近い褐色 7.5YR7/6 褐色	良	胎土に0.5~1mm次の赤色粒子を含む	9	
6	坏	トレンチ1 溝2	底径 10.3 器高 2.3	底部外面に指圧痕 その他はナデ	-	0.1~0.5	7.5YR6/4 に近い褐色 7.5YR7/4 に近い褐色	良		19	
7	坏	トレンチ1 溝2内土 (砂層)	底径 10.6 器高 2.6	底部外面に指圧痕後ナデ その他はナデ	-	0.1~1	5YR7/6 褐色 7.5YR7/1 明褐色	良		3	
8	坏	トレンチ9 15層	底径 12.7 器高 3.2	底部外面に指圧痕後ナデ その他はナデ	-	0.1~0.5	2.5YR/2 灰白色 2.5YR6/8 褐色	良	内外面に炭化附着物	2	
9	小皿	トレンチ1 溝1	底径 8.4 器高 1.8	底部外面はヘラケズリ後ナデ その他はナデ	-	0.1~1	7.5YR/6 淡黄褐色 7.5Y7/4 に近い褐色	良	胎土に0.5~2mm次の赤色粒子を含む	21	
10	小皿	トレンチ12 9層	底径 8.5 器高 1.4	底部外面はヘラケズリ後ナデ その他はナデ	-	0.5	7.5YR8/3 淡黄褐色 7.5YR8/6 淡黄褐色	良	胎土に1mm次の赤色粒子を含む	20	
11	土師質土器	小皿	トレンチ2 田舎溝上層	底径 16.0 器高 2.2	底部外面はヘラケズリ後ナデ 底部内面に指圧痕 その他はナデ	-	0.1~0.5	2.5Y7/2 灰黄色 10YR7/2 に近い黄褐色	良		12
12	小皿	トレンチ4 12層	底径 10.0 器高 2.2	底部外面はヘラケズリ その他はナデ	-	0.1~0.5	2.5YR/2 灰白色 2.5YR/2 灰白色	良		22	
13	高台付甕	トレンチ4 瓦石積層上	底径 8.7 台径 40 器高 21	ナデ	-	0.1~0.5	2.5Y4/1 灰白色 2.5Y7/1 灰白色	良		30	
14	高台付甕	トレンチ2 田舎溝上層	底径 10.9 台径 5.0 器高 3.1	ナデ	-	0.1	10YR8/4 淡黄褐色 10YR8/3 淡黄褐色	良		15	
15	高台付甕	トレンチ19 井戸状遺構	底径 13.1 台径 6.1 器高 4.0	口縁部にヨコナデ 体部外面に指圧痕 底部内面に重なり痕跡	-	1~2	5Y7/1 灰白色 7.5YR/1 灰白色	良		8	
16	高台付甕	トレンチ1 16層	底径 13.4 台径 4.4 器高 6.7	口縁部にヨコナデ 体部外面に指圧痕	-	1~2	10YR8/2 灰白色 2.5YR/2 灰白色	不良		27	
17	高台付甕	トレンチ1 建物溝1	底径 14.3 台径 5.7 器高 5.9	口縁部にヨコナデ 体部外面に指圧痕	-	0.5~5	2.5YR/1 灰白色 2.5YR/1 灰白色	良		29	
18	野付坏	トレンチ1 溝1	底径 9.4 台径 5.8 器高 -	腹部内面はヘラケズリ その他はナデ	-	1~1.5	2.5YR/1 灰白色 10YR5/2 灰白色	良		23	
19	甕坏 (蓋)	トレンチ7 9層	底径 10.8 器高 4.1	天弁部外面はヘラケズリ後ナデ その他は回転ナデ 天弁部内面に仕上げナデ	左	0.1~1	N7/ 灰白色 3PB6/1 青灰色	良		16	
20	甕坏 (蓋)	トレンチ12 9層	底径 10.8 つまみ径 21 かりり径 8.7 器高 3.0	天弁部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.1~1	N5/ 灰白色 5PB6/1 青灰色	良		1	
21	甕坏 (蓋)	トレンチ1 裏込め土	底径 15.5 つまみ径 24 かりり径 13.0 器高 2.7	天弁部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	N3/ 暗灰色 N8/ 灰白色	不良		18	
22	甕	トレンチ1 新築修復土	底径 17 つまみ径 1.7 器高 -	天弁部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1	N7/ 灰白色 5PB7/1 明黄褐色	良		15	
23	甕	トレンチ15 19層	底径 17 つまみ径 2.9 器高 -	天弁部外面は回転ヘラケズリ後 回転ナデ その他は回転ナデ	右	0.5~1	2.5Y7/1 灰白色 N6/ 灰色	良	有蓋高坪?	7	
24	高坏	トレンチ7 9層	底径 - 脚径 - 器高 -	坏部内面に回転ナデ後仕上げナデ 脚部内面に絞り痕 その他は回転ナデ	右	0.1~1	N6/ 灰色 N6/ 灰色	良		17	
25	長頸甕	トレンチ20 北側溝	口径 - 底径 17.0 器高 -	底部外面に平行叩き その他は回転ナデ 胎文は三段複合	右	0.5~1.5	5PB5/1 青灰色 3PB6/1 青灰色	良		5	
26	長頸甕	トレンチ20 北側溝	口径 13.7 底径 20.6 台径 - 器高 -	底部外面はヘラケズリ後回転ナデ 底部内面に突線痕 体部天弁部に回転筋溝痕 その他は回転ナデ 胎文は三段複合	右	0.5~2	N5/ 灰色 N7/ 灰白色	良		4	

第4章 発掘調査の成果

27		長瀬型 トレンチ15 北側溝	11径 - 直径 160 台径 - 器高 -	外部外面下半はヘラケズリ後回転ナゲ 底部内面に突起痕 その他は回転ナゲ	右	0.5-1	N5/ 灰色 S96/1 紫灰色	良		5
28		香 トレンチ2 雨落溝下側	口径 - 直径 220 台径 128 器高 -	外部外面下半はヘラケズリ後回転ナゲ 底部内面に指仕痕 その他は回転ナゲ	?	1	N6/ 灰色 N4/ 灰色	良		37
29	須恵器	長瀬型? トレンチ16 11層	口径 - 直径 - 台径 10.1 器高 -	外部外面下半はヘラケズリ後回転ナゲ その他は回転ナゲ	左	0.1-1	N7/ 灰白色 N7/ 灰白色	良		10
30		長瀬型? トレンチ16 P2	口径 - 直径 - 台径 12.0 器高 -	回転ナゲ	?	0.1-3	75Y6/1 灰色 N7/ 灰白色	良		11
31		水差し? トレンチ1 17層	11径 5.2 直径 11.8 器高 14.2	外部外面は縦方向のナゲ 底部外面はナゲ 底部内面に接合痕・突起痕有 その他は回転ナゲ	右	1	25Y8/2 灰白色 5Y8/1 灰白色	不良	注ぎ口有	25
32		薬 トレンチ1 溝3	11径 17.7 直径 - 器高 -	外部外面にカキメ 底部内面に同心円状で真鍮 その他は回転ナゲ	右	0.1-1	10YR4/1 黒灰色 10YR8/2 灰白色	不良	把手付薬?	24
33		(11層部) トレンチ1 溝1	-	口縁部を肥厚	-	精良	10Y7/1 灰白色 N7/ 灰白色	良		32
34	白磁	(口縁部) トレンチ15 11層	-	口縁部を肥厚	-	精良	5Y7/2 灰白色 5Y8/2 灰白色	良		31
35		(高台部) トレンチ1 溝1	直径 - 台径 5.7 器高 -	底部をヘラケズリ	-	精良	5Y7/2 灰白色 5Y8/1 灰白色	良		33

凡 例

「糖轆」…… ロクコの回転方向を示す

「胎土」…… 胎土に含まれる石英・長石などのおおよその大きさを示す。

「色調」…… 「標準土色帳1985年度後期版」を使用した。上段が外面、下段が内面の色調を示す。

图 版

1. 遺跡周辺航空写真
(昭和44年)



2. 昭和始め頃の礎石群
トレンチ1付近



3. 遺跡状況(調査前)





1. 建物Ⅰ-トレンチ1
基壇南辺(西から)



2. 建物Ⅰ-トレンチ1
基壇南辺(東から)



3. 建物Ⅰ-トレンチ1
基壇南東端外装
(東から)

1. 建物 I - トレンチ 1
礎石据え付けの
掘り方



2. 建物 I - トレンチ 1
くさびが打ち込まれた
礎石



3. 建物 I - トレンチ 1
基壇西辺雨落溝
(南から)





1. 建物Ⅰ-トレンチ1
瓦積暗渠(東から)



2. 建物Ⅰ-トレンチ1
好壁出土状況



3. 建物Ⅰ-トレンチ2
瓦溜り(西から)

1. 建物Ⅰ-トレンチ2
瓦溜り(東から)



2. 建物Ⅰ-トレンチ4
基壇東辺中央
(東から)

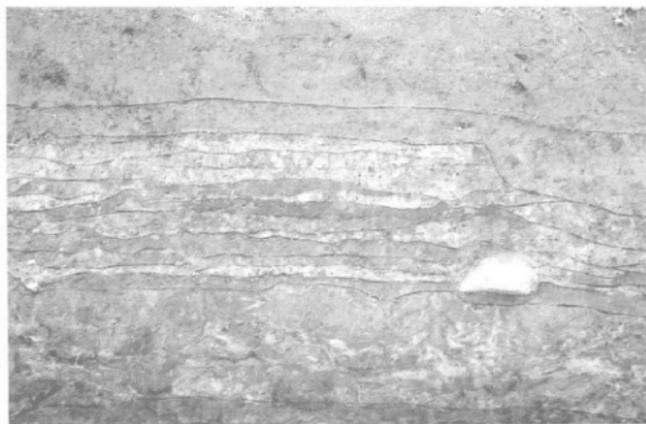


3. 建物Ⅰ-トレンチ4
基壇東辺中央
(北から)





1. 建物Ⅱ-トレンチ6
基壇版築状況
(東から)



2. 建物Ⅱ-トレンチ6
基壇版築断面
(東から)

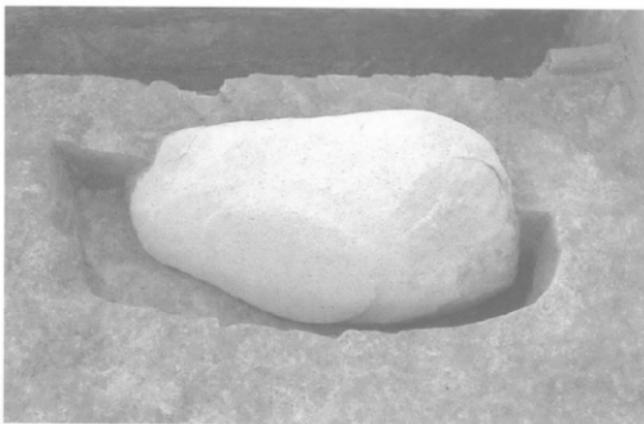


3. 建物Ⅱ-トレンチ7
基壇北東部礎石
出土状況(南から)

1. 建物Ⅱ-トレンチ7
礎石近接(南から)



2. 建物Ⅱ-トレンチ8
礎石近接(南から)



3. 建物Ⅱ-トレンチ8
基壇南東部状況
(南から)





1. 建物Ⅱ-トレンチ9
基壇南西部状況
(北から)



2. 建物Ⅱ-トレンチ21
東壁断面(東から)



3. 建物Ⅰ周辺部
トレンチ11東壁

1. 建物Ⅰ周辺部
トレンチ13東壁



2. 建物Ⅱ周辺部
トレンチ5全景



3. 建物Ⅱ周辺部
トレンチ10西壁





1. 建物Ⅱ周辺部
トレンチ12全景
(北から)



2. 寺城北西部
トレンチ20全景
(北から)

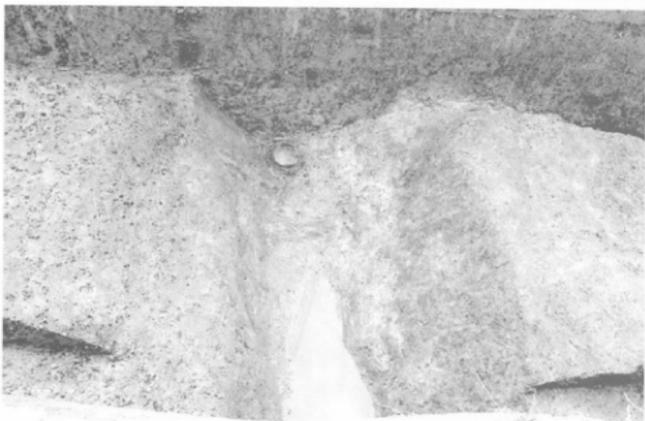
1. 寺城北西部
トレンチ14全景
(東から)



2. 寺城北西部
トレンチ15全景
(南から)



3. 寺城北西部
北側溝(トレンチ15)





1. 寺城北東部-トレンチ16
掘立柱列(北から)



2. 寺城北東部-トレンチ16
ビット2柱痕検出状況
(北から)



3. 寺城北東部-トレンチ17
ビット3(北から)

1. 寺域北東部
トレンチ22北壁
(北から)



2. 寺域東端部
トレンチ18全景
(西から)



3. 寺城南東部
トレンチ19南半





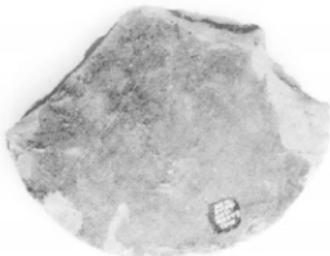
1. 寺城南東部-トレンチ19
井戸状遺構



2. 調査風景
(トレンチ2)



3. 調査風景
(トレンチ15)



1

軒丸瓦 I 型式



2

軒丸瓦 I 型式



3

4

5

軒丸瓦 II 型式

軒丸瓦 II 型式

軒丸瓦 II 型式



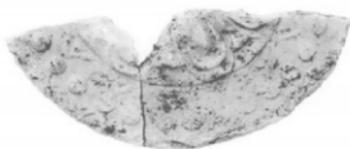
軒丸瓦Ⅲ型式

10



軒丸瓦Ⅲ型式

6



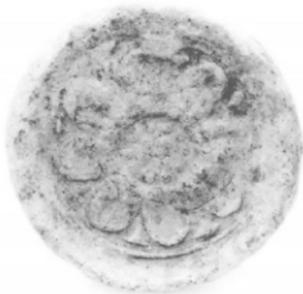
軒丸瓦Ⅲ型式

11



軒丸瓦Ⅲ型式

9

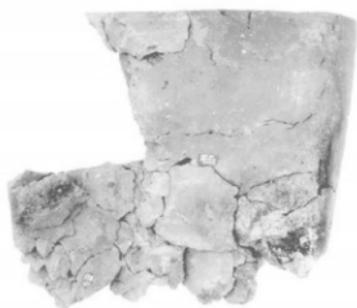


軒丸瓦Ⅳ型式

13



14



軒平瓦 I 型式



16



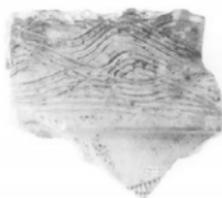
20



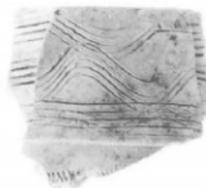
21



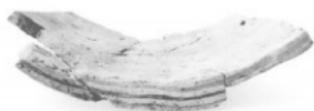
軒平瓦 I 型式



軒平瓦 II 型式



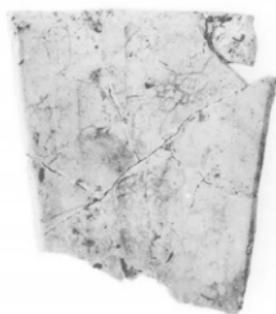
軒平瓦 II 型式



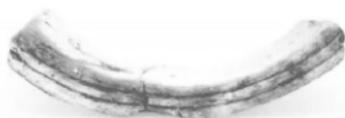
28



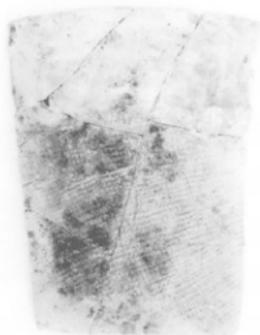
軒平瓦 III 型式



23



30



軒平瓦 II 型式



軒平瓦 IV 型式



丸瓦 I 型式

33



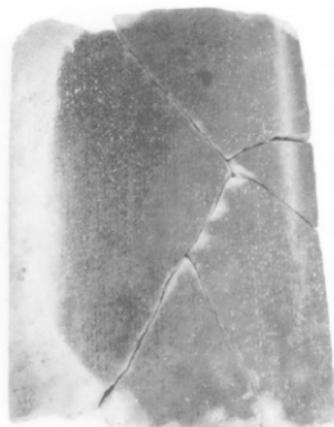
丸瓦 I 型式

35



40

平瓦 II A 型式



53

平瓦 IV 型式



埤



量表状压痕



須惠器 杯蓋

20



須惠器 長頸壺

27



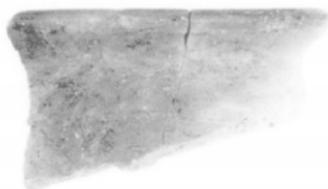
須惠器 長頸壺

26



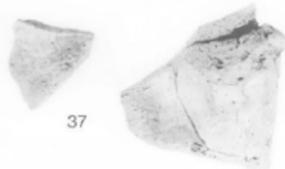
須惠器 長頸壺

25



須惠器 甕

32



綠釉陶器

37

36



土師器 皿

5



土師器 杯

6



土師器 杯

7



土師器 杯

8



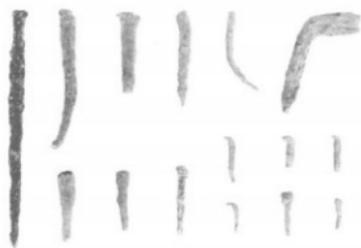
土師質小皿

10

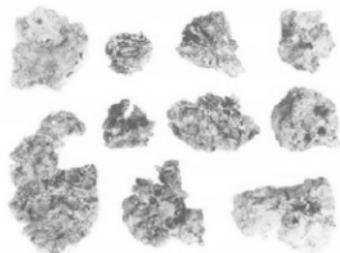


土師質椀

15



鉄製品



炉壁の破片

報告書抄録

ふりがな	ひばたはいじ							
書名	日畑廃寺							
副書名								
巻次								
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	小野雅明・福本明・藤原好二・鍵谷守秀							
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター							
所在地	〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地 TEL086-454-0600							
発行年月日	平成17年3月31日							
所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひばたはいじ 日畑廃寺	おかやまけんくろしきし 岡山県倉敷市 ひばた 日畑	33202	01-161	34° 39' 25"	133° 49' 51"	20030902～ 20031218 20040422～ 20040710	556㎡	寺域及び伽藍配置の確認のため
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
日畑廃寺	寺院跡	白鳳時代 奈良時代 平安時代	講堂跡1棟 礎石建物跡 掘立柱列 溝・土壇	瓦・埴・土師器 須恵器・釘・炉壁				

印刷仕様

- 紙 質 表紙：サンマット160kg (PP張り)
本文：書籍用紙65kg
図版：マットアート110kg
- D T P Mac OS 10.2.3 Adobe InDesign 2.0 Adobe Photoshop7.0
- 使用フォント モリサワ OpenType フォント
(リュウミン L-KL・中ゴシック BBB・太ミン A101・
太ゴシック B101・見出ミン MA31)
- 製 本 無線綴じ

日畑廃寺

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第11集

平成17年3月31日印刷発行

発行 倉敷市教育委員会

編集 倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 倉敷市福田町古新田940番地

TEL.086-454-0600

The Excavation Report
Of
HIBATA HAIJI In Sho

Volume 11

Kurashiki
Archaeological Center

March 2005